

# 筒江大垣遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道 春日和田山道路II建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20(2008)年3月

兵庫県教育委員会

朝来市

# 筒江大堰遺跡





遠景（西から粟鹿山を望む）



遠景（東から）

## 巻首カラー図版2



遠景（西から竹田城跡を望む）



近景（西から）



I区全景



I区全景（西から）

巻首カラー図版4



IV区上層遺構



IV区下層遺構

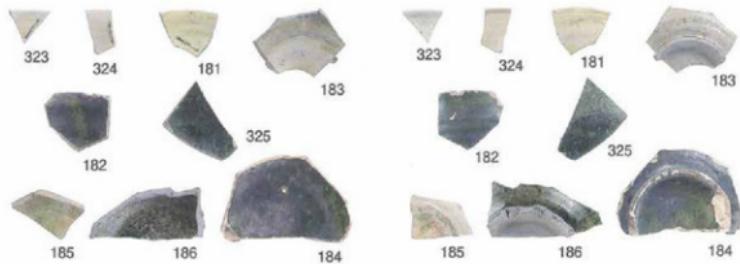


W52

出土漆器椀



出土綠釉陶器



出土綠釉陶器

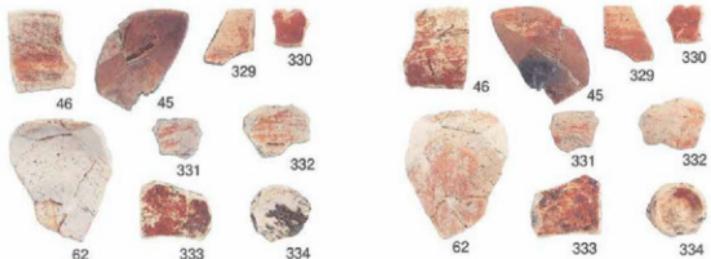
# 巻首カラー図版6



出土灰釉陶器



出土灰釉陶器



出土赤彩土師器

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県朝来市和田山町所在の筒江大垣遺跡（つつえおおがきいせき）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業に伴い、国土交通省（2001年以前は建設省）の依頼を受けて、平成8年度から平成13年度まで兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 報告書作成にかかる整理作業は国土交通省の依頼を受けて、平成18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施し、平成19年度には名称変更した兵庫県立考古博物館が引き続き実施した。
4. 調査に際しては、株式会社サンヨー（平成11年度）、株式会社八州（平成12年度）、株式会社かんこう（平成13年度）に空中写真測量を委託し、空中写真・遺構配置図を本報告書で使用した。
5. 遺物写真は（株）タニゲチ・フォトに委託して撮影したものを使用した。空中写真以外の遺構写真等は調査担当者によるものである。
6. 掲載した図については、地形図については国土地理院発行のもの、国土交通省提供のもの、旧山東町教育委員会提供のものを使用した。その他の図に関しては調査担当者、調査補助員及び嘱託職員の手によるものである。
7. 木製品の樹種同定は株式会社古環境研究所に依頼して報告を掲載した。その他の執筆は調査担当者および整理担当者によるものである。執筆分担は月次に掲載している。また、本書の編集は前山三枝子、加藤裕美の補助の元、別府がおこなった。
8. 出土した金属器・木製品の保存処理は岡本一秀が担当しておこなっている。
9. 出土した木簡、墨書き器の釈文は大手前大学、小林基伸氏にご教示願った。
10. 発掘調査・報告書作成に際しては、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所、朝来郡広域行政事務組合（当時）、朝来市教育委員会の方々にはお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。また、細川晋太郎、首藤崇志、安達まゆみをはじめ発掘調査に従事していただいた皆さんにも、改めて感謝いたします。
11. 発掘調査中、整理作業中には以下の方々に様々な御指導、御教示を受けました。記して感謝の意を表します。（順不同、敬称略）  
田舎　基（朝来市教育委員会）、中島雄二（朝来市教育委員会）、高橋照彦（大阪大学）、青木哲哉（立命館大学）

# 目 次

## 本文目次

### 第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置.....	1 (池田正男)
第2節 歴史的環境.....	1 (池田)

### 第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯.....	9 (別府洋二)
第2節 調査の経過.....	9 (別府)

### 第3章 調査

第1節 I区の調査.....	11 (別府)
----------------	---------

1. 概要
2. 遺構
3. 小結

第2節 II区の調査.....	13 (別府)
-----------------	---------

1. 概要
2. 遺構
3. 小結

第3節 III区の調査.....	15 (別府)
------------------	---------

1. 概要
2. 遺構
3. 小結

第4節 IV区の調査.....	18 (別府)
-----------------	---------

1. 概要
2. 遺構
3. 小結

第5節 V区の調査.....	19 (別府)
----------------	---------

1. 概要
2. 遺構
3. 小結

第6節 VI区の調査.....	21 (岸本一宏)
-----------------	-----------

1. 概要
2. 遺構
3. 小結

### 第4章 遺物

第1節 土器.....	23 (別府・岸本)
-------------	------------

第2節 増輪.....	35 (岸本)
-------------	---------

第3節 木製品.....	36 (別府)
--------------	---------

第4節 石製品.....	42 (別府)
--------------	---------

第5節 金属製品	43 (別府)
第5章 兵庫県筒江大垣遺跡における樹種同定	45 (株式会社古環境研究所)
第6章 まとめにかえて	50 (別府)
第1節 遺跡の立地について	
第2節 遺構・遺物について	

## 挿図目次

図1 V区谷内出土製塙土器	35	図2 筒江大垣遺跡の木材 I	48
図3 筒江大垣遺跡の木材 II	49		

## 表 目 次

表1 筒江大垣遺跡における樹種同定結果	47
表2 出土遺物観察表	52

## 図版目次

図版1 局辺の遺跡 仕切り紙の裏に一覧表	図版30 V区遺構配置図
図版2 局辺の地形 (同場整備前の状況)	図版31 掘立柱建物 SBV-1・V-5
図版3 調査範囲図	図版32 掘立柱建物 SBV-2
図版4 調査全図	図版33 掘立柱建物 SBV-3・V-4
図版5 I区の地形と基本土層図	図版34 掘立柱建物 SBV-6
図版6 I区遺構配置図	図版35 掘立柱建物 SBV-21
図版7 溝 SD I-1	図版36 掘立柱建物 SBV-22・土坑・柱穴
図版8 掘立柱建物 SB I-1・I-2	図版37 VI区遺構配置図と井戸 SEVI-1
図版9 掘立柱建物 SB I-3・I-4	図版38 出土土器 1 (I区)
図版10 掘立柱建物 SB I-5・I-6	図版39 出土土器 2 (I・II区)
図版11 掘立柱建物 SB I-7・柱穴	図版40 出土土器 3 (II区)
図版12 II区の地形と基本土層図	図版41 出土土器 4 (II区)
図版13 III・IV・V・VI区全図	図版42 出土土器 5 (III区)
図版14 III区の地形と基本土層図	図版43 出土土器 6 (IV区)
図版15 III区遺構配置図	図版44 出土土器 7 (V区)
図版16 掘立柱建物 SBIII-1	図版45 出土土器 8 (V・VI区)
図版17 掘立柱建物 SBIII-2・III-3	図版46 出土埴輪
図版18 掘立柱建物 SBIII-4・III-5	図版47 出土木器 (I区)
図版19 掘立柱建物 SBIII-6・III-7	図版48 出土木器 (I区)
図版20 掘立柱建物 SBIII-8・柱穴	図版49 出土木器 (II区)
図版21 掘立柱建物 SBIII-9・溝	図版50 出土木器 (II区)
図版22 井戸 SKII-1	図版51 出土木器 (II区)
図版23 土坑	図版52 出土木器 (II区)
図版24 IV区遺構配置図	図版53 出土木器 (III区)
図版25 掘立柱建物 SBIV-1	図版54 出土木器 (V区)
図版26 掘立柱建物 SBIV-2	図版55 出土石器 (I・II・III区)
図版27 下層遺構 SBIV-21	図版56 出土石器 (IV・VI区)
図版28 下層遺構 SBIV-22	図版57 出土金属器
図版29 V区の地形と基本土層図	

## 卷首写真図版目次

卷首カラー図版1

遠景（西から栗鹿山を望む）、遠景（東から）

巻首カラー図版2

遠景（西から竹田城跡を望む）、近景（西から）

巻首カラー図版3

I区全景、I区全景（西から）

卷首カラーバンパ4

IV区上層遺構、IV区下層遺構

卷首カラー図版5

出土漆器、出土灰陶器、出土綠釉陶器

卷首カラー図版6

出土灰陶器、出土灰陶器、出土赤彩土師器

## 遺構写真図版

写真図版1 遠景

遠景（西から栗鹿山を望む）

遠景（東から）

写真図版2 遠景

遠景（南から）

遠景（東から遠阪峠を望む）

写真図版3 全景

写真図版4 全景

I・II・III区全景

I区全景

写真図版5 I区

I区全景（東から）

I区全景（西から）

写真図版6 I区

溝SD I-1（南から）、溝SD I-1（南から）

溝SD I-1（北から）、溝SD I-1（北から）

写真図版7 I区

溝SD I-1堆積状況（南から）

溝SD I-1木製品出土状況

溝SD I-1木製品出土状況

写真図版8 I区

掘立柱建物SB I-1（北から）

掘立柱建物SB I-2・I-3（南から）

掘立柱建物SB I-2・I-3（西から）

写真図版9 I区

掘立柱建物SB I-4・I-5・I-6・I-7（東から）

掘立柱建物SB I-4・I-5（東から）

掘立柱建物SB I-4・I-5（南から）

写真図版10 I区

掘立柱建物SB I-6・I-7（西から）

掘立柱建物SB I-6・I-7（北から）

I区東半部（西から）

写真図版11 I区

柱穴P1002上面、P1002土師器出土状況

柱穴P1003土師器出土状況、P1045

柱穴P1046、P1015鉄滓出土状況

柱穴P1055鉄滓出土状況

P1047輪形鉄滓出土状況

写真図版12 II区

II区全景

II区全景（東から）

流路土層断面（西から）

写真図版13 II区

作業状況（東から）、上層杭列

上層杭列、上層杭列断ち割り状況

流路内土器出土状況、流路内土器出土状況

写真図版14 II区全景

写真図版15 II区

II区全景（西から）

II区全景（東から）

写真図版16 II区

掘立柱建物SB III-1・III-2・III-3・III-4（北から）

掘立柱建物SB III-4・III-5（南から）

掘立柱建物SB III-4・III-5（東から）

写真図版17 II区

掘立柱建物SB III-1（南から）

SB III-1 P5内根石検出状況

SB III-1 P76内上器出土状況

写真図版18 III区

掘立柱建物SB III-2（東から）

SB III-2 P14常滑出土状況

SB III-2 P24常滑出土状況

写真図版19 III区

掘立柱建物SB III-3～9（北から）、

掘立柱建物SB III-5～8（南西から）

掘立柱建物SB III-5～9（南東から）、

SB III-8 P73・74（北西から）

SB III-8 P73、SD III-8 P74

SB III-8 P190、SB III-7 P75

写真図版20 III区

井戸SK III-1（西から）

井戸SK III-1（北から）

井戸SK III-1土層断面（南から）

写真図版21 III区

井戸SK III-1上層断面（北から）

SK III-1出土漆器

SK III-1出土漆器

写真図版22 III区

土塙墓SK III-2（南から）

土塙墓SK III-2上層断面（南から）

土塙墓SK III-1（東から）

写真図版23 III区

- 土坑 SKIII - 6  
 土坑 SKIII - 3  
 土坑 SKIII - 5  
 写真図版24 III区  
     溝 SDIII - 1 (南東から)  
     溝 SDIII - 2 (南から)  
     III区北端の格ち込み (南から)  
 写真図版25 IV区  
     IV区上層全景 (北東から)  
     IV区上層全景 (南東から)  
 写真図版26 IV区  
     掘立柱建物 SBIV - 1 (東から)  
     掘立柱建物 SBIV - 2 (南から)  
 写真図版27 IV区  
     SBIV - 1 P20土層断面、  
     SBIV - 1 P26土層断面  
     SBIV - 1 P27土層断面、  
     SBIV - 1 P31土層断面  
     SBIV - 1 P32土層断面、  
     SBIV - 1 P24土器出土状況  
     SBIV - 1 内P101土器出土状況、  
     SBIV - 2 内P124土器出土状況  
 写真図版28 IV区  
     下層全景 (南から)  
     SBIV - 21・IV - 22 (南から)  
 写真図版29 IV区  
     SBIV - 21 (東から)  
     SBIV - 22 (東から)  
 写真図版30 IV区  
     IV区下層北壁 (南から)、  
     SD201遺物出土状況 (北から)  
     SBIV - 21 P203土層断面 (南から)、  
     SBIV - 21 P222上層断面 (東から)  
     SBIV - 21 P202土層断面 (東から)、  
     SBIV - 21 P223下層断面 (東から)  
 写真図版31 V区  
     V区全景 (西から)  
     V区全景 (北から)  
 写真図版32 V区  
     V区西半部 (北から)  
     SBV - 1・V - 5 (北から)  
 写真図版33 V区  
     SBV - 3・V - 4 (北から)  
     SBV - 2 (南から)  
 写真図版34 V区  
     SBV - 5 (西から)  
     SBV - 1 (北から)  
 写真図版35 V区  
     SKV - 1 上層断面 (北西から)  
     SKV - 1 石検出状況 (北西から)  
     SKV - 1 完掘状況 (北西から)  
 写真図版36 V区  
     SBV - 22 (北西から)  
     SBV - 21 (北西から)

- 写真図版37 V区  
     SBV - 21 P691土層断面 (北東から)、  
     SBV - 21 P807上層断面 (北東から)  
     SBV - 21 P808上層断面 (北東から)、  
     SBV - 21 P809土層断面 (北東から)  
     V区谷部土層断面 (南西から)、  
     V区谷部掘削状況 (西から)  
 写真図版38 VI区  
     VI区全景 (北東から)、VI区全景 (南西から)  
     VI区北東部柱穴群 (北西から)、  
     井戸 SEVI - 1 遺物検出状況 (北西から)  
     井戸 SEVI - 1 底部確認検出状況 (北西から)、  
     井戸 SEVI - 1 完掘状況 (北西から)  
 写真図版39 I区出土土器1  
 写真図版40 I区出土土器2  
 写真図版41 I区出土土器3  
 写真図版42 I区出土土器他4  
 写真図版43 II区出土土器1  
 写真図版44 II区出土土器2  
 写真図版45 II区出土土器他3  
 写真図版46 II区出土土器4  
 写真図版47 II区出土土器5  
 写真図版48 III区出土土器1  
 写真図版49 III区出土土器2  
 写真図版50 IV区出土土器1  
 写真図版51 IV区出土土器他2  
 写真図版52 IV区出土土器3  
 写真図版53 V区出土土器1  
 写真図版54 V区出土土器2  
 写真図版55 V区出土土器他3  
 写真図版56 V区出土土器4  
 写真図版57 V区出土土器5  
 写真図版58 V・VI区出土土器他6  
 写真図版59 出土埴輪  
 写真図版60 I区出土木器1  
 写真図版61 I区出土木器2  
 写真図版62 II区出土木器1  
 写真図版63 II区出土木器2  
 写真図版64 II区出土木器3  
 写真図版65 II区出土木器4  
 写真図版66 III区出土木器  
 写真図版67 V区出土木器  
 写真図版68 出土石器1  
 写真図版69 出土石器2  
 写真図版70 出土金属器他1  
 写真図版71 出土鉄津他2

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 遺跡の位置

筒江大垣遺跡の所在する和田山町は、2005（平成17）年4月1日、朝来郡生野町、和田山町、山東町、朝来町の4町が合併して、朝来市となった。

朝来市は、兵庫県北部、但馬地方の南端に位置し、山間部にある。この山間部を、但馬最大の河川、円山川は、朝来市生野町円山に端を発し、但馬地域の西部を北に流れ、豊岡市津居山で日本海に注ぐ、延長67.309mの1級河川である。円山川の流域には広い谷底平野が発達し、また、この川に注ぐ支流河川が狭長な谷を刻み、複雑な地形を生み出している。

和田山町は、合併後市役所が置かれ、南但馬地域の商業活動の中心地である。鉄道は、山陰本線と播但線、国道は、京都・阪神間からの国道9号線と姫路からの国道312号が合流する。また、円山川は、和田山町和田山で東方からの与布土川と合流、さらに中流・下流域へと北上するなど、この地は南但馬の交通・交易の要衝の地である。

筒江大垣遺跡は、和田山町筒江に所在する。その地理的環境について触れると、和田山町と山東町との境界近く、北に旧但馬国、養父市と東に旧丹波国、兵庫県丹波市、京都府大津市夜久野町に隣接する。円山川と与布土川とに挟まれた南の山塊に立地する。この山塊は、朝来山・金梨山・梶原山などによって形成され、西に「加都千石」と称された和田山盆地と東に山東盆地がある。そして、梶原山と金梨山の間に宝珠峠があり、この峠を中心にして、山東町大月から宝珠峠・筒江・安井にいたる東西の断層線が見られる。安井川や黒川は、おおむねこの断層線上を流れ、峠道は断層線上を通る。

遺跡は、この宝珠峠を西に下った梶原山の尾根先端から谷部に立地している。梶原山頂には北治城跡が、枝尾根上には、茶すり山古墳が立地する。

## 第2節 歴史的環境

平成7年度以降、播但連絡道路と北近畿豊岡自動車道春日和田山道路の建設に伴い、多くの発掘調査が行われ、記録保存された。その調査成果を軸に、概要のみを記していきたい。

### 古墳時代

古墳時代、前方後円墳の築造された時代を前期（3世紀後半～4世紀後半）、中期（4世紀後半～5世紀後半）、後期（5世紀末葉～6世紀末葉）の3時期に区分して、さらに前方後円墳が造られなくなつて以降、古墳の造営が続く期間を終末期（7世紀）とする。

**在地の古墳** 弥生時代後期から古墳時代にかけて和田山町や山東町の独立丘陵を含む、丘陵尾根筋等に、階段状に十数基以上が群在する、墳墓・古墳が分布している。特徴として、墳丘は低位であり、墳形は主に円墳を呈するが、占地に制約を受け、多くは明確な形をとらない。一つの尾根筋に複数の墳墓・古墳を築き、同一の墳丘内に、小形竪穴式石室・組合せ式箱形石棺・木棺墓・壺棺墓など埋葬形式の異なる内部主体を複数有する。墓碑の切り合いはあまりない。副葬品を持つもの、持たないものがある。持つ古墳からは、土器、鉄器、玉製品などが少量出土、そこに被葬者の優劣を認めない、などである。このような古墳群は、一般的に「在地性の強い小規模古墳群」（以下「在地の古墳」と記述する）と言わされている。特色のある古墳について時系列に沿って羅列しておきたい。

古墳時代前期前半：群在する古墳の中に、5mを越える長大な木棺や銅鏡を副葬する古墳

和田山町向山古墳群向山2号墳は、方形の墳丘に主体部3基（木棺2基、堅穴式石室1基）が並列して検出された。中心主体である第2主体部、堅穴式石室は、墓塚の規模、長さ3.46m、幅2.57m、石室の規模、長さ1.92m、最大幅0.52mを測る。墓塚内の西側付近に完形の二重口縁壺2個を据え、副葬品として、銅鏡1面（4片に割れた内行花文鏡）、ヤリガンナが出土。

山東町若水古墳群若水A11号墳は、楕円形の墳丘内に主体部2基（箱形木棺）を有する。中心主体である第1主体部は、二段墓塚状を呈し、その規模、長さ約10m、幅約5m、箱形木棺の規模、長さ約6.0m、幅約1.0mを測る。木棺は小口部両端に石積みを施し、その石積みに挟まれた約3mの空間が遺骸埋葬スペースである。副葬品は、銅鏡2面・飛禽鏡・内行花文鏡、刀子（？）が出土。

第2主体部は、二段墓塚状を呈し、墓塚規模、長さ約7m、幅約4m、木棺は、第1主体部同様、小口の両端に石積みを行なう箱形木棺である。その規模は、長さ約5.5m、幅約0.8mを測る。副葬品は、刀子、ガラス小玉が出土。

前期後半：棺内に銅鏡を有する古墳

山東町新堂見尾1号墳は、石棺内より、重圓文鏡1面、同馬場19号墳は、木棺内より方格規矩鏡1面が出土。

中期前半：副葬品を持つ古墳、持たない古墳

和田山町梅田古墳群は、中期に築造を始め、30数基で構成される後期中葉に終焉する古墳群である。

梅田1号墳は、墳形は不明瞭、墳丘内に主体部1基（木棺）。墓塚規模は、長さ7.4m、幅2.2m、木棺の規模、長さ5.0m、幅0.6mを測る。副葬品は、土師器・壺・高杯、銅鏡1面・四葉乳文鏡、大刀・刀子・穂摘み具・鉄鎌・鉄斧・鉄鎌・針・勾玉・管玉・臼玉・琴柱形石製品、櫛・堅櫛が出土。

梅田15・16・17号墳は、標高171mの主尾根上の平坦地に、区画溝によって独立する古墳である。15号墳は、楕円形を呈し、主体部4基（石棺3基、木棺1基）を有する。中心主体部であるSX01は、墓塚の規模は、長さ3.42m、幅2.26m、石室の規模、長さ1.56m、最大幅0.39mを測る。棺内からは、身長約147cm、年齢25歳から30歳と推定される完全な形の女性人骨が出土した。副葬品は、ヤリガンナ、勾玉が出土。その他の主体部からは、副葬品は無い。

16号墳は、長方形を呈し、主体部4基（木棺）を有する。墳頂中央のSX01は、墓塚規模、長さ3.54m、幅不明、小口板が側板の内側に挟みこまれる「H」字形構造の木棺、その規模、長さ1.86m、最大幅0.52mを測る。棺内からは、刀子が出土、同じ墳頂中央のSX02は、墓塚規模、長さ3.76m、幅1.39m、SX01と同じ「II」字形構造の木棺、棺内雑宝である。その規模は、長さ2.42m、最大幅0.52mを測る。副葬品は、刀子が出土、その他の主体部からは、副葬品は無い。

17号墳は、方形を呈し、主体部1基（削竹形木棺）である。墓塚規模は、長さ4.88m、幅2.42m、木棺の規模、長さ4.54m、最大幅0.54mを測る。副葬品は無い。

和田山町中山古墳群中山23号墳は、茶すり山古墳に接する丘陵の頂上に立地する、直径約27mの円墳である。主体部1基（箱形木棺）、墓塚規模、長さ8m、幅3.5m、木棺の規模、長さ6.9m、幅0.5mを測る。副葬品は、銅鏡1面・内行花文鏡、劍・ヤリガンナ・鉄斧が出土。

中期後半：長大な木棺と銅鏡を副葬する古墳、副葬品として、馬具、鉄製武器・農工具、装身具を多く持つ古墳

梅田28号墳は、円形を呈し、主体部1基（木棺直葬）である。墓塚の規模、長さ約3.5m、幅0.93m、

木棺規模、長さ2.96m、幅0.50mを測る。副葬品として、白玉、鉄鎌・鉄鎌・鉄斧・鉄鉢・櫛・堅櫛が、墳丘斜面から、大刀・刀子・轡・不明鉄製品が出土。

向山5号墳は、墳形は不明瞭である。主体部1基（箱式石棺）、墓壙の規模、長さ4.3m、幅2.59m、石棺の規模（内法）、長さ1.85m、幅0.47mを測る。墓壙内から、土器器・高杯・鉄鎌・刀子・ヤリガンナ、副葬品として、刀・短刀・鉄鎌が出土。

向山11号墳は、墳形は不明瞭である。主体部2基（小石室・箱式石棺）、中心主体の第2主体部は、墓壙の規模、長さ3.44m、幅1.73m、箱式石棺の規模（内法）、長さ1.83m、幅0.45mを測る。墓壙上層から鋏先、墓壙内から須恵器・杯身（ON-46～TK-208型式併行期）、ヤリガンナ・簪・不明鉄製品、副葬品として、白玉、劍・鉄鎌・刀子・斧が出土。墓壙内に須恵器を供獻する初期の例である。

市条寺1号墳は、墳丘は半円形を呈し、主体部1基（箱式石棺）、墓壙の規模、長さ4.55m、幅2.40m、石棺の規模（内法）、長さ2.04m、幅0.43mを測る。墓壙上層から土器器・高杯・白玉・砥石・鉄鎌・ヤリガンナ・鉄斧・鑿・棒状鉄製品・針状鉄製品、副葬品として、劍・鉄鎌・毛抜きが出土。

#### 後期：墓壙内・棺内に須恵器を有する古墳

梅田3号墳は、梅田1号墳に近接する円墳。主体部3基（木棺）、第1主体部の墓壙規模は、長さ2.9m、幅0.8m、棺の規模、長さ2.5m、幅0.7mを測る。棺内から、土器器として使用した可能性のある須恵器・杯蓋・杯身（TK-10型式併行期）、銅鏡1面・乳文鏡、大刀・刀装具・刀子・鉄鎌が出土。

向山8号墳は、円形に近い墳形。主体部4基（第1・2主体部・箱式石棺、第3・4主体部・木棺）、第3主体部は、墓壙の規模、長さ3.08m、幅1.35m、木棺の規模、長さ1.71m、幅0.43mを測る。墓壙内棺外から須恵器・杯身・杯蓋（TK-10～TK-43型式併行期）が出土。棺内から副葬品は無い。

#### 終末期：最終末の「在地の古墳」

向山11号墳の第1主体部は、墓壙の規模、長さ2.57m、残存幅1.47m、小石室の規模（内法）、長さ1.77m、残存幅0.77mを測る。副葬品として須恵器・高杯・蓋（TK-209型式併行期）が出土。

初期ヤマト政權の古墳 白石太一郎氏は、古墳について「発生期の古墳は、前方後円（方）墳という定型化した墳丘をもち、埋葬施設も墓壙内に納めた長い削竹形木棺を共通の約束にもとづいて構築された堅穴式石室で被覆するものであり、副葬品もまた多量の鏡を中心に武器・武具・農工具、それに装身具という共通の組合せからなるもので、極めて画一的な内容をもつものである。」（日本古墳文化論』『講座日本歴史1』）と記している。この観点に立って、必ずしも発生期の古墳を構成する必要条件を満たすものではないが、朝来市内の下記の古墳を取り上げてみた。

前期後半：和田山町域の山古墳は、丘陵突端に立地する径約36mの円墳である。外部施設として、葺石状の造構がある。主体部は、1基（箱形木棺）、墓壙の規模、長さ8.9m、幅2.9m、木棺の規模、長さ6.43m、幅0.6mを測る。棺内からは、銅鏡6面・三角縁獸文帶三神三獸鏡2面・三角縁波文帶三神三獸鏡1面・青蓋作四獸鏡1面・唐草文帶重圓文鏡1面・方格規矩八禽鏡1面・石製品（琴柱形石製品・石製合子・石鏡）、刀劍類・玉類・工具類が出土。

中期：中期初頭の池田古墳は、城の山古墳の直下の低位な丘陵上に立地し、但馬地方最大であり、県下第3位の規模をもつ全長136mの前方後円墳。葺石、埴輪、盾形周濠を有する。墳丘は3段築成、後円部上段が後世に削平されたため、内部主体等は全く不明である。

池田古墳に後続する茶すり山古墳は、丘陵枝尾根上に立地する径約90m円墳である。外部施設に葺石、埴輪を有し、主体部2基（組合式箱形木棺）がやや並列して埋葬された。『茶すり山古墳調査概報』に

よると、第1主体部は、墓壙の規模、長さ13.7m、幅10.5m、木棺の規模、長さ約8.7m、幅約1mを測る。棺内からは、銅鏡3面・熊龍鏡・神獸鏡・連弧文鏡、甲冑類、刀劍類、玉類、鐵鏡、盾、工具類、櫛・堅拂、不明鉄製品など総数1,767点、第2主体部は、墓壙の規模、長さ約7.5m、幅約3.7m、木棺の規模、長さ約4.8m、幅約0.6mを測る。棺内からは、銅鏡・獸帶鏡、刀劍類、玉類、鐵鏡、工具類、櫛・堅拂、不明鉄製品など総数832点が出上る。

中期後半：朝来町船宮古墳は、平地に立地する全長約91mの前方後円墳である。外部施設として葺石、埴輪、盾形周濠がある。内部主体は未調査である。

中期末から後期前半：前方後円墳としては、和田山町岡田に長塚古墳（前方後円墳、全長70m）、小丸山古墳（前方後円墳、全長59m、埴輪）がある。

ヤマト政権の古墳 横穴式石室は、畿内では6世紀に入つて古墳の普遍的な埋葬施設となり、多量の須恵器、馬具、金銅製武器、装身具などの副葬が一般化する。但馬における横穴式石室は、後期中葉に導入された。大きく捉えると、「在地の古墳」の終焉と横穴式石室の導入・普遍化という図式になる。横穴式石室墳は、山腹・平野部に立地し、初期の古墳としては、加都王塚古墳（円墳、南北径22m、東西径19m）や、6世紀後半から7世紀前半に營まれた養父市大藪古墳群（禁裡塚古墳・塚山古墳・西の岡古墳・コウモリ塚古墳）、戊辰年（608）銘大刀を副葬していた同市糞谷古墳群、朝来市内では、池の瀬古墳群、西谷古墳群、迫間古墳群、奥山古墳群、梅ヶ迫古墳群がある。大同寺古墳群から陶棺2基、大谷2号墳から陶棺片、仏具である銅鏡が出土した。

終末期：7世紀後半から8世紀初頭に、和田山町上ヶ山古墳群は、小規模の横穴式石室を築き、終末をむかえる。

集落 和田山盆地・加都遺跡、山東盆地・柿坪遺跡・栗鹿遺跡が盆地中央に立地する。古墳時代前期から柿坪遺跡が、中期から後期にかけて栗鹿遺跡・加都遺跡が營まれた、集落遺跡である。

加都遺跡は、円山川右岸に南北に長く延びる微高地に、堅穴住居跡や掘立柱建物跡が、宮ヶ田地区・新水北地区の湿地帯では畦畔や溝・井堰などが確認され、水田が營まれた。集落は、中期初頭に成立し、取縮しつつ5世紀中ごろ、井堰を設け、杭や板材などで補強した畦畔などをもって低地部の開発を行う。堅穴式住居内に造り付けの竈が導入される。中期後半以降徐々に住居数が減少し、後期には集落は消滅する。ただし、これまで集落内には見られなかった比較的大規模な縦柱建物が現れる。

柿坪遺跡は、三保川と栗鹿川とが柿坪の下流で合流し、栗鹿川となって北流する。三保川の氾濫原上に形成された水田地と微高地上に展開された集落跡である。居住域には、堅穴住居約150棟が、掘立柱建物跡は約34棟が検出された。堅穴住居跡は、正方形に近いものと、長方形のものがある。住居の規模は、床面積が最も大きいもので53m<sup>2</sup>、小さなもので10.5m<sup>2</sup>を測るものがある。

特に、古墳時代中期に属する極めて大形の掘立柱建物、四面庇付き切妻造り建物（202m）、屋内棟持柱をもつ入母屋・家棟造り建物などは、今までの調査例から、豪族・首長の居館と推測されている。

栗鹿遺跡は、栗鹿神社の北面から遠阪坂にかけて、栗鹿川によって形成された段丘化した扇状地に營まれた。堅穴住居跡は、100棟以上が検出された。方形もしくは隅丸方形の堅穴住居跡、掘立柱建物跡があり、住居内に竈を造りつけたもの、屋内炉をもつもの、貼り床のものがある。

須恵器 南但馬における須恵器の導入と展開について、田辯昭三氏の編年を参考に外観しておきたい。

大阪府陶邑窓における須恵器の生産開始年代を5世紀中葉に位置づけると、集落遺跡における最も古い初現例は、柿坪遺跡出土の台付鉢等である。「初期須恵器」と呼称されるTK-73型式併行期に属する。

統いて栗鹿遺跡では、TK-23型式併用期、加都遺跡では、TK-208型式からTK-10型式併用期に至る。堅穴住居跡内からの、須恵器の出土点数は僅かに1、2点程度である。

「在地の古墳」における須恵器の副葬品採用のあり方をみると、墓壇内棺外から、向山11号墳第2主体、ON-46からTK-208型式併用期の杯身、墳丘上から梅田19号墳SX01・TK208型式併用期の杯身・杯蓋・高杯、墓壇内上層から梅田20号墳主体部TK-23から47型式併用期の杯身、棺内から梅田24号墳TK-47型式の杯身、棺内や被葬者の身辺に副葬される須恵器として、梅田11号墳主体部、MT-15型式併用期の杯身・杯蓋、梅田3号墳ではMT-85型式併用期の杯身・杯蓋が土器枕として使用された。

#### 律令期

7世紀は、考古学的な時代区分では終末期と呼ばれ、文献資料に基づく政治史的な時代区分では律令期と呼称されている。有力氏族の地位や権力を認め、それとの関係において成立する氏姓制から、律令制（645年の大化の改新以後、702年の大宝律令の制定・施行による）によって政治を行なう時代として、奈良・平安時代を含め、律令期とする。

朝来郡 但馬国では、国府は、北但馬の豊岡市日高町、旧気多郡に置かれた。南但馬の朝来市（牛野町は、奈良時代、播磨国神前郡内に属す）は、旧朝来郡であり、郡内には、山口郷・桑市郷・伊田郷・賀都郷・枚田郷・東川郷・朝来郷・栗鹿郷の9郷があり、和田山盆地には加都郷、枚田郷、山東盆地には朝来郷・栗鹿郷が設置された。

郡衙は、郡名郷のある山東町内に想定されているが、該当する遺跡は発見されていない。加都遺跡出土の付札木簡に「山口里佐參上數十一石今」と墨書きされていたことから、山口里（現在の朝来市山口）の存在していたことが明らかになると共に、官ヶ田地区付近に、郡衙関連施設の存在が捉えられた。

古代の山陰道 和田山町は交通の要衝の地であることを述べたが、古代においても、都から丹波を経て、但馬、因幡を結ぶ古代山陰道が通過する。山陰道には、近接する丹波国佐治の駅家から遠阪峠を越えて、但馬国に入ると、栗庭、郡部、美善、山前、面治、射添の6駅が設けられた。この駅家のうち、現在、山東町栗庭に栗駿駅を、美父市八鹿町八木または米里に美善駅を、美方郡香美町村岡区和田または川会に射添駅が設置されたと推測されている。他の3駅については推測がたたない。

遠阪峠の麓、古代山陰道に沿った栗庭遺跡から、8世紀から9世紀に所属年代が求められる掘立柱建物8棟、井戸1基、そして「駅子委文マ豊足十束東代稻桶一石」と書かれた木簡と、「神功開寶」が出土した。これらの遺構・遺物、特に「駅子」の墨書き文字等から、この遺跡は、栗鹿駅家関連の建物跡と推測され、栗鹿駅家がこの近辺に存在することが確実となった。統いて、栗鹿駅を出た山陰道は西に向かい、和賀から矢名瀬瀬、桑原、和田山へと向かう説、岡版1に岡示した和賀から畠出への説他がある。

「但馬道」 播但連絡道路と、北近畿豊岡自動車道とが合流する和田山LT.を建設するため、広大な面積を対象として加都遺跡の発掘調査が行われた。その結果、文献に記載されていない「但馬道」と名付けられた道が発見された。この道は、側溝で画された部分と盛土で構築された路面幅4~6mを測る。道は、異なる調査地区からも発見され、その各道路遺構を線で結ぶと、南北は、金梨山の北西麓に位置する加都集落内の現道と、北は、市御堂の独立丘陵、城山の西麓におよぶ直線となり、山裾を両端として、平野部中央の最短距離を探る直線道路であることが確認された。そして、1箇所、東の筒江大垣遺跡の所在する筒江へと向かう枝路も発見された。「但馬道」と山陰道とが、どこで交差するのか不明である。奈良時代後半から平安時代前半には建設され、中世初頭まで道として機能し、その後廃棄された。

栗鹿神社 栗鹿神社は、山東町栗庭に所在し、天平9（737）年『但馬國正視帳』、10世紀初頭に作成さ

れた『延喜式』記載の式内神社であり、のちに但馬一宮と称された。

平成11・12年、栗鹿神社の北方約150mの地点を、栗鹿遺跡と名付け、東西に調査区を設け発掘調査が実施された。奈良時代に年代が求められる、周囲を溝によって方形に区画された中に、規則的に配置された建物群、庇をもつ3間×6間の南北棟、脇殿的な3間×5間の東西棟、1間×6間の東西方向に細長い棟が発見された。この建物群は、古代栗鹿神社に係わる但馬国司や郡司などの要人を迎える「着到殿」ではないかと推測されている。

古代寺院 但馬の国四分僧寺・尼寺は、旧氣多郡に置かれた。古代の寺院として旧朝来郡内には、奈良時代に創建された立脇廃寺があり、朝来市立脇に所在し、塔の芯礎、軒丸・軒平瓦が出土している。

和田山町内では、加都地区から副弁蓮華文軒丸・平瓦が採集され、法興寺地区において、縄目叩き目を有する平瓦片が多数出土している。市内における古代寺院跡の実態は、遺物の採集にとどまっている。

古代氏族 古墳時代におけるクニ（律令制に基づく行政区域名とは異なる国造國）は、その管掌者としての国造が人和政権から公認されて各クニを取り仕切っていた。6世紀後半から、律令期にかけて、朝來・養父地域の但馬国造氏を名乗る氏族として、栗鹿神社の神職である「神部直」氏と、「日下部」氏（後に「八木」氏とか「朝倉」氏といった中世但馬の武士に発展）と言われている。

和銅元（708）年8月記「栗鹿大〔明〕神元記」によると、大國主命を祖とする神部直が栗鹿大神の祭祀を司り、また但馬国造に定められたと記されているが、從米文献の信憑性と「神部直」の存在を疑問視されていた。しかし最近、但馬国造氏の系譜分析から「日下部」氏の系譜は、文武期以前の記載について、「栗鹿大〔明〕神元記」を転用したとする証明が行われ、但馬国造氏として自氏系譜を持つ、「神部」氏の存在が明らかとなった。

一方、前述の栗鹿遺跡の調査において、「神」「神マ」と記した墨書き器、加都遺跡出土の木簡に「神部」と読める可能性をもつものがあること、豊岡市宮内黒田遺跡出土の天平鎌宝四（752）年銘のある木簡に「神マ廣鷗」と人名を記した例等から「神部直」氏が、この地方に勢力を有していたと断定できる。

「神部直」は、その姓から、大和の「神（=三輪：大神）」氏の似馬における擬制的同族と理解される。6世紀後半以降、栗鹿神社の祭主を「神部直」氏が務め、「栗鹿大〔明〕神元記」の記述に従うと、中世頃に「日下部」氏に交代したと理解される。なお、神社本殿（室町時代）が国指定建造物である赤瀬神社は、和田山町牧田に所在する式内神社である。日下部氏の祖先神である赤瀬足尼命を祀る。

集落他 方谷遺跡は、柴造跡に近接する谷部で遺物包含層と柱穴が検出された。出土遺物には、土器（土師器・須恵器・縁鉢陶器・墨書き器）、石器、木製品がある。

尾原遺跡、梅ヶ作遺跡は、備江大垣遺跡に近く、宝珠峰の東、狭い谷の奥・口部に位置する。谷奥の梶原遺跡は、奈良時代に属する掘立柱建物跡（3間×2間）を検出。梅ヶ作遺跡は、同時期の掘立柱建物跡群で構成される遺跡である。

越田・宮之前遺跡は、二保川の右岸、越田の東側丘陵裾に位置する。掘立柱建物跡・井戸・土坑がある。8世紀後半から11世紀にかけて営まれた。灰釉陶器や土器が出土している。

加都遺跡においては、古墳時代から引き続いて谷部の湿地帯では水田が営まれ、畔耕が確認された。集落は調査区においては、存在しない。

そして、両盆地には、施行時期は不明だが、全国的・画一的な制度である条里制の施行によって、南北方位の条里型地割りが広範囲に残っている。

文字資料 加都遺跡から習書木簡で、「大家部」「阿刀部」などの人名が記された部姓の人名がある。

## 中世

莊園 筒江大垣遺跡を含む周辺には、和賀庄・朝来庄・余布土庄・加都庄・比治庄などがある。

集落 加都遺跡は、11世紀前半頃から13世紀以降にかけて、桜地区と宮ヶ田地区において掘立柱建物で構成される集落が営まれる。11世紀前半の集落は、桜地区にのみ確認され、大小様々な規模の建物が、その方位を条里地割と一致して建てられる。中でも最大の床面積163m<sup>2</sup>の「富豪層」と呼ばれる人物の存在を推測し、彼らによって新しく新田開発が行われた可能性を示唆している。11世紀後半から12世紀前半には、桜地区の大型建物群は、廃絶し、床面積125m<sup>2</sup>未満の規模をもつ建物に代わる。新たに宮ヶ田地区にも集落が営まれるが、12世紀後半には、集落は廃絶する。桜地区的集落は、継続して営まれ、13世紀以降になると、北端部に、大型の建物が建てられた。

栗鹿遺跡は、12世紀から16世紀にかけての造構、掘立柱建物跡、柱穴群、井戸、集石土坑群などが検出された。一品野田地区では、13世紀代の掘立柱建物跡、柱穴、上坑、井戸が出土し、栗鹿神社の社前からは、12世紀から15世紀に造られた栗鹿神社に続く石積みの旧参道が発見された。

薬師前遺跡は朝来市元津に所在する。12世紀後半から13世紀にかけて、総柱建物を中心に、側柱建物数棟と墓を付随させた「屋敷」が営まれ、「自立農民層」の屋敷と推測されている。その外縁に大小の堂宇が建てられ、経塚が築かれる。

筒江浦石遺跡は、筒江大垣遺跡に隣接する谷あいに営まれた遺跡である。12世紀から13世紀にかけて、十数基の掘立柱建物跡が確認されている。

片引遺跡は、筒江大垣遺跡の西、北西に面した狭長な平坦地にピット群や土坑が検出されている。出土遺物には杓子・箸などがある。

筒江中山遺跡は、片引遺跡に近接して、丘陵を背に南面する。13世紀後半から14世紀に比定される中世墓2基が出土された。出土遺物には、土師器の鍋、須恵質及び土師質の甕と鍋、土師器の皿、青磁碗、鉢などが出上している。

文字資料 鬼原遺跡において、上端・下端とも平らに切断され、右辺は面調整され、左辺を欠く木簡がある。「□候て納了 永仁五□□（花押）」と書かれ、年号の応仁五年は1297年にあたる。

経塚 市条寺経塚は、丘陵上に築かれた古墳の墳丘面に3基の独立した経塚が一体となって、その上を多数の石で覆い、墳丘状に盛り上げられたものである。埋葬主体は、1号経塚が土師質外容器、埋納坑を埋めた石の間から土師器小皿、2号経塚が土師質外容器を被せた青銅製経筒（経巻一部残存）、と土師質外容器、埋納坑から銅鏡（元豊通寶）、土師器皿、3号経塚が須恵器甕の外容器である。外容器の甕内から銅鏡（元豊通寶・天皇元寶）、土師器小皿、鍋の破片が出土した。これらの所属年代は、12世紀後半から13世紀にかけて築造されたと推測される。

城跡 比治城跡は、『朝来志』に「事蹟詳ナラス。口碑ニハ、竹田ノ属城ニシテ梶原某、之ニ居ルト云フ。然レトモ其規模宏壯、決シテ属城ノ比ニアラス。一説ニ土豪梶原氏ノ居ル所ナリト。城ハ然ラン」と書かれている。竹田城とは3.5kmの距離にあり、丹波からの攻略に対し、宝珠峠を中心とする守りを固めた竹田城の属城と見られる。梶原氏については、資料が無く、不明な点が多い。

竹田城は、但馬の守護大名、山名氏の臣である太田頃氏歴代の居城と言われている。室町時代に築城され、天文5年10月羽柴秀吉の但馬攻めにより落城。竹田城の属城として、比治城、市御堂城、衣笠城、枚田城ほか8箇所を数える。

## 参考文献

- 神戸新聞社 1975年12月『兵庫探検・歴史風土編』
- 山東町教育委員会 1975-78年4月『柿坪中山古墳群 第1集、第2集』
- 和田山町教育委員会 1978年3月『秋葉山古墳群』
- 兵庫県教育委員会 2002年3月『梅田東古墳群』
- 兵庫県教育委員会 2002年3月『梅田古墳群Ⅰ』
- 兵庫県教育委員会 1999年3月『向山古墳群 市条寺古墳群 一乗寺經塚 矢別遺跡』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002年7月『平成13年度 年報』
- 兵庫県教育委員会 2003年3月『梅田古墳群Ⅱ』
- 兵庫県教育委員会 1985年3月『篠江遺跡群Ⅰ』
- 兵庫県立考古博物館 2007年7月『ひょうごの遺跡』64号
- 白石太一郎 1984年10月『日本文化論』〔講座 日本歴史I 原始・古代II〕
- 和田山町・和田山町教育委員会 1972年3月『城の山・池田古墳』
- 兵庫県教育委員会 2003年5月『茶すり山古墳調査概報』
- 朝来町教育委員会 1990年3月『船宮古墳』
- 養父町教育委員会 1978年11月『但馬・大藪古墳群』
- 八鹿町教育委員会 1987年3月『箕谷古墳群』
- 兵庫県教育委員会 2005年3月『加郡遺跡Ⅰ』
- 兵庫県教育委員会 2007年3月『加郡遺跡Ⅱ』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000年7月『ひょうごの遺跡』37号
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001年2月『平成11年度 年報』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002年3月『平成12年度 年報』
- 池澤 順 1981年2月『和名類聚抄郡里駅名考證』
- 兵庫県 1974年3月『兵庫県史 第1巻』
- 兵庫県教育委員会 1993年3月『山陰道』
- 木簡学会 2001年11月『木簡研究』第23号
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998年1月『ひょうごの遺跡』28号
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001年7月『ひょうごの遺跡』40号
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002年6月『ひょうごの遺跡』44号
- 古代交通研究会 1998年12月『古代交通研究』第8号
- 但馬考古学研究会編・養父町教育委員会 1994年11月『大藪古墳群』
- 木簡学会 2004年11月『木簡研究』第26号
- 兵庫県教育委員会 2002年3月『業部前遺跡発掘調査報告書』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004年6月『ひょうごの遺跡』52号
- 木簡学会 2000年11月『木簡研究』第22号
- 兵庫県教育委員会 1982年3月『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

一般国道483号北近畿丹岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業は、山東町柴から、円山川中流域の和田山盆地、加都の和田山インターチェンジで、播但連絡自動車道へと接続する事業で、同自動車道建設はさらに北進して豊岡市に至る計画である。

同事業に先立って、遠坂トンネル山東町側出口を抜けて、和田山インターチェンジに至る約7.1kmにかけて、平成5年度に遺跡分布調査（遺跡調査番号930013）が実施された。その結果、該当地点は遺物が散布しており、Na123地点として確認調査を実施することとなった。

同事業に間連しては、他に加都遺跡・筒江浦石遺跡・茶すり山古墳・北山遺跡・梶原遺跡・柿坪遺跡・芝端古墳群・若水城跡・栗鹿遺跡・柴遺跡・方谷遺跡などが調査されている。

### 第2節 調査の経過

#### 1. 確認調査

一般国道483号北近畿丹岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業に伴って、建設省近畿地方建設局丹岡工事事務所の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では逐次調査を実施してきた。筒江大垣遺跡は同事業に伴う分布調査によってNa123地点として登録され、平成9年2月に調査第2班 森内秀造、高木芳史によって第1次確認調査（遺跡調査番号960429）が実施された。この結果、柱穴などの遺構や、谷地形内に多くの遺物を含む包含層を検出した。出土した土器の中には円面鏡や輸入陶磁器なども含まれている。この結果、本発掘調査のI・II区が設定された。

更に当時の建設大臣によって急遽、事業の促進が要請され、平成11年11月末に企画調整班 別府洋二、調査第2班 川村慎也により確認調査（遺跡調査番号990262）が行われ、同じく柱穴などの遺構や、谷地形内の遺物包含層が検出され、一部には奈良時代前半と平安時代～中世にかけての2面の遺構面が存在することが確認された。この結果、本発掘調査のIII～VI区が設定された。

#### 2. 本発掘調査

第1次本発掘調査（遺跡調査番号990294）は、第2次確認調査完了一週間後に開始された。急務を要されたため、調査体制も直で、調査第2班班長の池田正男と企画調整班の別府洋二が担当することとなり、厳冬期の但馬における平成11年12月15日～平成12年3月31日にかけて、凍結と積雪の障害の中、実施された。

この年度の調査は、I～III区の合計1,889m<sup>2</sup>が対象となった。一晩で60cm もの雪が積もる日もあり、写真撮影ができないことも多く、また、積雪及び凍結により、壁面が崩壊し、一部の調査を断念せざるを得なかつたが、弥生時代～中世にかけての幅広い時期の遺構・遺物が検出された。

第2次本発掘調査（遺跡調査番号2000270）も冬季にかけて実施された。調査対象は尾根の先端部から、その東側の谷部を包括する範囲のIV・V区で、調査面積は合計1,651m<sup>2</sup>である。平成12年12月26日～平成13年3月15日の調査期間で、調査担当は調査第2班 久保弘幸、藤田 淳、荒木幸治である。

第3次本発掘調査（遺跡調査番号2001198）は、平成14年1月15日～1月30日にかけて、調査第2班 平田博幸、岸本一宏、荒木幸治によって実施された。それまでの調査地点Ⅲ・Ⅳ区とV区に抜まれた林道部分、調査面積168m<sup>2</sup>が対象となった。

### 3. 出土品整理作業

発掘調査によって出土した遺物は、一部は発掘調査事務所にて洗浄をおこなったが、洗浄・ネーミング・一部の接合補強、選別などの整理作業については、平成18年度より、兵庫県埋蔵文化財調査事務所の魚住分館（明石市魚住町）にて開始した。その後、神戸市兵庫区の兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて接合・補強・実測・拓本・復原及び金属器の保存処理を実施した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

所長	平岡憲昭
整理保存班 主任調査専門員	岡崎正雄
主査	岡田章一
主査	菱田淳子
調査第1班 主査	別府洋二
非常勤嘱託職員	吉田優子・島村順子・歳幾子・宮野正子・荻野麻衣・早川有紀 谷脇里奈・栗山美奈・大前篤子・藤井光代・清水幸子 前山三枝子・加藤裕美 早川並紀子・伊藤ミネ子・衣笠雅美

平成19年度には写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト作業、分析鑑定、木製品の保存処理及び、原稿執筆をおこなった。平成19年10月13日に加古郡播磨町に開館した兵庫県立考古博物館に組織が移行し、新組織のもと、編集作業を経て報告書を刊行した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

館長	石野博信
副館長	松下信一
調査部整理保存班 調査専門員	西口和彦
担当課長補佐	岡田章一
主査	岸本一宏
主査	菱田淳子
同調査第1班 主査	別府洋二
事業部学芸課 主査	藤田 淳
非常勤嘱託員	前山三枝子・加藤裕美・古谷章子 今村直子・小林俊子・渡辺二三代・村上令子

## 第3章 調査

### 第1節 I区の調査（図版5～11、写真図版4～11）

#### 1. 概要

I区は最も西側に位置する調査区で、更に西側は谷状地形となり大きく落ち込む。また、調査区の南側も黒川に向かって落ち込んでおり、確認調査結果により集落址は広がっていないものと判断された。さらに東側や北側は地形的には丘陵末端や段丘上となるが、後世に削平されたものと推定された。

調査では調査区の南西側が大きく段をもって削られており、また、北側でも検出された遺構は少なく、削平されたものであろう。調査区内には場整備前の水田の区画である段が北西から南西に直線的に見られた。

調査区の中央にはほぼ南北の方位をもつ溝SD I-1が横切り、周辺には多くの柱穴や落ち込みが同一面で検出された。また、北東から南西に向かう小谷状の落ち込みには、所謂クロボクが堆積しており、調査完了前に除去したが、下層からは顕著な遺構は検出されなかった。遺構には古墳時代前期から中世後半にかけてのものがある。

#### 2. 遺構

##### 溝

###### SD I-1

SD I-1は調査区を東西に分断する直線溝で、ほぼ南北に走る。溝を北側へと延長すると、筒江の丘陵の鞍部へと向かっており、比治城の大手筋に当たる比治の集落へと抜ける道の方向に一致するが、道路状遺構の側溝ではない。

溝の北端は浅くなつて途切れるが、削平によって失われた可能性もある。溝底は北から南に向かって低くなるが、底には二つの段が設けてある。水流による底面の抉れは見られず、堆積した埋土もシルト質である。北から南へと流れる水路として掘削されたものではなかろう。

最大幅約2.8m、深さは最大では約0.9mの規模を持ち、断面形が台形を呈した溝である。埋土上から切り込んだ柱穴も確認でき、またこの溝によって切られた遺構も存在する。

溝の北端部や第2段目の底付近から、多くの建築部材や箸などの生活用具である木器が出土している。壁板と推定される板材は溝の底から重なつて出土していた。溝の底は硬く締まっており、踏み板として転用されたものではない。近辺の建物から廃棄されたものであろうか。近辺ではあまり規模の大きな建物は検出されていない。

また、埋土中からは土器も幅広い時期のものが出土しているが、23・25・26・29は上層から出土しており、14世紀頃には埋没しているものと思われる。主たる時期は12～13世紀頃と思われる。大型の楕円鉄滓なども出土している。

###### SD I-2

SD I-2は西端隅の落ち込み状の溝であり、クロボク状の埋土をもつ。33～35の古墳時代末～飛鳥時代頃の土器が出土した。竪穴住居などの一部の可能性もあるが、南半部を大きく削平されており、詳細

は不明である。

#### SD I - 5

SD I - 1 の南東に近接した浅い溝で、36~40の土器が出土した。方向も SD I - 1 と一致し、同時期に掘削されたものであろう。

#### 掘立柱建物

##### SB I - 1

掘立柱建物SB I - 1 は調査区の西端で検出された。建物の北西の一部を 2 間 × 2 間分検出したに過ぎず、全容は不明であるが、柱穴は直径20cm程度の小型のものである。柱間の平均値は1.2mである。柱の主軸方向はSD I - 1 やSB I - 4・6 と一致する。

##### SB I - 2

掘立柱建物SB I - 2 はSD I - 1 の西側で検出された。1 間 × 2 間の小型の建物で、柱穴は直径約40cm の比較的大きなものである。桁行の柱間の平均値は2.6m、梁間の平均値は2.0mである。P I -1055からは鐵滓（M17）が出土している。

##### SB I - 3

掘立柱建物SB I - 3 はSB I - 2 と重複し、SD I - 1 に切られて検出された。1 間 × 3 間分検出したに過ぎず、全容は不明である。柱穴は直径20cm程度の小型のものが多い。桁行の柱間の平均値は1.3m、梁間は1.6mである。長軸方向に沿った両側に雨落ち溝状の小溝が見られるが、柱との距離は一致しない。柱の主軸方向はSB I - 5・7 と一致する。近接したP I -1054からは須恵器鉢（13）が出土している。

##### SB I - 4

掘立柱建物SB I - 4 はSD I - 1 の東側で検出された。2 間 × 2 間の建物で、多くの柱穴は直径20cm程度の小型のものである。柱間の平均値は2.0mである。柱の主軸方向はSD I - 1 やSB I - 6 と一致する。P I -1047からは瓦質の羽釜（14）が出土している。

##### SB I - 5

掘立柱建物SB I - 5 はSB I - 4 と重複して検出された。2 間 × 2 間の建物で、柱穴は直径15~30cmのものがある。柱間の平均値は1.5mである。柱の主軸方向は SB I - 3・7 と一致し、水田の方向と一致する。P I -1061からは須恵器椀（11）が出土している。

##### SB I - 6

掘立柱建物SB I - 6 はSB I - 4 の南側で近接して検出された。2 間 × 2 間の建物で、多くの柱穴は直径30cmを超える比較的大型のものである。柱間の平均値は2.3mである。柱の主軸方向はSD I - 1 やSB I - 4 と一致する。柱穴底に板状の石を敷いたものが見られる。P I -1046や建物内部のP I -1045からは

炉壁（M306）が出土しており、石塊が入れられている。

#### SB I - 7

掘立柱建物SB I - 7はSB I - 6と重複して検出された。2間×2間の倒柱建物で、柱穴は直径20~40cmのものである。柱間の平均値は1.4mである。柱の主軸方向はSB I - 3・5と一致し、水田の方向と一致する。PI - 1018・1050からは鉄滓（M12~16）が出土している。

この他にもいくつかの柱穴が検出されたが、建物を復元するまでには至らなかった。SD I - 1の西側の下段で検出されたPI - 1002・1003は近接して検出された柱穴で、内部から古墳時代前期の完形に近い土師器小型丸底壺などが出上しており、共通の施設を構成するものと考えられるが、復原できなかつた。古墳時代と判断できる遺構はこの柱穴のみである。

また、PI - 1041・1036からはスラッグが出土しており、鍛冶に関連する施設が周辺に存在したことを見わせるが、焼土などの顕著な遺構は認められなかつた。おそらく中世に属するものであろう。

### 3. 小結

I区は全調査区の中で最も西側に位置し、黒川に近い低位段丘面に立地する。古墳時代前期にも生活していた痕跡は見られるものの、遺物量も少なく、後世の削平を考えても集落の中心ではない。また、中世の集落としても他のⅢ~V区と比べて立地条件は悪くなる。

12~13世紀頃に集落が営まれるようになり、大規模な溝（SD I - 1）が掘られる。溝内からは、建築部材や瓦器椀、『但馬・・・』や花押と思われる墨書きのある産地不明の須恵質の鉢が出土しているが、溝の機能は不明である。溝に分断された東西の地区とも近似した方向をもつ建物が検出されており、出土遺物にも差異は認められない。

14世紀頃には遺物量も減り、16世紀には溝も埋没している。この地点での集落としての機能は失われるようである。この地点では比較的規模の小さな建物が多いことから、集落の中心城ではなく、スラッグなどの出土から見て、集落縁辺の集落内工房などが設けられた地区ではなかろうか。

## 第2節 II区の調査（図版12、写真図版12・13）

### 1. 概要

II区は北東から延びる尾根と尾根に挟まれた地区で、谷地形となる。確認調査の結果によって、シルト質の堆積層中から円面鏡などを含む多くの遺物が採集されていることから、流路あるいは水田遺構が存在すると推定された。

調査前の状況は2~3枚の水田となっており、東側は現在の水路で限られていた。調査では全体をシルト或いは砂層が覆っており、調査区全体が自然流路内であることがわかった。旧耕土状の堆積土を除去すると、西半部では比較的安定した地山面が検出されたが、後世の耕作に伴う整地によるものか、顕著な遺構は見られなかつた。東半部では、AA'ライン以西では西側と同じレベルまで旧耕土状の堆積土が覆っており、同じ水田面として利用されていたと考えられる。この部分では更に落ち込み流路の底近くを検出できたが、流路東南岸は現水路下となり、調査範囲内では検出できなかつた。

また、北東部は一段高くなり、1m以上の堆積が見られたが、上面の杭列を検出した後、降り続く雨・雪のため県道側の壁面の崩壊が始まり、土留めの対策を行ったため下層までの調査は実施できなかった。

## 2. 遺構

### 杭列

東端部の上段の上面と、下段の地山面で、計3列の杭列を検出したが、下段の1列は流路内からその外側へと続いており、おそらく近世以降の水田耕作にともなう施設と考えられる。杭のほとんどが丸太材を使用しており、先端が破損するなど残存状況が悪かったため図化していない。

上段のものは2列に並んでおり、埋土中に中世の遺物を含んでいることから、中世にまで遡る水田として調査を行い、杭列に挟まれた内部が畦畔と想定したが、内外の堆積状況からは畦畔としての機能は認められなかつた。また、杭列が北東側で合流することも畦畔である可能性を低くしている。

検出した面は、水田としてはあまり安定した状況ではなく、この杭列はさらに上層の近世以降の水田に伴うものの可能性も残される。井堰としての機能も考えられるが、この杭列に対応する水路状の堆積は確認できなかつた。或いは、土留めとして敷設されたものであろうか。

杭には丸太材をそのまま樹皮付きで利用したものや、ミカン削り材、矢板状に加工したものなどがあり、近世でよく見られる丸太材だけではない。先端の加工には金属器を用いている。実測できた杭のうち、なるべく異なる特徴のものを選んで樹種同定を依頼したが、すべてクリを用いたものであった。

### 流路

調査区全体をシルトや砂層が覆っており、全体が自然流路内であるが、西半部を流路として調査を行つた。但し、下段ではわずかに落ち込むだけで、水田として造成した際に大きく削平されたようである。

上段部では1m近い堆積が見られたが、流路の最も低い部分は更に南東側に存在するのであろう。北西から南東へ向かって低くなるレンズ状の堆積を示している。

調査区東半部の流路内では、上段の杭列を取り外した面までを上層、その下の地山層までを下層として遺物を取り上げた。上層では13世紀頃にまで下る遺物が含まれている。下層からは弥生時代前期や古墳時代から9世紀頃までの遺物が含まれている。

墨書土器(47・88・109・110)、縁軸陶器(79~81)、灰釉陶器(82~84)、須恵器円面鏡(118)・転用鏡(93・102)、金属器等の須恵器(95・113)、黒色土器(78)、など一般的な集落とは異なる種類の土器が見られる。

また、木製品も多く出土しているが、そのほとんどが上層からの出土である。木簡や祭祀具、紡織具などが見られる。

## 3. 小結

Ⅱ区は、全域が流路内であり、廃棄或いは流されてきた遺物が多く出土した。遺跡全体としては、Ⅰ区とⅢ~Ⅵ区とを大きく隔離するものであるが、この地区を挟んだ両側から中世前半から後半にかけての同じ時期の遺構や遺物が検出されており、中世に入ると同じ集落内の範囲に含まれるのであろう。

Ⅱ区から出土した古墳時代後期から平安時代にかけての遺物は、上流部にあたるⅢ~Ⅵ区周辺の丘陵部からもたらされたものとして捉えることができ、Ⅲ~Ⅵ区で検出された同時代の遺構の性格を推定する資料となる。

### 第3節 III区の調査 (図版14~23、写真図版14~24)

#### 1. 概要

III~VI区は丘陵の尾根筋からその末端部と、その東側のV区の谷部にかけての範囲である。調査前の現状では段々畑や植木が育てられていた。

III区では確認調査結果により柱穴などの遺構が検出され、集落が存在すると推定された。但し北東側では地形的には谷地形となり、現状でも水路が存在していた。確認調査では、2m以上掘削しても盛土層であり、比較的新しい時期に埋められたものと思われる。II区の流路へと続く谷地形であるが、調査範囲と掘削深度を考慮して、また、水路を保護することが求められ、全面の調査を実施しても遺物包含層まで達しないと判断されたため、調査範囲からははずされた。

調査前の状況では2枚の段々畑であったが、調査を実施するとさらに西側にもう1段低い面が検出された。

一部、北東から南西に向かう小谷状の落ち込みには、所謂クロボクが堆積しており、調査完了前に掘削し、7世紀頃の遺物が出土したが、顯著な遺構は検出されなかった。遺構は中世のものがほとんどである。

#### 2. 遺構

##### 掘立柱建物

###### SBIII-1

掘立柱建物SBIII-1は調査区の最も低い段で検出された。2間×3間の建物を復原できたが、南東側の柱穴は検出できなかつた。柱穴は直径20cm程度のものである。柱間は2.2~2.7mである。柱の主軸方向は造成された段と一致する。

###### SBIII-2

掘立柱建物SBIII-2はSBIII-1と重複して検出された。1間×3間の小型の建物で、柱穴は直径20cm程度のものである。桁行の柱間の平均値は2.0m、梁間の平均値は3.2mである。南西隅に墓址と考える土坑SKIII-2があるが、方位は異なり、切り合いも認められなかつた。PIII-14・24の埋土上層からは常滑窯の口縁部(127)と底部(128)が出土しており、同一個体と思われる。

###### SBIII-3

掘立柱建物SBIII-3は中段で検出された。SBIII-4と重複し、SDIII-2に切られて検出された。1間×2間の小型の建物で、柱穴は直径20~30cm程度のものが多い。桁行の柱間は2.2~2.5m、梁間は2.5mである。内部に土坑SKIII-6が存在するが方位は異なる。柱の主軸方向は等高線に直交しており、SBIII-2・5と一致する。

###### SBIII-4

掘立柱建物SBIII-4はSBIII-3と重複し、SKIII-6を切って検出された。2間×2間の建物で、南東隅の柱穴を欠く。柱穴は直径20~40cm程度のものである。柱間の平均値は1.8mである。柱の主軸方向

はSBIII-6・7と一致する。

#### SBIII-5

掘立柱建物SBIII-5はSBIII-6・7と重複して検出された。1間×3間の建物で、柱穴は直径20~30cmのものがある。柱の主軸方向はSBIII-3と一致する。

#### SBIII-6

掘立柱建物SBIII-6はSBIII-5・7・8・9と重複して検出された。2間×2間の建物で、南側に半間の庇か縁が付く。多くの柱穴は直径30cmを超える比較的人型のものである。柱間の平均値は南北2.0m、東西3.0mである。PIII-75には柱根材が残っており、下部を加工したクリの丸太材を用いている。

#### SBIII-7

掘立柱建物SBIII-7はSBIII-5・6・8と重複して検出された。1間×2間の建物で、柱穴は直径30~40cmのものであり、根石を置くものがある。

#### SBIII-8

掘立柱建物SBIII-8はSBIII-6・7・9と重複して検出された。2間×3間の建物が復原できる。柱穴は直径40cmを超える比較的大型のものが多い。柱間の平均値は2.4mである。PIII-74・190には根石が据えられている。PIII-73・74からは129・130の青磁が、PIII-190からは124の土師器皿が出土している。柱の主軸方向は他の建物とは異なるが、等高線に沿っている。

#### SBIII-9

掘立柱建物SBIII-9はSBIII-6・8と重複して検出された。南北方向の1間×3間の建物が復原できるが、井戸SKIII-1から派生した溝によって切られている。多くの柱穴は直径30cm程度のものである。

### 溝

#### SDIII-1

SDIII-1は調査区を西端の段の裏に走る溝で、最大幅約0.7m、深さは約0.3mの規模を持つ。136~139の土器が出土している。

#### SDIII-2

SDIII-2は最大幅約1.8mの浅い溝で、140の土師器羽釜が出土したが、水田に伴う溝と考えられ、溝の掘削された時期は新しく、遺物は混入したものであろう。

### 上坑

#### SKIII-1

土坑SKIII-1は中段の調査区の南寄りで検出された。1.7×1.9mの隅丸方形の平面形で、深さは約1.0mを測り、一つの隅に幅1.0mの溝が取り付いている。溝に近い側から徐々に深くなるように山石が検

出されており、南東側は比較的底まで石は少なかった。埋土は東側がやや深くなるように堆積しており、何度かの改修の可能性を考えている。埋土からは完形の青磁碗（133）などの土器や、漆器椀、剣物、桶底板などの木製品が出土した。一部石の下からも漆器椀が出土している。

比較的浅いものであるが、現状でも湧水が見られることから、井戸や水溜として構築され、山石も尼場として置かれたものかもしれない。あるいは廃絶する際に構築材の一部であった山石を崩したものであろう。近接する SKIII-3 からも木製品が出土しており、水溜状の井戸ではないかと考えられる。また、SKIII-5 も VI 区の調査で井戸（SEVI-1）の一部であることが判明している。III 区の南側や VI 区は山からしみ出す水道があったのである。

#### SKIII-2

土坑 SKIII-2 は調査区の下段の西寄りで獨立柱建物 SBIII-2 と重複して検出された。1.8×0.8m の隅丸長方形の平面形で、深さは 0.2m を測る。北寄りに集中して埋土中に山石が散乱している。土器は小片しか出土していないが、中世に属するものであろう。柄の付いた鉢製の鎌が土坑底から出土していることから墓址であると考える。木棺の痕跡は検出できなかったが、最上層は人為的な埋土であり、その層に含まれる山石は棺上或いは標識として積み上げられていた棟石が落ち込んだものであろう。

#### SKIII-6

土坑 SKIII-6 は中段で検出された。1.9×0.8m の長円形の平面形で、深さは約 0.1m しか残存していない。平面形態が類似することから、SKIII-2 と同様、墓址の可能性も考えられるが、出土遺物の土師器の把手（135）は墓に伴うものではなかろう。

#### SKIII-3

前述の通り土坑 SKIII-3 は調査区の南寄りで、SKIII-1 に近接して検出された。2.4×2.2m の隅丸方形の平面形を呈した浅い土坑で、東の端が円形に達んでいる。板状の木製品が出土した。水溜状の施設であろう。

#### SKIII-5

土坑 SKIII-5 は上段の調査区の南寄りで検出された、浅い方形の土坑で、調査区外へと続いている。その部分は VI 区の調査で判明し、やはり水溜状の井戸であることがわかった。

### 3. 小結

III 区は丘陵末端部或いは上位段丘面に立地し、北側は谷地形で大きく落ち込んでいる。一部下層のクロボク内からは古墳時代末（7世紀）頃の遺物が出土したが、遺構は検出できなかった。また、奈良時代頃の遺物も柱穴から出土しているが、顯著な建物などは認められない。

13世紀頃から集落が営まるようになるが、この地区で検出できた建物の規模は小さい。出土遺物から16世紀の後半頃には衰退するようである。

但し、出土遺物には常滑や青磁、青花など各地からもたらされたものが見られ、一般的の集落とは異なる。宝珠峰を抑えた交通の要衝の位置を占め、北東の山上に位置する比治城やその出城とされる茶すり山の城の裾に存在する集落としての性格が窺われる。

## 第4節 IV区の調査 (図版24~28、写真図版25~30)

### 1. 概要

IV区はIII区から一段高くなつた畠の面で、尾根の先端部にあたる。III区に続く西端は切り下げられてゐるが、その縁辺部にはクロボク層が堆積しており、その上下の面で遺構が検出された。

上面では多くの柱穴を検出したが、建物を復原できたのは3棟である。各々の建物は主軸の方位が微妙にずれるが、すべて等高線に沿つた方向で建てられている。うち一棟は更に東のV・VI区に広がる。

下面では、斜面を「コ」字にカットして平坦地を成形しており、その内部に建物が構築されていた。当初、竪穴住居とも考えられたが、その構造から掘立柱建物と判断した。平坦地は溝によって3区に分けられており、その各々に建物が配置されるものであろう。クロボク層掘削中には151~160の土器・土製品が出土し、その床面や内部の遺構から161~176の土器・土製品が出土している。7世紀後半~末を中心とする時期（飛鳥時代）のものである。

### 2. 遺構

#### 掘立柱建物

##### SBM-1

SBM-1は比較的規模が大きい、3間×4間の純柱建物である。柱穴の規模も20~40cmと比較的大きく、深さも40cm近く掘り下げられたものも残存している。柱間は1.7~2.2mを測る。柱根内に石を入れたものがある。142~145の土師器皿が出土した。

##### SBM-2

SBM-2は当初4間×2間分検出されたが、南東に続くVI区、V区の調査でさらに広がることが判明した。一部検出できなかつた柱穴も存在するが、13.8×8.4mの規模、4間×6間の掘立柱建物が復原できた。本遺跡では最大の建物である。柱間は桁行2.2~2.3m、梁間も約2.2mで、東西の一間が約1.8mと狭く、二面に庇或いは縁が付くものであろう。両側を谷によって挟まれた丘陵末端の平坦地の中央部を占めており、その位置、規模から見て本遺跡における中世集落の中心的な建物と言ふことができる。

##### SBM-21

SBM-21・IV-22は下層のクロボク層下で検出された。

SBM-21は山側に幅0.7m、深さ0.2mの溝を一辺5.5mの間隔で「コ」の字形に巡らせ、その内側を一段低く掘りくぼめて一部に貼り土をおこなつて床面としたらしい。床面では少なくとも3ヶ所の焼土が検出されている。その溝に沿つて7基の柱穴を穿つものである。2間×2間分検出されたが、更に西に続く。柱穴は平面形が略方形のものもあるが、概ね円形或いは梢円形を呈し、規模は直径0.7mを超えるものも見られる。深さは深いもので0.7mまで掘削している。柱間は南北2.2~2.3m、東西は1.4~1.6mを測る。竈形土器の破片(176)が出土していることから、建物内部の床面に移動式の竈が設置されていたものであろう。

## SBV-22

SBV-22は、SBIV-21の北側に並んで検出された。斜面をカットした裾に柱が並ぶもので、その規模・構造は不明である。柱穴の規模はSBIV-21よりは小さくなる。建物内部の床面の一部が火化していたが、柱穴に非常に近いものもある。

更に北側にも溝で「L」字状に開まれた区画があり、比較的規模の大きな柱穴が2基見られ、別の建物が広がる可能性があるが、後世の耕作に伴う削平で北側は大きく段として下がる。

## 3. 小結

IV区では二面にわたって遺構面が検出された。下層で検出された建物は飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構で、主たる時期は飛鳥時代である。この時期の集落検出は近辺では極めて稀で、今回検出できた遺構が一般的なものなのか判断できない。I区やIII区の下層からも前後する時期の遺物が見つかっており、散漫ではあるが広い範囲に集落が広がっていたものであろう。

中世に属する遺構ではIV区からV・VI区にまたがって本遺跡最大の掘立柱建物が検出され、中世における集落の中心部であるものと考えられる。

## 第5節 V区の調査（図版29～36、写真図版31～37）

### 1. 概要

V区は今回の調査範囲内では最も東の位置にあり、更に東には茶すり山古墳の丘陵尾根となる。V区の調査範囲の調査前状況は4～5段の畠であった。北西部はIII・IV区と同様の尾根の先端部にあたり、南東部は東側から派生する谷の出口にあたる。

調査では北西部からは柱穴などの多くの遺構が検出されたが、南東部は大きく谷状に落ち込み、シルトや細砂などで埋没していた。この谷状の落ち込みからは多くの土器や木器が出土した。

### 2. 遺構

#### 掘立柱建物

##### SBV-1

SBV-1は比較的高い位置で検出された、1間×2間の建物である。斜面上方をカットした平坦地に等高線に沿って建てられており、斜面上方に溝を走らせている。柱穴の規模は20cm程度の小型のものである。柱間は東西2.2～2.4m、南北1.8mを測る。

##### SBV-2

SBV-2は大きく斜面をカットした平坦地に建てられており、カットした裾には溝を走らせている。2間×3間分検出されたが、柱間は梁間が約1.8m、桁行は中央が2.8m、両脇が2.3mと狭い。柱穴の規模も20～40cmで、深さは30cm近く掘り下げられており、底の高さが揃っている。建物の東側にSKV-1が設けられているが、時期の異なるものであろう。

#### **SBV-3・V-4**

SBV-3・V-4は最も低い平坦部で検出された。北西の隅に鉤状に溝をもつ。ともに梁間は1間分しか検出されず、SBV-1と同様の細長い建物である。

#### **SBV-5**

SBV-5は最も比高の高い位置で検出された。1間×3間の細長い建物である。1間分北側にも柱列が広がることから、調査区外に延びる可能性がある。柱の直径は30cm弱のものが多いが、深さが50cm近くまで掘削されているものがある。柱間は不統一である。

#### **SBV-6**

SBV-6は最も広い平坦地に位置する。この平坦地にはIV区から広がる最も規模の大きな建物のSBIV-2や、下層に属する建物SBV-21・V-22が存在することから、平坦地として最も安定した地点であり、いくつかの時期の中心的な場所であったことが推定できる。

SBV-6は2間×3間の建物で、等高線に直行する方向に主軸を置く。柱穴の直径は20~40cmで、深さも50cm近い深いものなど様々である。柱間も1.8~2.4mと不統一である。

#### **SBV-21**

SBV-21も最も広い平坦地で検出された。SBV-6と重複し、他の柱穴などに切られるように検出され、柱穴の平面形も隅丸方形である。全ての柱穴が検出できたものではなく、「L」字形に検出された3間×3間の側柱建物である。柱穴の規模は一辺が0.5mを超えるものもあり、また、柱穴の埋土もクロボクを含んだ黒褐色のものが多い。中世に属する建物や柱穴とは大きく異なる。おそらく10世紀前半を中心とする時期（平安時代前半）に属するものであろう。

#### **SBV-22**

SBV-22はSBV-6やSBIV-2と重複し、SBV-21に接して検出された。SBV-21とはやや主軸方向が異なり、重複するSBIV-2と同じくする。1間×2間分検出され、柱穴の直径が40cmを超えるもので占められる。柱穴の中には平面形が隅丸方形に近いものもある。この建物もおそらく10世紀前半を中心とする時期（平安時代前半）に属するものであろう。

#### **土坑**

#### **SKV-1**

SKV-1はSBV-2内で検出された。平面形が1×0.8mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さは75cmまで垂直に近い形状で掘削している。埋土の中ほどで山石がかたまって検出され、下層は砂質の埋土で埋まっている。井戸或いは水溜であろう。

#### **谷**

V区の南東部は幅12m以上、深さは深いところで約2m落ち込む谷地形となる。谷の東側は茶すり山古墳の立地する尾根となる。東側は谷の落ち際まで柱穴などの遺構が散見されるが、建物を構成するも

のではない。谷の中には遺構は及んでいない。

この谷の埋土の上層は耕作のために埋められた盛土であるが、下層の約1m近くの埋土はシルトや細砂・粗砂などの堆積物で、その中に多くの土器や木器が含まれていた。上層は中世後半の土器が含まれていたため、それ以降に整地されたことが推測できる。下層の埋土には古墳時代末頃から中世前半にかけての土器が含まれている。その中には縁軸陶器（182～186）、灰釉陶器（187～194）、黒色土器（196～197）、製塙土器（211・317）、墨書き土器（194・219）などが含まれる。また、木製品には刀子の軸が含まれる。

### 3. 小結

V区で検出された掘立柱建物SBV-21・V-22は平安時代前半の建物と考えられ、東側の谷部や、II区の流路から出土した縁軸陶器・灰釉陶器・墨書き土器などの時期に一致する。同時期の遺構は後世の削平のためか、他の地区では見つかっていないが、II区の流路に続く谷と、V区東半の谷部に挟まれた尾根先端の範囲内に広がっていたことが推定できる。官衙的な遺構・遺物であるが、その全容は不明である。

## 第6節 VI区の調査（図版37、写真版38）

### 1. 概要

VI区はIII・IV区とV区の間の里道部分にあたり、平成13年度に調査を実施した。調査面積は168m<sup>2</sup>である。調査区はほぼ南北方向に細長く、北が高く南が低い傾斜地であり、その比高差は約6.6mである。

調査区内の遺構は、近世以降と推定される水路などによって前代の遺構が破壊されている部分が多くなったが、北部および南部に分かれて柱穴などが検出された。また、北部東側ではV区 SBV-2が存在する平坦面の北西隅部分、中央北寄りではSBIV-2の柱穴、南部では素掘りの井戸が1基検出された。なお、SBIV-2やSBV-6・21・22が存在する平坦面はVI区では検出されず、傾斜地となっていたことから、里道敷設に伴って傾斜地になるように削り取られたものと推定される。

### 2. 遺構

VI区で検出した柱穴状遺構は総数にして32基であったが、それらのうち、SBIV-2に伴う柱穴は5基である。また、南部平坦部の北端で検出した井戸は平面円形で、素掘りのものである。

#### SBN-2柱穴

PVI-11 円形の柱穴で、直径22cm、検出面からの深さ17cmを測る。柱痕は径17cmの円形を呈する。

PVI-20 個柱列の一つで、柱痕は円形で径15cm、掘り方も円形で直径20cm、検出面からの深さは28cmである。

PVI-23 直径25cmとやや大きめの掘り方を有し、検出面からの深さは22cmを測る。柱痕は径13cmの円形である。

PVI-26 東西32cm、南北28cmの梢円形の掘り方で、深さは検出面から15cmである。柱痕は円形で径13cmを測る。

井戸

#### SEVI-1

調査区中央南寄りに位置する。北西側のⅢ区に SKⅢ-5 が接するよう存在しているが、先後関係等不明である。SEVI-1 の上面での直径は1.13m、底径は0.65mで、検出面からの深さは0.94mである。

井戸埋土中位の第2層中には、尖らせた細い自然木とともに漆塗りの布状有機質膜が遺棄されており、その約15cm下部には一辺10cm～十数cm大の角～亜角礫が敷いたように置かれていた。その状況から、礫は、水をくみ上げる際ニ水を漏らせないようにする機能を有していた可能性が高い。

なお、礫の部分から須恵器上鍋が出上しており、井戸の廃絶時期も15世紀の所産と考えられる。

### 3. 小結

VI区で検出した遺構のうち、SEVI-1 は中世の所産であることがほぼ判明したが、SBIV-2 については柱穴から遺物が出土しておらず、時期は不明である。ただし、包含層出土遺物からは中世の可能性が高いものと推察される。なお、遺構の残存状況から、里道として造成されたのは中世の集落跡廃絶後であったと判断される。

## 第4章 遺物

### 第1節 土器

#### 1. 概要

土器は各地区から出土しており、弥生時代前期から中世後半にかけて幅の広い時期のものが見られる。弥生時代前期の土器はⅡ区の流路から出土しており、遺構は検出されなかった。近辺には同時代の片引遺跡が存在している。

古墳時代前期の土器はⅠ区の柱穴から出土したほか、Ⅱ区やⅤ区の流路から出土している。また、遺跡北西の尾根上に存在する茶すり山古墳からもたらされたと考えられる埴輪が各地区から出土している。古墳時代末から奈良時代初期の土器はⅣ区の下層建物に伴って出土している。これ以降、11世紀頃まで土器が出土しており、墨書き上器や円面鏡・転用鏡、綠釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器など遺跡の性格を考えるうえで重要な遺物が見られる。

12世紀にはいると、獨立柱建物や井戸が構築されて集落が營まれるようになる。輸入陶磁器のほか、東播系須恵器、常滑などがもたらされており、16世紀初頭頃には廃絶する。

#### 2. Ⅰ区の土器（図版38・39、写真図版39～42）

Ⅰ区では中央を分断して走るSD I-1や、多くの柱穴が検出された。

1～14は柱穴出土の土器である。1～3はPI-2から、4・5はPI-3から出土しており、両柱穴は隣り合って検出されており、古墳時代前期の土器が意図的に埋め込まれた状態で出土した。

1は小型丸底窓で、下層から出土した。器高8.5cm、口径約8.2cm。直線的にわずかに開く口縁部は内面に横方向のハケ調整を施し、外側はナデによって仕上げる。体部内面には粘土紐の痕跡を残し、強い指ナデによって成形している。外面上部にはハケ調整を施し、底部ケズリの後ナデによって調整している。底部には黒斑が一部に見られる。

2・3は高杯脚部である。裾広がりの脚柱部から大きく広がる脚端部に続く。脚柱部には縦方向のヘラミガキ、内面には横方向のヘラケズリを施す。脚端部の内面はハケによって調整し、外側はヨコナデで仕上げる。

4も高杯脚部であるが、2・3とは異なり、脚柱部上端が中実となり、内面には絞り痕が残され、ナデによって仕上げている。

5は壺である。器壁が厚く、内面の調整はナデによって行われ、粘土紐の痕跡を残す。外側の調整は縦方向の粗いハケ、口縁部外側はヨコナデ、内面は横方向のハケによって行われる。

6はPI-1060出土の土器小皿である。底部には回転糸切りの痕跡が見られ、ヨコナデによって調整し、内面には仕上げナデを施す。

7はPI-1041出土の土器器皿である。底部はへら切りと思われる。ヨコナデによって調整し、内面にはナデを施す。

8も同じくPI-1041出土の土器器皿である。口縁端部を外側に拡張し、屈曲部内面を削っている。また、PI-1041からは301の輪羽口片も出土している。

9はSB I-6内部のPI-1045出土の土器器皿である。底部は回転へら切りの後、ナデが施され、大き

く開く体部はヨコナデによって調整している。P I -1045からは302の炉壁片も出土している。

10はSB I - 2を構成するP I -1055出土の、11はP I -1061出土の須恵器碗口縁部である。端部には重ね焼きの痕跡が残る。

12はP I -1019出土の須恵器碗底部である。底部には回転糸切りの痕跡が見られ、ヨコナデによって調整し、内面には仕上げナデを施す。

13はSD I - 1のP I -1054出土の須恵器鉢口縁部である。内外面に自然釉が付着する。

14はSB I - 4を構成するP I -1047出土の瓦質土器羽釜である。内面はハケの後、ナデによって調整し、外側はナデを施す。

15はSB I - 5を構成するP I -1048出土の丹波三筋壺底部である。内面は粘土組の痕跡を残し、不定方向ナデによって調整する。外面下半は縱方向のヘラケズリを施し、へら書きの2条の沈線を巡らせる。

16~32はSD I - 1から出土した。23・26・29・32は上層から出土している。

16・17は土師器小皿である。手づくねで成形され、ナデによって調整される。

18~20は土師器皿で19・20はハケ状のナデによって調整される。口縁端部はヨコナデを施す。

21は高い中実の平高台を有した土師器椀で、底部は回転へら切り、内外面は回転によるナデで成形し、内面には仕上げナデが見られる。

22は瓦器椀で、内外面に細かい横方向のヘラミガキを施し、底部内面は暗紋状になる。口縁端部内面には凹線を施す。

23~25は須恵器碗口縁部であり、重ね焼痕が残る。

26は東播系須恵器鉢口縁部で、口縁端部を上方に拡張して玉縁状を呈す。

27は砂粒の多い胎土を用いた須恵器鉢である。大きく開いた体部からやや外反する口縁部へと続く。底部外縁に断面三角形の高台を貼り付ける。回転ナデによって成形するが、体部下端には横方向のヘラケズリを施す。ヘラケズリを施した部分にかけて、墨書きが3行にわたって書かれており、「但馬也 □ □三郎カ (花押)」と読める。口径約22.5cm、器高8.6cm、底径約11.9cm。

28は須恵器甕で、小片であるが、口径57cmを復原する。口縁部は外側に面を持ち、上下を強いナデによって窪める。肩部には平行タタキが残る。

29は白磁碗で、玉縁状の口縁部をもつ。

30は青磁盤口縁部で、貰入の多い緑灰色の釉薬を内外面に施す。

31は龍泉窯系の青磁碗底部で、底部高台内側の釉薬を落書き取る。内面に片切形の割花紋が施紋される。他に写真のみの掲載の中国製の天目茶碗片(300)などの輸入陶磁器が出土している。

32は土師製の土鉢である。

33~35はSD I - 2から出土した。

33・34は須恵器杯口底部である。回転へら切りの痕跡を残す。

35は須恵器横瓶で、直立してわずかに外反する口縁部をもつ。肩部外縁には平行タタキ、内面には同心円状の当具痕が残る。

36~40はSD I - 5から出土した。

36・37は土師器小皿で、ナデによって仕上げる。

38・39は土師器皿で、杯状を呈する。ナデによって仕上げる。

40は土師器羽釜で、外面に煤が付着する。体部外縁には平行タタキが残され、内面はナデによって仕

上げる。口縁部から鉄部はヨコナデを施す。

41・42は包含層出土のもので、41は土師器皿、42は龍泉窯系の青磁碗で、内面に片切形の鶴花紋が施紋される。

この他、PI-1036からは304(42.2g)の炉壁或いは炉床が、また、SD I-1からは305(43.5g)や306(13.8g)の鉄滓或いは炉壁が、包含層からは303(17.3g)の炉壁が出土している。すべてわずかだが磁性を有している。

### 3. II区の土器 (図版39~41、写真図版43~47)

II区では谷地形を検出した。その中の流路は砂層やシルト層で埋没しており、上層では杭列などが検出され、水田などに利用されていたようである。出土遺物は多く、弥生土器や土師器、土製品、須恵器、灰釉陶器、黒色土器や木器などが出土した。出土土器は大きく上層と下層に分けて報告し、上層には中世前半の土器が含まれる。

43~55は下層出土の弥生土器、土師器である。

43は弥生前期の壺の肩部で、外面にはヘラミガキを施し、2条の沈線を巡らせる。

44は土師器瓶の底部で、器壁の厚い円筒状の形態をもつ。壺部の内面を面取りして尖らせている。内外面ともハケ調整を施す。円孔が穿たれている。上層でも同種の破片(57)が出上している。

45・46は土師器杯である。45は緩やかに開く浅い器形で、口縁端部を短く外反させる。外面には横方向へのヘラミガキ、内面には放射状の暗紋状のヘラミガキを施す。

46はやや深手の器形で、口縁端部を短く外反させており、内面に浅い四線を施す。外面下部には横方向へのヘラミガキ、内面には斜め方向の暗紋状のヘラミガキを施し、赤色顔料が塗布される。

47も土師器杯で、回転ヘラ切りの底面に「治□」の墨書が書かれる。

48は土師器鉢で、内溝して立ち上がる体部から、ナデによって薄く仕上げた口縁部へと続く。外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデにより調整する。外面の一部に黒斑が見られる。

49~53は土師器壺である。肩部外面は縱方向のハケ、内面はヘラケズリによって成形・調整する。口縁部内面を横方向のハケで仕上げるもの。(49~51)ナデによって仕上げるもの(52・53)がある。口縁端部の形態は丸く納めるものと、上方に摘み上げるものがある。

54は土師器鏡である。大きく開いた体部から外溝して横に広がる口縁部へと続く。体部外面は縱方向のハケ、口縁部外面はタクキの痕跡を残してナデによって仕上げる。体部の内面の下半はハケをナデ消し、上半は横方向にヘラケズリを施す。口縁部内面は横方向のハケをナデ消している。外面には煤が付着する。

55は土師器壺の底部で、炊口の一部が残る。掛けは欠損するが、底より上方に突出し、口径は比較的大きく54の鍋などに対応する。一部にハケを残すが、ナデによって仕上げている。

56~72は上層出土の土師器である。

56は手づくねの壺である。外面にはハケが残る。

57は土師器瓶の底部で、器壁の厚い円筒状の形態をもつ。外面はハケ調整を施し、内面下半はハケ、上部はヘラケズリを施す。円孔が穿たれている。

58は高脚脚部である。壺部から外面はナデによって仕上げ、内面はハケを施す。非常に器壁が厚い。

59・60は土師器小皿、61・62は皿である。ナデによって仕上げるが、一部にハケ状の痕跡が残る。

63は土師器椀底部で、底部は回転糸切りである。

64は土師器の大型の甕あるいは鍋口縁部である。内外面ともハケによって仕上げ、端部はナデを施す。外面には煤が付着する。

65は土師器の大型の甕で、口縁部の内外面を横方向のハケで仕上げている。肩部外面は縱方向のハケ、内面はヘラケズリを施す。

66は土師器鍋で、内外面ともハケによって仕上げている。

67~71は土師器甕である。体部外面は縱方向のハケ、内面はヘラケズリによって成形・調整する。69は内面にもハケ調整を施している。口縁部内面を横方向のハケで仕上げるもの(68・70・71)、ナデによって仕上げるもの(67・69)がある。

72は土師器甕で小片のため、傾きが不正確であるが、短く聞く口縁部と、タタキによって成形する体部を持つ丹波型。

73は土製の円柱で縦に細い孔が貫通する。上部を欠損し、底面をやや斜めに平らに調整することから、土馬の脚部と考える。

74~77は土製の土鍤である。

78は黒色土器椀で、内黒A類である。低い高台を貼り付け、外面はナデによって仕上げ、内面には暗紋が施される。

79~81は縄釉陶器である。

79は、II区の流路遺構の下層より出土。約3分の1残存する、縄釉陶器の椀、底部である。高台は、平高台である。底部中央がくぼむ。器面は、内外面共に摩滅が著しく、調整不明である。釉調は、明緑色を呈し、底部を除く器面に施釉を行う。硬質の土器である。篠塗、10世紀前半に製作年代が求められる。

80は、II区の流路遺構の上層より出土。約2分の1残存する、縄釉陶器の椀、底部である。底部は、ヘラ状工具により削り出し、中央部をさらに円形に抉る、削り出した輪高台である。高台外側面下半部の面取りを行う。器面は、ロクロナデを施す。釉調は、緑色を呈し、全面施釉を行う。見込み部分に重ね焼きの痕跡がある。硬質の土器である。復元底径7.0cmを測る。篠塗、10世紀前半に製作年代が求められる。

81は、II区の流路遺構の上層より出土。約5分の1残存する、縄釉陶器の椀、底部である。器形は内湾しつ立ち上がる体部を有し、高台は、低く、細い削り出し高台である。高台端部は外につまみ出すように成形する。器面は、ロクロナデを施す。釉調は、濃緑色を呈し厚く全面施釉を行う。硬質の土器である。復元底径8.4cmを測る。近江塗、10世紀後半に製作年代が求められる。

82~84は灰釉陶器である。

82は、II区の流路遺構の上層より出土。約7分の1残存する、灰釉陶器の椀、体部から口縁部にかけての破片である。器形は、見込み部分から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部がやや外に開く。器面の調整は、回転ナデを施す。釉調は、灰色を呈し、器面内面と外面、口縁端部まで漬け掛け施釉を行う。復元口径13.9cmを測る。猪塗、9世紀中頃に製作年代が求められる。

83は、II区の黒色シルト層より出土。約9分の1残存する、灰釉陶器の椀、底部である。高台は高く、垂直に近い。断面は三角形を呈する貼り付け高台である。高台基部には、貼り付け時の指オサエが見ら

れる。底部はロクロナデのちナデ調整を行う。釉調は、やや緑色を呈し、見込み部分に施釉を行う。

胎土は、灰色、小石を含む。美濃窯、10世紀後半に製作年代が求められる。

84は、II区の流路遺構の上層より出土。約4分の1残存する、灰釉陶器の輪、底部である。高台は、低く、断面が台形を呈する貼り付け高台である。底部内面にはかすかに回転糸切り痕が観察され、仕上げナデが施される。高台基部には、貼り付け時の指オサエが見られる。器面全体に回転ナデを行う。残存する器面の内外には、釉は見られない。胎土は、灰色を呈する。復元底径5.8cmを測る。美濃窯、10世紀後半から11世紀前半に製作年代が求められる。

85~98は下層出土の須恵器である。

85~89は杯Aで、底部は回転へら切りで、一部にナデを施す。88は底面に「不」状の記号の墨書きが見られる。

90は皿で、底部内面には回転によるナデの後、仕上げナデを施す。

91~93は杯Bで、91は体部外面に回転によるヘラミガキが施されたものである。8世紀頃の兵庫県志方窯群の特徴である。

93は底面に墨痕が残り、転用硯として用いられている。

94は高台付きの皿で、口縁部内面を強くナデする。

95は輪で深い体部に、わずかに外反する口縁部をもつ。体部下半には回転によるヘラミガキが見られ、金属器写し或いは絵釉陶器の系統のものである。

96は長頭壺口縁部で、直立後、大きく外反する。外面には自然釉が付着する。

97は壺口縁部で、ナデによって仕上げられているが、頸部には平行タタキが残される。

98は高杯脚部である。脚端部は下方につまみ出す。

99~119は上層出土の須恵器である。

99は杯G或いは金属器写しの椀の蓋で、扁平な摘みに口縁部内面に短いかえりが付く。

100・101は杯Bの蓋で、100は扁平な器形の口縁部のみ屈曲させる。

101は済曲した体部に摘みがつく。

102は残存しないが、摘みの貼り付け基部が観察され、皿Bの蓋になるものと思われる。内面にへら書きの記号が見られる。

103は残存しないが、摘みの貼り付け基部が観察され、皿Bの蓋になるものと思われる。内面にへら書きの記号が見られる。

104~111は杯Bである。104・105は器高の低いもので、器壁も厚い。

106では体部外面を、高台基部から口縁部までヘラケズリを施した後、回転ナデで仕上げている。

109・110は墨書き土器であり、109には「東家」、110には「平□」と共に底面高台内に書かれている。

111は確認調査の際に出土した。外方に貼り付けられた高台の内側に、「十」のへら書き記号が見られる。

112は杯Aで、底部外面の一部にヘラケズリが施されている。

113は模挽であるが、稜は不明瞭である。厚い器壁をもち、一旦開いた体部から、緩やかに外反する口縁部へと続く。口縁端部内面には沈線状の窪みが巡る。

114は回転糸切りの小皿で、自然釉が付着する。

115は小型の短頭壺で、葉巻であろう。外面上半や口縁部、底部内面に自然釉が付着する。

116は灰口縁部で、わずかに外傾する直線的な口縁部をもつ。肩部内面には同心円状の當て具痕が残る。

117は壺下半部で、比較的高く外方に貼り付けた高台をもつ。体部外面下部は回転によるヘラケズリ後、ナデによって仕上げる。

118は確認調査時に出土した小型の円面鏡で、脚部には10方向の長方形の透かしが外から内方向へと切り込まれている。鏡面には顯著な使用痕は見られない。

119は須恵質の小型の壺肩部と思われるが、平行に引いた2条の沈線から上方に直線を引き、そこから片側毎に細い葉状の紋様を3つ描いている。沈線の下部には四角い粘土の割がれた痕跡が観察でき、把手或いは耳状のものが貼り付けられていた可能性がある。草花紋をもつ丹波であろうか。

#### 4. III区の土器 (図版42、写真図版48・49)

120~141はIII区から出土した。

120~123はクロボク層の落ち込みから出土した。当初、堅穴住居と考えて調査したが、柱穴・周壁溝や焼上などは検出されなかった。120は土師器の手づくねの堆で、小型である。口縁部は正円をなさない。

121は土師器壺で、体部外表面は縱方向のハケ、内面はヘラケズリによって成形・調整する。

122は須恵器杯口で、短く内傾した立ち上がりをもつ。底面にのみヘラケズリが施されている。TK217形式期のものであろう。

123は杯G或いは杯口壺で、底部はへら切り後、ナデによって調整されている。

124はSBIII-8を構成するPIII-190出土の土師器小皿で、ナデによって成形されている。

125はPIII-189出土の須恵器碗或いは杯口縁部で、器壁は厚い。

126はPIII-43出土の須恵器壺底部である。薄い器壁の体部から、厚い底部と幅の広い高台が貼り付けられる。

127はPIII-14出土の常滑甕の肩部から口縁部で、口縁部は上下に拡張され、N字状を呈する13世紀後半から14世紀初頭のものであろう。

128はPIII-24出土の常滑甕底部である。底面内部にはユビナデの痕跡が残る。底面はナデによって仕上げている。近接した柱穴から出土していることから、127と128は同一個体の可能性がある。

129はSBIII-8を構成するPIII-74出土の同安窯系青磁皿で、底面はヘラケズリによって釉薬が搔き取られ、底部内面には櫛書き紋が施される。

130はSBIII-8内部のPIII-73出土の龍泉窯系青磁碗で、内面には片切形の割花紋が施設される。

131~133はSKIII-1から出土した。SKIII-1は水溜状の井戸と考えられる遺構で、西側へ向かって溝が取り付く。その溝からは134が出土している。

131は土師器の鍋の口縁部であろう。直立する口縁端部が玉縁上に肥厚する。

132は青花碗口縁部で、口縁部内面に沈線、外側には二重の沈線の間に蘿蔓紋状の紋様を描いている。17世紀初頭頃の漳州窯産と思われる。

133は龍泉窯系青磁碗で、丸みをもった体部に比較的高い高台をもち、広大内面の釉を搔きとる。外側には櫛書きの細い蓮弁紋を背紋するが、劍頭と蓮弁の単位が一致しない。底部内面には草花紋様の紋様を描く。

134は土師質の擂鉢であろう。底部のみの出土であるが、内面が摩滅する。底部外側にヘラケズリを

施す。

135はSKⅢ-6 出土の土師器の把手で、瓶や甕のものであろう。

136~139は調査区の東端、上段の水田の基部に設けられた溝、SDⅢ-1 から出土した。

136は土師器の杯であり、ナデによって仕上げられるが、器壁が厚く重な器形であることから、中世に属するものであろう。

137・138は須恵器鉢で、東播系の捏ね鉢である。口縁部を上下成いは上方に拡張している。

139は青磁碗口縁部である。全面に施釉するが、紋様は見られない。

140はSDⅢ-2 出土の土師器羽釜である。直立する口縁部直下に鍔を貼り付ける。ナデによって仕上げるが、体部外面には平行タタキが残る。

141は遺構検出中に出土した常滑焼口縁部小片で、他に308の口縁部も出土している。これらの破片は接合できなかったが、127と接合できた破片も存在することから127と同一個体の可能性がある。

## 5. IV区の土器 (図版43、写真図版50~52)

IV区は西半部で遺構面が2面検出された。遺物は142~150が上面で検出された遺構から出土しており、151~160が下層の遺構を検出する際に埋土のクロボク層から出土している。161~176は下層の遺構や床面から出土したものである。

142~145は掘立柱建物SBIV-1 を構成する、PIV-23・33・19・21からそれぞれ出土した土師器の皿である。全て手づくねで成形され、ナデによって仕上げられている。口縁部直下が肉厚になる。小皿(142)、杯状を呈するもの(144)がある。

146・147はPIV-90から出土した。146は須恵器杯 G 釜で、欠損しているがつまみの基部が観察できる。短いかえりが付き、器壁は厚い。下层面の土器が混入したものであろう。

147は東播系の須恵器鉢口縁部で、器表面に黒色粒が表出している。口縁端部を上方に拡張して外側に面を作る。

148は須恵器椀で、緩やかに湾曲して立ち上がる体部から直線的に広がる口縁部へと続く。内面及び外面上半は回転によるナデで仕上げ、口縁端部はナデによって丸く納める。体部外面下半は回転によるヘラケズリを施し、一部不定方向のケズリも見られる。底部や高台も削りだして成形する。I区出土の27と成形および調整技法が似通うが、胎土は精緻である。京都府藤塗の須恵器或いは縁結陶器素地であろうか。

149はPIV-124出土の土師器甕である。ハケによって調整し、ナデによって仕上げているが、外面および口縁部内面は縱方向のハケ、体部内面は横方向のハケが残る。密度の粗いハケである。口縁部は外側に屈曲した後、内湾しながら立ち上がり、端部は外方に突出する。

150はSDIV-1 出土の土師器甕で、外反した口縁端部は面をもち、凹線状に窪ませる。体部外面にはハケが残り、内面は屈曲部までヘラケズリを施す。

151は土師器の小型の椀で、円柱状の高台底面に糸切りの痕跡が残る。内面の一部に煤状のものが付着する。上層の遺構のものか。

152は大型の鍋或いは甕の口縁部で、外面に煤が付着する。内面には細かい横方向のハケ、外面は縦方向のハケを施し、端部を強くナデて窪ませる。

153は土師器甕で、外面に煤が付着する。体部外面は縦方向のハケが残り、内面は口縁部・体部とも

ナデによって仕上げる。

154・155は土師質の土錐である。

156は黒色上器腕底部で、内面が黒色を呈する。粘土を付加した円盤状の底部には回転糸切りが残る。内面の底部には一方向の暗紋が施され、その後、体部にかけて放射方向の暗紋が施される。

157は須恵器蓋で、つまみが剥離した痕跡が残る。回転ヘラケズリを施した天井部から下方へ屈曲させ、さらに横へと屈曲させる。内面は屈曲部が突出してかえり状を呈する。屈曲部には重ね焼の模跡が残り、内面には砂粒が付着して灰かぶりとなることから裏返して焼成されたものであろう。内面中央は仕上げナデが施されている。器壁は厚い。

158は須恵器腕底部で、底面には回転糸切り痕が残る。底部内面が一段窪む。

159は須恵器壺の肩部から頸部で、口縁部は意図的に削られたような4回以上の破面が観察できる。外面には自然釉が付着する。

160は須恵器杯B底部で、低い貼り付け高台をもつ。ナデによって仕上げており、底部内面には多方の仕上げナデが施される。高台内側に墨が付着し、中央部が他の面より平滑であり、硯に転用されたものであろう。

161・162・170・171は下層床面から出土した。163～169は溝SDIV-201から出土した。

161・162は器表面に赤彩を施した所謂丹塗土師器の杯である。161は小型で肉厚の器壁の表面をナデによって成形し、内面に放射方向の暗紋を施す。底部にはわずかに黒斑が見られる。

162の内面は放射方向の細かいヘラミガキ、外面上半は横方向のヘラミガキを施す。底部底面にも粗くヘラミガキが残る。

163は土師器壺で、大きく肩曲し、外反する口縁部の外面は縦方向のハケの後ナデ。内面は横方向のハケの後、ナデによって仕上げている。体部内面はヘラケズリが施され、屈曲部が大きく突出する。

164は土師質の土錐である。165は土師質の円柱上を呈したもので、中実ではあるがⅡ区出土の73と同様土馬の脚部と考える。底面には筋状の痕跡が残り、器表面はヘラケズリの後、ナデによって仕上げる。竈の破片(309)もSDIV-201から出土している。

166は須恵器杯H蓋で、回転へら切りが残る。外面には自然釉が付着する。天井部内面には一方向の仕上げナデが施される。

167は杯Hで、小型の器形で、矮小化したちあがりをもつ。回転へら切りを残す底部には筋状の痕跡が見られ、ナデによって仕上げる。

168は須恵器皿で、底部外方に低い貼り付け高台が付く。口縁部内面が窪む。内面には火捺が見られる。

169は低脚高杯の脚部で、脚端部は屈曲して下方に下垂し、外方に面を持つ。杯部内面には不定方向の仕上げナデが施される。

170は杯Hで、小型の器形で、矮小化したちあがりをもつ。回転へら切りを残す底部はナデによって仕上げる。

171は杯Gである。やや外反する口縁部から回転へら切り後ナデで仕上げる底部へと続く。底部内面には仕上げナデが施される。

172はPV-220から出土した丹塗り土師器杯で、内面には放射方向の暗紋を施す。

173はPV-219出土の須恵器杯G蓋で、大井部には回転ヘラケズリを施し、頂部にはつまみ貼り付けの際のナデが見られる。他の須恵器よりは器壁が薄く、胎土・焼成とも良好である。

174・175はSBIV-21内部の小柱穴PV-218から出土した。174は土師器皿或いは杯である。器表面の風化が著しい。175は須恵器口縁部である。

176はPV-228出土の土師器甌の破片で、底の一部であり、煤が付着する。ハケによって調整され、ナデによって仕上げられる。

## 6. V区の土器 (図版44・45、写真図版53~58)

177~241はV区から出土した。

177はSBV-1ののる最上段の南末端の落ち込み出土の土師器碗底部で、回転糸切りの痕跡が残る。

178は下層建物SBV-21を構成するPV-812出土の土師器杯である。口縁端部をナデにより細く作る。器表面風化が著しい。

179・180は最上段の南西部のSDV-549から出土した。179は土師器杯で、直線的に開く体部をもつ。180は土師器の鉢であろうか。大きく開く体部に、高台が剥がれたものと思われる痕跡を残した底部をもつ。写真図版の310の土師器碗底部も549からの出土である。

181は、最上段の南西部、PV-550から出土。約10分の1が残存する、縄釉陶器の皿、口縁部である。口縁部は、肩部から鋭角的に屈曲し、端部は、丸く肥厚する。器面は、ロクロケズリのち、ナデを施す。器壁は薄い。外面口縁部には成形時のヘラキズが残る。釉調は、淡緑色を呈し、全面に施釉を行う。硬質の土器である。復元口径は、12.8cmを測る。

182~241はV区の東半部の谷から出土した。182~186は縄釉陶器である。

182は、暗褐色シルトより出土。約12分の1が残存する、縄釉陶器の椀、口縁部である。器形は、底部から輪状に立ち上がり、体部でやや内反りする。口縁部端部が外方へ伸びる。器面は、ロクロナデを施す。釉調は緑色でも濃い。器面の内外面に施釉を行う。硬質の土器である。復元口径13.7cmを測る。

183は、黒褐色シルト内より出土。約3分の1が残存する、縄釉陶器の椀、底部である。高台は、低く削り出した、削り出し高台である。底部は、高台部分をヘラ状工具で、回転ケズリを施す。器面は、回転ナデを施す。釉調は、薄い緑色を呈し、底部を除く、器面に全面施釉を行う。硬質の土器である。復元底径6cmを測る。篠産、10世紀前半に製作年代が求められる。

184は、19層の上から出土。約2分の1が残存する、縄釉陶器の椀、底部である。他の縄釉陶器に比して、高台は高く、細い。底部高台内に回転糸切りの痕跡が残る、貼り付け高台である。器面は、ナデによる調整を施す。釉調は、濃緑色を呈し、器内外面共に全面施釉を行う。見込み部分は、三又トテンの痕跡が2箇所ある。硬質の土器である。復元底径7.4cmを測る。近江産、10世紀中頃に製作年代が求められる。

185は、V区（北半）の表土から包含層上部出土。約5分の1が残存する、縄釉陶器の底部である。外に踏ん張る、削り出し高台である。高台の底面は、内側に傾斜して、内側面は丸く、底部は、平たくヘラ状工具で成形している。器面は回転ナデによって調整を施す。釉調は、緑色（若草色）を呈する。高台を除く、内外面に施釉し、高台底面や底部には、釉が点々と見られる。見込み部分には、凹線がある。硬質の土器である。復元底径6.4cmを測る。篠産、10世紀前半に製作年代が求められる。

186は、暗褐色シルト内から出土。約3分の1残存する、縄釉陶器の椀、底部である。高台は、低く、太い、外に踏ん張る削り出し高台である。高台底面には、凹部と2箇所ヘラ起こし痕がある。器面は、

回転ナデを施す。釉調は、濃緑色を呈し、底部を除く、器内外面に施釉する。見込み部分には、沈線が巡る。硬質の土器である。底径は、6.3cmを測る。近江産、10世紀後半に製作年代が求められる。

187～195は灰釉陶器である。

187は、西半、咲1の8層内出土。口縁部で約10の1、底部で約5分の1が残存する、灰釉陶器の椀である。器形は、丸みをもち、立ち上がり、内湾しながら体部上方でやや外反し、ラッパ状に口縁部が開く。口縁部内面に沈線がある。高台は、高く、内外側面は外傾する、貼り付け高台である。椀部分の成形は、回転ナデを施し、外面高台近くの体部にはヘラケズリを行う。釉は、内面全面に、外面は体部下半にまで施釉を行う。器高は、6.6cm、復元口径15.9cm、復元底径7.8cmを測る。美濃産、10世紀後半に製作年代が求められる。

188は、西半、咲1の8層内出土。約2分の1が残存する、灰釉陶器の椀、底部である。高台は、やや高く、186と同様高台内外側面は外傾する、貼り付け高台である。高台基部に指オサエを施す。釉は、見込み部分を除き、内外面に漬け掛け施釉を行う。復元底径7.1cmを測る。美濃産、10世紀後半に製作年代が求められる。

189は、19層より出土。約2分の1以上が残存する、灰釉陶器の椀、底部である。高台は、高く、内外側面が外傾する、貼り付け高台である。器形は、回転ナデにより成形し、底部には、回転糸切り痕が明瞭に残り、高台基部には指オサエを施す。釉は、器面内外に自然釉が見られる。復元底径7.8cmを測る。美濃産、10世紀前半に製作年代が求められる。

190は、谷西側より出土。約2分の1強が残存する、灰釉陶器の段皿である。器形は、内面底部から、逆八の字状に立ち上がり、口縁部がやや外方へ開く。縁帯部は広く、内面に稜を有する。高台は、外側面に稜をもち、断面が三日月状を呈する、貼り付けの三日月高台である。高台下面はヘラ状工具で外面を削る。器面は、回転ナデを施す。釉は、見込み部分と体部下半から高台部分を除き、漬け掛けを行う。復元口径13.5cm、復元器高2.4cmを測る。猿投産、9世紀後半に製作年代が求められる。

191は、暗灰色シルト内より出土。約3分の2残存する、灰釉陶器の椀、底部である。高台は低く、内外面共に直立し、端部は丸い。断面は、台形の貼り付け高台である。高台基部には指オサエを行なう。器面は、回転ナデを施す。見込みや高台内面に墨痕が残り、見込みは摩滅しているところから、硯として使用されたものと思われる。釉は、見込み部分を除き、外面は高台近くまで漬け掛けを行う。見込み部分には重ね焼きの痕跡がある。復元底径6.3cmを測る。美濃産、10世紀前半に製作年代が求められる。

192は、19層の上より出土。口縁部の約4分の1、底部の約2分の1が、残存する灰釉陶器の段皿である。器形は、浅い底部から、湾曲しながら外方へ逆八の字状に立ち上がり、体部中位に段を有する。口縁部は、内湾しながら外反する。高台は、低く、内外共にやや直立し、端は丸い、貼り付け高台である。高台底部には、糸切りの痕跡が見られる。高台基部は指オサエが見られる。釉は、高台を除く器面に漬け掛けを行う。見込み部分には、重ね焼きの痕跡がある。見込み部分、外面高台内側に墨痕が残り、器面は平滑である。硯として転用された。復元口径13.1cm、器高2.5cmを測る。美濃産、10世紀前半に製作年代が求められる。

193は、暗褐色シルト層より出土。約4分の1弱が残存する、灰釉陶器の底部である。高台は、低く、断面が三角形を呈する貼り付け高台である。器面は、回転ナデ、その後ナデ調整が施される。色調は、灰色を呈し、釉は見込みまで、外面は高台近くまで施釉を行う。見込み部分には、重ね焼きの痕跡がある。復元底径6.4cmを測る。美濃産、10世紀前半に製作年代が求められる。

194は、黒褐色シルト層より出土。底部の約2分の1が残存する皿である。190・192に比して深い皿である。器形は、見込み部分から内湾しつつ凹部を有し、やや逆ハ字状に外反する。高台は、余り高くなく、内外面外共に外傾する。断面は、台形状を呈する貼り付け高台である。高台基部には、指オサエを施す。内面には墨痕があり、硯として使われた可能性が高い。底部外面には、回転糸切りの痕跡があり、「上」の墨書き文字がある。復元口径12.4cm、器高3.3cmを測る。美濃産、10世紀前半に製作年代が求められる。

195は、盛土層（包含層）より出土。高台が完存し、口縁部の約2分の1が残存する、灰釉陶器の皿である。器形は、底部から外方に直線的に伸び、口縁端部は丸い。内面中位に稜線を施す。高台は低く、断面は台形を呈する貼り付け高台である。底部外面には、回転糸切りの痕跡が明瞭である。また高台基部には指オサエを施す。器面は工具によりヘラケズリのち、回転ナデを行う。高台底面は凹凸が激しく、雑である。灰釉は図中に線で表現したが、見込み近くまで、外面は、高台近くまで漬け掛けを行う。復元口径11.75cm、器高2.1cmを測る。美濃産、10世紀後半から11世紀前半に製作年代が求められる。

196は確認調査時に出土した黒色土器碗で、内面が黒色を呈している。内面には細かいヘラミガキを施しており、口縁部はヨコナデで仕上げる。外面はヨコナデで成形後、一部に斜め方向の調整が残る。

197も黒色土器である。糸切り痕を残す平高台で、底部内面には放射方向のヘラミガキが施されるが、使用のためか砂粒が欠落している。底面には「大」のへら描きが見られる。

198は瓦器碗底部である。断面が丸く外方に突出した高台を貼り付け、内面には暗紋を施す。本遺跡での瓦器の出土は極めて少ない。

199は土師器の皿底部と思われ、内外面に赤彩を施した丹塗り土師器である。底部内面には細かいヘラミガキを施し、体部内外面はヨコナデで仕上げる。

200は土師器杯で、明瞭には残存していないが、丹塗り土師器かもしれない。内外面はヨコナデが残るが、底面はナデで調整している。内面の体部下半にはヘラミガキ状の痕跡がみられる。

201は土師器碗底部で、低い平高台の底面は回転へら切りの後、ナデで仕上げる。底部内面には仕上げナデを施す。外面の一部に黒斑が見られる。

202は盛土層出土の土師器杯で、回転糸切りの底部から直線的に広がる体部に続く。体部内外面はヨコナデにより数条の窪みが巡る。

203は上層出土の土師器杯で、へら切りの底部で、内面も一段窪む。

204は土師器の小型の杯で、回転糸切りの底部から数条の窪みを巡らせた直線的な体部へと続く。

205も土師器杯で、糸切りの底部から直線的に広がる体部へと続く。外面には一部回転によるヘラケズリを施し、内面は回転による強いナデで窪んでいる。

206・207は土師器の鍋で、大きく開いた体部から緩やかに外反する口縁部へと続く。外面は縱方向のハケを施した後、口縁部をヨコナデにより成形する。内面は横斜め方向のハケで調整した後、口縁部は横方向のハケで仕上げ、体部は横方向のヘラケズリで成形する。口縁端部は206が外側に面を作り、凹線状に窪ませている。207は外上方に面を作る。ともに外面に窪みが付着する。311の竈に伴うものであろう。

208~210は土師器の鍋で、屈曲して短く聞く口縁部をもち、口縁端部は外側に試張る。体部外面に横方向の平行タキを残し、口縁部はヨコナデで仕上げる。209は体部内面に横方向のハケが残る。

211は製塙土器である。直線的に広がる体部から口縁部で、指による押さえやナデが残る手づくねで

成形されている。この他にも写真のみ掲載の315・316や、器表面に布目が残る製塙上器（317）も出土している。

212は輪の羽口である。外径が約7cm、内径が約2cmの破片である。他に写真のみ掲載の314もV区出土の輪の羽口である。

213は土師質の土鍤である。この他に312の土師器壺の底部なども出土している。

214～238は谷から出土した須恵器である。

214は杯Gで、回転へら切り後、仕上げナデを施した底部から直立する口縁部へと続く。

215は杯Aで、回転へら切り後、仕上げナデを施した底部から直線的に広がる口縁部へと続く。底部内面にも複数方向の仕上ナデが施される。

216・217は皿である。216では底面にはヘラケズリを、底部外周には回転ヘラケズリを施している。

218・219も杯Aと考えるが、218は回転へら切り後、仕上げナデを施した底部から内湾して広がる口縁部へと続く。219は回転へら切りを残した破片であるが、底面に「東家」の墨書きが書かれる。II区出土の杯B（109）にも「東家」が書かれるが、筆致は異なる。

220は杯G蓋であろう。ヘラケズリを施した天井部に小さな宝珠形のつまみが付く。

221は高杯脚部である。脚端部を上下に拡張する。

222～226は杯Bである。222は太い貼り付け高台が外方に踏ん張る。223も外方に踏ん張る貼り付け高台をもち、底面は回転へら切り後、細かい布によるナデが施される。体部外面には細かい横方向のナデが見られる。313も杯Bである。

224・225は低い貼り付け高台が付くもので、224の器壁は厚い。

226も低い貼り付け高台が付くもので、皿になるかもしれない。

227は低い削り出し高台をもった椀で、京都府鎌倉産の須恵器である。高台から体部下端までヘラケズリが施される。

228は上層出土の椀口縁部で、大きく広がった体部外面には回転ヘラケズリが施される。口縁部、内面は回転によるナデで仕上げる。

229～231は底面に回転糸切り痕が見られる椀底部で、高台を持たず、底部内面が一段陥むもの（229）、低い平高台をもち、底部内面が一段陥むもの（230）、低い平高台をもち、内面が緩やかなもの（231）がある。

232は口縁部径21.5cmが復原される大型の壺で、大きく張った肩部から直立する口縁部へと続く。口縁部は四角く收める。肩部外面には横方向の平行タタキの後ナデ、内面には同心円状の当て具の痕跡が残る。

233は双耳壺肩部である。二条の比較的高い突帯間に粘土の剥がれた痕跡が見られる。

234は壺の底部であろう。大きな高台が外方に貼り付く。内外面に自然釉が付着することから、口径の大きな器形であろう。

235は大型の壺口縁部で、口径約44cmを復原する。外反する口縁部は二重口縁状となり、端部は内外へ拡張する。肩部外面は縦方向の平行タタキで、内面には同心円状の当て具痕が残る。頸部には櫛描列点紋を施す。

236～238は東播系の鉢である。236は玉縁状の口縁部をもち、内面は斜め方向にナデ上げている。237

は斜めに切り落とした口縁端部をもつ。238は底部で、底面には回転糸切りの痕跡が残るが、ナデによって仕上げており、周辺部が摩滅している。内面の底面は剥離し、体部は滑らかな磨耗痕が観察できる。

239は丹波掘鉢で、内面にはへら書きの横り目が放射状に引かれ、底面は使用による摩滅が著しい。

240は龍泉窯系青磁皿で、口縁部は輪花状に成形する。福田片岡遺跡、岡田分類皿2で、16世紀後半の龍泉窯系皿で最も新しいものに属する。

241は龍泉窯系青磁碗口縁部破片で、蓮弁紋が一部見られる。



317

図1 V区谷内出土製壺土器

## 7. VI区の土器 (図版45、写真図版58)

242は井戸SEVI-1出土の土鍋であるが、須恵質の焼成である。口縁端部は外側に逆「L」字形に折り返し、上端部に面をもち、玉縁状に近い。口径は25.1cmを測る。体部は俵形に近いと思われ、外面には平行クタキが認められる。焼成は良好である。

243はVI区SDVI-1出土の丹波焼と思われる陶器である。SDVI-1の位置は現在不明となっている。

器種は盤と推定され、口径は37.5cmと非常に大きい。口縁部は体部から上方にいちど屈曲したのち、横外方に内湾気味に短くのびる。端部には面をもつが、上方に少し抵抗している。器高は不明であるが、10cm以下であろう。内面は25Y5/3黄褐色を呈する。

244は南部の包含層より出土した青磁碗底部である。高台径は5.0cmを測り、輪高台中央より内側は露胎となっている。その他の部分には施釉しているが、文様は認められない。15世紀代の所産と考えられる。

## 第2節 増輪

### 1. 概要

出土した増輪は大半が円筒増輪であり、朝顔形増輪も含まれる。ほかに壺形あるいは蓋形増輪および不明器財増輪を各1点図示できた。図示した増輪は15点中11点(245・247・249~252・254~256・258・259)がSDI-1出土であり、I区からはもう1点(246)出土し、残りの3点はIV区(253)およびV区(248・257)から出土している。

出土した増輪は時期的には東御尾根奕塙に所在する茶すり山古墳と同時期と判断できる。しかし、茶すり山古墳の西側斜面に位置するV区での出土数量に較べて、古墳の設築部分から約210mも離れた西側にあたるI区のSDI-1から数多く出土していることは、増輪を意識的に移動したか、あるいは茶すり山古墳に供給した増輪焼成場がI区付近であった可能性の両者が考えられよう。

### 2. 各説 (図版46、写真図版59)

#### 円筒増輪

245は口縁部の細片であるが、径は不明である。端部には面をもち、内面には横ハケ、外面には「↑」

と推定されるヘラ描記号文を施している。

246～248は体部の破片であるが、位置は不明である。246は2.8cmもの幅広い突帯を有する。248は突帯の上部に推定径5.5cmの円形透孔が確認できる。248の内面には縦ハケが遺存している。

249～253は基底部の破片である。249～251は外側に縦ハケを施すが、252のハケは不定方向である。253は内傾することから、円筒埴輪以外の器種を考慮した方がよいかもしれない。

254～256は体部の小片である。254は平版的であることから、器財埴輪の可能性もある。255の外側横ハケには静止部分が認められるが、256の繊筋横ハケでは静止痕は観取できない。

257は朝顔形埴輪口頭部境の屈曲部分の破片で、突帯の断面は三角形状を呈する。

258は壺形埴輪の部分破片と推定され、259は器財埴輪の部分と思われるが、不明である。

なお、図示できなかったその他の埴輪小片は、写真のみ写真図版59下半に掲載した。

### 第3節 木製品

木製品はI区の溝SD I-1、II区の流路、III区の井戸およびV区の流路などから出土している。

#### 1. I区出土の木器（図版47・48、写真図版60・61）

W 1～18はI区の中世の溝SD I-1から出土した。

W 1はW 2に近接して出土しており、組み合わさせて小型の曲物を構成するものと推測される。W 1は側板になり、針葉樹の厚さ0.35cmの板目材薄板を幅6.4cmの幅に切り、湾曲させたもので、側面の内側に沿って小さな段を切り込み、底板との装着に備える。

W 2はW 1の底板あるいは天井板で、針葉樹の柾目材を厚さ1.1cm、直径12.2cmの円盤に作る。角は丁寧に面取りを施している。中央に穿孔が見られるが、非常に粗い。曲物の蓋になるものか、魔棄の際に開けられたものかは不明である。スギ。

W 3は厚さ2mmほどの薄板を方形に切ったもので、隅は丁寧に角を落としている。折敷の底板と思われる。表面に墨痕様の痕跡が認められるが、文字が読み取れるものではない。

W 4～8は箸であろう。針葉樹を細く削って作っている。W 4・5は両端を尖らせた両口箸である。直径0.5cmで、各々長さ22.9cm、23.2cmを測る。W 6・7は一端を欠くが、同じく両口箸であろう。W 7はスギを用いており、他のものも肉眼では同様の材を用いているものと思われる。W 8は0.4×0.8cmの細板状で、一端を斜めに削っている。他端は失われている。側面の加工は粗い。

W 9は針葉樹板目材の継板で、長さ26.9cm、幅2.7cm、厚さ0.85cmを測る。一端は焼け焦げており、表面の一部にも小さな焦げが見られる。側面の表側角を大きく面取りし、刀子様の工具で加工している。表裏に抜ける直径3mmほどの穿孔が3ヶ所に見られ、中央を除く2ヶ所には目釘が残されていた。

W10～15は溝の北端から溝底に貼り付くように出土した板材である。すべて板目材の薄板で、スギを用いている。加都遺跡で壁板として報告されているものに類似する。W10は一端を欠くが、長さ229.6cm、幅14.0cm、厚さ0.8cmの板材で、一端の中央に5cm角の方形の枘孔を穿つ。器表面は一部に当たりがあるものの平滑であり、工具痕は認められない。

W11は残存長246.1cm、幅15.0cm、厚さ11cmのスギの板材で、一端の中央からわずかに偏った位置に約1.2×1.0cmの方形の小さな孔を穿つ。他端の偏った位置にも方形の穿孔が残ることから、ほぼ全長が残るものと推定される。器表面は平滑であり、工具痕は認められない。

W12は残存長153.4cm、幅12.0cm、厚さ0.9cmの板材で、一端のほぼ中央に約0.8×1.3cmの楕円形の小さな孔を穿つ。他端の偏った位置にも穿孔の痕跡が残る。器表面は平滑であり、工具痕は認められない。

W13は両端部が残存しないが、残存長102.5cm、幅12.3cm、厚さ0.9cmの板材で、一端の中央からわずかに偏った位置に約1.3×3.7cmの楕円形の孔があり、穿孔の可能性がある。他端にも孔の痕跡と思われる抉れが残る。一部表面が黒くなっている、柿渋などを塗布したものかもしれない。

W14は両端部を失うが、残存長120.5cm、幅12.6cm、厚さ0.8cmの板材である。工具痕は認められない。

W15は一端を失うが、残存長94.4cm、幅11.9cm、厚さ0.6cmの板材である。工具痕は認められない。

W16は丸太材を用いた杭で、一端を腐食により欠く。他端は3面から3段にわたって細かい刃こぼれが残る鉈様の工具を用いて比較的粗雑に尖らせている。先端部のみ4面から加工する。

W17は針葉樹の直径2.5cm程の細い丸太材を用いた杭で、一端を腐食により欠く。他端は2面から比較的粗雑に尖らせている。

W18は大型の杭で上端部を欠く。直径7.4cmのクリの丸太材の一端を約30cmにわたって削り、尖らせている。鉈状の工具で4面から打ち込んでおり、1面で9回の打ち込み痕跡が残る。

## 2. II区出土の木器（図版49～52、写真図版62～65）

II区の流路からは杭列とともに多くの有機質遺物が出土している。W19～51は杭の一部と流路埋土から出土したものである。埋土を大きく二分すると出土したほとんどの木製品が上層からの出土となる。

W19～25は上層から出土した。

W19は呪符木筒と思われる。先端部をわずかに欠くが、残存長30.9cm、幅3.1cm、厚さ0.55cmの針葉樹板目材の一端を尖らせており、051型式に分類できる。上半に6文字ほど墨で文字が書かれるが、読取できない。裏面には墨痕は見られない。

W20は厚さ0.3cmの薄板の一面に墨痕が残る。上下、右辺の三方を欠き、3文字分ほどの文字が見られる。「匁安匁（ぎょうにんべん）」か。「急々如律令」と書かれた「如律」の部分の可能性があるが、判定したい。

W21～23は針葉樹の板目薄板を加工したもので、舟串であろう。W21はC型式、I式に分類される上部を主頭上に加工し、切込みを持たないものであろう。

W22・23は下端部で、両側面から尖らせている。

W24は針葉樹板目材の厚さ0.3cmの薄板で、上端と一側辺は残るが下端は斜めに切り落とされ、一側辺は欠損している。木簡、祭祀具あるいは折敷底板かもしれない。

W25は厚さ0.8cmの薄板の下端部をU字に抉り、上端を細く成形したもので、上端は表裏から薄くしている。鞆の可能性を考えたが、断面は明瞭な蓄鉢形を呈してはいない。祭祀具か。

W26は下層から出土した。厚さ0.3cmの薄板の下端をやや歪に尖らせている。上端を欠くが、舟串であろう。

W27は糸巻横木で、A型式に分類される。相欠仕口の幅は約2cm、軸孔の一部が残される。先端部は方角柱の角を面取りして八角柱となり、極先端部は当たりによって摩耗する。ヒノキ。

W28は針葉樹の柾目材を用いた板材で、組物を構成するものと考えられる。一短辺を1.9×0.9cm切り欠き、その下方に目釘孔をもつ。外幅9.35cmの蓋籠組の枠などが考えられる。ヒノキ。

W29は下層から出土した。長さ11.3cm、幅厚さが2cm前後の方角柱で、表面には細かい刃こぼれのある手斧状の工具痕が残る。一側面に直交方向の粗い切り込みがあり、火切り口として用いる意図があったものと思われる。牛輪界の粗いスギなどの針葉樹である。

W30も下層から出土した。針葉樹の芯去り材を削って棒状にしたもので、一端を尖らせている。他端は面取りを施して仕上げる。ほぼ中央部の一側面に幅0.3cm程の切り込みが3ヶ所、斜め上方向に入れられている。魔賽に伴うものか、本米の川途をもつものは不明であるが、ここに紐をかけてわら屋根を葺く作業に用いる針などの用途が考えられるが、長さが32.5cmと民族例より短い。

W31・32はともに針葉樹を用いた板目材の板の一短辺を表裏から削って塊状に薄く尖らせたもので、別の製品からの再加工かもしれない。W31は表面に細い線上の刃物痕が無数に残り作業台としても利用されたものかもしれない。W32の表面は丁寧に削られ、他端は斜めに切り落とされている。この部分は薄くはされていない。

W33は広葉樹を立方体に近く削りだしたもので、角には面取りを施している。一つの面上に溝状にくぼみが走り内面が黒くなっている。焼けたものかもしれない。

W34は比較的年輪界の密な針葉樹の板目材の一端に、幅0.5cm程の直線的な切り込みを入れたものである。表面の摩耗が著しく、工具痕跡や下端が続くものかは不明。

W35はクリのミカン割り材から作り出した所謂、有頭棒で、樹木の内面側を削って頭部を作り出してい。頭部や上面は刀子様の工具で削っているが、背面は粗く頭部の削りだしも行っていない。

W36～48は杭列を構成する杭や矢板で、合計100点近く出土した内の残存状態の良いものを図化した。W36～38は上層からの出土。W39～42は下層の西杭列を構成するもの。W43～48は同じく下層の南杭列を構成するものである。丸太材を用いた杭（W37・38・44）、矢板（W40・43・45・48）、ミカン割り材を用いた杭などがある。上層のものに丸太材が多く、南杭列に針葉樹が多いなどの傾向が見られるが、全体の傾向を示すものではない。

W36はクリのミカン割り材を用いた杭の先端部で、6面から6回以上の刃物の痕跡を残して尖らせている。

W37は直径4cm弱の広葉樹の樹皮を残した丸太材を用いており、先端部は3面から1～2回の刃物の痕跡を残して尖らせている。

W38は広葉樹丸太材を用いた杭で、先端部は6面から刃物を入れて尖らせている。

W39は広葉樹環孔材のミカン割り材を用いた杭で、5面から削り、先端は6面から削って尖らせる。上端は折れているが、直交方向の刻みが観察できる。残存長38.15cm、幅6.3cm、厚さ4.6cm。

W40は西杭列。クリの柾目材を用いた矢板で、両側面から削って先を尖らせる。上端は折れてさきくれ立つが、一側面に切り欠きが残り、横木との結合に備えている。残存長52.0cm、幅7.7cm、厚さ2.9cm。

W41は広葉樹環孔材のミカン割り材を用いた杭で、側面の5面から削って成形し、先端は7面から削って尖らせる。上端は折れてさきくれ立つが、側面表裏に刻み状の当たりが見られる。横木との結合に備えたものか。残存長43.2cm、幅5.3cm、厚さ4.55cm。

W42は広葉樹環孔材の柾目材を用いた矢板で、先端は裏面を除いた4面から削って尖らせる。上端は痛んでおり大きく抉れるが、人為的なものではない。残存長43.85cm、幅6.2cm、厚さ3.25cm。

W43は広葉樹環孔材の板目材を用いた矢板で、先端部は板状の一側面のみから5回の痕跡を残して尖らせている。

W44は直径8.6cmほどのクリの丸太材で、一部には樹皮が残存していた。下端から約30cmの位置から5面から削って先端を尖らせている。一部には上向きに刃物が当たった部分がある。

W45はミカン削材の欠板状を呈するもので、先端部は下端から約19cmの位置から、5面から削って尖らせる。上端を欠くが、残存長91.2cm、幅9.1cm、厚さ4.7cmを測る。

W46はミカン削材の角柱状を呈する杭で、先端部は6～7面から削って尖らせる。上端を欠くが、残存長98.0cm、幅8.2cm、厚さ6.8cmを測る。上端部の一側面には切り込み状の痕跡が認められる。

W47はクリのミカン削材の角柱状を呈するもので、先端部は6面から削って尖らせる。上端を欠くが、残存長122.3cm、幅9.55cm、厚さ5.75cmを測る。上端部の一側面には、幅0.6cm、長さ3.5cmの切り込みが認められる。

W48はクリの矢板で、先端部は5面から削って尖らせる。上端を欠くが、残存長73.8cm、幅11.9cm、厚さ5.2cmを測る。

W49は下層から出土した。広葉樹の板目材を用いた板材で、残存長93.4cm、幅11.4cm、厚さ2.5cmを測る。

W50は出土位置不明であるが、最上層のものであろう。長さ109.1cmの針葉樹の板目材で、節を丁寧に落としているが、厚さは一定ではない。

W51は上層から出土した。直径30cm以上の針葉樹を四分割にミカン削りしたもので、樹木外面は樹皮を剥いで、節を落とした状態である。下端部は樹表面側からはつぶれて工具痕跡は判別できないが、削れ口面からは刃幅5～6cmのやや湾曲した鉄斧様の工具で、各々3方向から3～6回の打撃を加えているが、粗く、平滑にするものではない。

### 3. III区出土の木器（図版53、写真図版66）

W52・53は井戸SKIII-1内の崩壊した石の隙間から出土した漆器椀である。

W52は口径13.8cm、器高6.3cm、底径6.8cmを測る。器壁の厚さは0.8cmとやや厚みをもつ。内面には朱漆、外面には黒漆を施し朱漆で鶴などを約60°の位置に2ヶ所に筆描きする。漆のはげた本地部分には纏縞痕跡と他種類の削りの痕跡が認められる。口縁部の布着せは肉眼では確認できなかった。下地は洪下地であろうか。底面はわずかに周開を高くするが、平高台であり、2ヶ所の円形の小孔と2ヶ所の並んだ2.6×2.1mmの方形のくぼみが見られる。底面にも黒漆が施されており、これらの孔付近は剥がれているが、斐漆以前のものであろう。

W53は口径12.5cm、器高5.5cm、底径6.2cmを測る。器壁の厚さは0.4cmと薄い。全面に黒漆を施している。口縁部の布着せは肉眼では確認できなかったが、二度以上塗り重ねている。下地は洪下地であろうか。底は低く小さな輪高台である。

W54はIII区のSKIII-1の最下層から出土した広葉樹の板目材を用いた刳物で、推定口径37cm、器高4.3cmの円形の盤であろう。底部より立ち上がり部や口縁部を厚く作る。

W55はSKⅢ-1から出土した桶あるいは曲物の底板であろう。大きく円弧を描く外縁をもち、片面の縁部の角は面取りを施す。反対側の面は柿渋を塗ったものか黒色を呈している。この面が内面になるものと思われる。比較的大きな穿孔が表裏を貫いて穿たれている。直線部の側面には $0.3 \times 1.4\text{cm}$ の長円形の目釘孔を穿ち、木釘が残存することから、数枚の板を繋ぎ合わせる連結式の底板である。復元すると直徑約37cmの円形になり、厚さは1.5cmと厚い。針葉樹の板目材を用い、一端は焼け焦げている。

W56は浅い方形の土坑SKⅢ-3から出土した。年輪界の粗い針葉樹の板目材を用いており、残存する外縁の円弧の状態から長円形の折敷の底板になるものと思われる。厚さは1cmと厚い。割れ部に近接して3ヶ所の穿孔が表裏に抜け、やや大きな円孔には縦擦れの痕跡が認められることから、補修孔であろう。

W57はⅢ区PⅢ-75の柱根である。下端から約21cmより上は表面の痛みが著しい。地表面から出ていた部分であろう。また、下端から約10cmの位置には全局に渡って縦り込みが6cmの直径になるまで入れられており、材木として運ぶ際の縦縛りであろう。残存状態の良い部分の外表面は、6面から削られており、概七角柱状を呈している。下端部は宝珠状に尖らせており、砂粒が食い込む。残存長42.6cm、直徑約8.6cm。

#### 4. V区出土の木器（図版54、写真図版67）

W58~65はV区の谷内から出土した。

W58は暗褐色シルトから出土した。一本から作り出した刀子の鞘である。針葉樹の板目材を長さ11.6cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmに加工している。一方の木口部を刃形に成形し、また、刃部側の側面も薄くしている。表面は角を丁寧に研磨して仕上げている。もう一方の木口面から7.7cmの深さまで細く抉りこんで、刀子を納めるようにしている。内面は黒い。孔の断面も刀子の形状に合わせて、刃部側が細くなる。孔の幅は $1.15 \times 0.35\text{cm}$ で比較的小型の刀子であろう。鞘口部の背側が一段くぼみ、表面にも2本の細い毛引き線が見られる。口金具を装着するものかもしれない。表面は白木のままである。

W59・60は東半の19層より上から出土した曲物の底板で、針葉樹の板目材を用いている。W59は直徑12.5cm、厚さ0.95cmの円盤で、側面の相対する位置4ヶ所に目釘孔を穿ち、3ヶ所には木釘が残っていた。表裏面は木目に沿った方向に外側に向かって、やや湾曲した刃部をもつ工具で削った痕跡が残されている。刀子やヤリガンナではなく、筅を用いたものか。表裏面は黒色を呈しており、柿渋などを塗布したものかもしれない。側面にも工具痕が残される。

W60もW59と同様、表裏面が黒く、側面に2ヶ所の目釘孔が残る。厚さは1.25cmとやや厚く、復元できる直徑も16cm前後とやや大きくなる。そのためか表裏面の工具痕は木目に直交方向のものが残り、放射方向に刃を当てたものと見られる。

W61は年輪界のやや粗い針葉樹の板目材を用いており、厚さ0.65cm、幅13.15cmの薄板で、両側面は欠損している。端部に小さな段を作り出しており、板目材ではあるが、この部分に底板を受けた曲物側板と思われる。中央に極小の穿孔が見られる。

W62・63は確認調査時に出土した針葉樹板目材の厚さ0.5cm程の板で、ともに上端部が当たりによって摩滅している。墨痕などは認められず、柄などの部材であろう。

W64は東半黒褐色シルトから出土した。針葉樹板目材の幅4.1cm、厚さ0.7cmの薄板の一端を尖らせており、齊串などの祭祀具と思われるが、上部は切り込みを入れて折られており、木簡の可能性も残る。表面は刀子様の工具で削られており、墨痕は認められない。

W65は針葉樹を方角柱状に成形したもので、一端は4面から削って尖らせている。他端は1面から浅い切りを入れている。側面の3ヶ所が丸くくぼんでおり、火切り臼にしたものかもしれないが、焦げてはいない。長さ24.9cm、幅2.4cm、厚さ1.9cm。

この他、Ⅴ区の井戸内からも有機質遺物が出土しているが、実測できなかった。

## 第4節 石製品（図版55・56、写真図版68・69）

### 1. 石製品

S1は、I区のPI-1050北側出土の砥石である。一方の端部を失うが、長さ175.0mm、幅95.7mm、厚さ58.9mmを測る。表裏面・両側面を使用しており、木口面にも敲打痕が残る。表面には深い溝状の使用痕が見られ、一側面は非常に平滑に使用されている。

S2もI区出土の砥石で、長さ122.7mm、幅73.1mm、厚さ43.5mmを測る。表裏面・両側面を使用しているが、表面は非常に平滑に使用され、細い溝状の研磨痕も残る。裏面はやや粗く、幅の広い溝状の研磨痕もある。灰白色を呈した繊維の砂岩質の石材を用いている。

S3はⅡ区流路上層出土。灰色の玄武岩質の石材を用いている。顕著な使用による摩滅は見られず、細かい擦痕が残る。

S4はⅢ区のPII-73出土の砥石で、灰オリーブ色の緻密な石材を用いている。長さ98.3mm、幅35.0mm、厚さ20.5mmの小型のもので、表裏面・両側面を使用している。両側面には細く深い溝状の使用痕が認められる。

S5・6はⅣ区出土の基石である。S5はPIV-104・105から出土した。直径1.65cm、厚さ0.6cmの扁平な黒色を呈した円碟で、表裏面ともに研磨痕が認められる。

S6は柱穴PIV-208から出土した。直径1.55cm、厚さ0.74cmの半透明な薄茶色の円碟を用いており、研磨痕は認められない。

S7はVI区の井戸から出土した砥石である。顕著な使用による摩滅は見られず、細かい擦痕が残る。

S8もVI区の井戸から出土した砥石である。長さ192.8mm、幅58.4mm、厚さ39.2mmを測り、やや多孔質

のオリーブ灰色を呈した凝灰岩質の石材を用いている。表面の1面のみ使用しており、細かい溝状の使用痕が残される。

S 9はVI区の表土・搅乱土から出土した茶褐色の下白の受け皿部破片である。花崗岩を用いたもので、一部が黒化している。

## 第5節 金属製品（図版57、写真図版70・71）

### 1. 銅製品

M 1はIII区の包含層から出土した銅鏡で、北宋の咸平元寶（初鑄年998年）である。周囲の縁の幅は通常のもので、裏は無紋である。

M 2はIII区周辺で表探された斧の頭部で、やや赤みがかった色調を残す。頭頂部の耳搔きは扁平で、片面のみがやや湾曲する。菱形をした飾り部の表裏面には四葉状の紋様が見られ、鑿の痕跡が観察できないことからおそらく鋳出されたものであろう。近世以降のものか。

### 2. 鉄製品

M 3はIII区のSK III-2から出土した鎌である。おそらく墓址に伴う副葬品であろう。刃幅約2.1cmの直線的な刃をもち、背は湾曲している。刃の研ぎ出し長は約9.5cm。約120°の角度で付く柄には木材が残存している。扁平な板状の柄（茎）の下端は外側に曲げて柄木の脱落を防ぐ。また、上部には半環状の金具で柄木を締めている。

M 4はV区の盛土（包含層）出土の鎌である。刃幅約3.3cmの大きく湾曲した刃部をもち、片面の背側には縁取り状の段をもつ、扁平で下端の一方を斜めに切った柄（茎）の下端には目釘孔が穿たれている。刃部の背には一部、断面円形の木質が残存するが、別のものであろう。

M 5はI区のP I -1047から出土した塊状鉄滓である。長さ14.65cm、幅16.42cm、厚さ6.65cm、重さ約1.9kgを測る大型のものである。磁性をもつ。

この他にも写真を掲載したものがある。SD I-1中層からはM 6(100.5g)、M 7(75.9g)、M 8(17.7g)、M 9(55.3g)の鉄滓が出土しており、M 9は磁性を有している。また、P I-1055からはM17(145.4g)、P I-1050からはM16(155g)、P I-1018からはM12~15(計228.4g)の鉄滓が出土しており、すべて磁性を有している。

また、I区のクロボク層除去下層からはM10(11.3g)、M11(29.2g)が出土しており、M11にはわずかに磁性が認められる。

II区の流路では、上層からM18(23.9g)が出土し、磁性が認められる。M19・20は同じく流路から出土した炉焼片で、M20には磁性が認められる。

V区からもM21(56.7g)が出土している。

鉄滓の多くは中世に属する遺構や包含層から出土しており、明らかな遺構は存在しないが、中世の集落内に鍛冶関連の施設があったことが窺われる。但し、I区のクロボク層下からも出土しており、中世以降の二次堆積層の可能性があるものの、さらに古い時代にも鍛冶関連の施設が存在したのかもしれない。

## 参考文献

- 森内秀造 1994「相生窯跡群における平安期の須恵器について」『相生市・綾ヶ丘窯跡群Ⅱ』兵庫県教育委員会
- 小森俊寛、上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 百瀬正樹、近江俊秀 1995「各地の土器様相 近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 岡田章一、長谷川眞 2003「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 森田 稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 古代の土器研究会 1996「古代の土器4・煮炊具(近畿編)」
- 岩本正二・西口寿生 1977「飛鳥・藤原地域の出土遺物」『考古学雑誌』第63巻第1号
- 横田賀次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入陶磁器について -型式分類と編年を中心にして-」九州歴史資料館研究論集 4
- 上田秀大 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易海磁研究』No.2
- 永井久美男 2002「新版中世出土銭の分類図版」高志書院
- 稻垣晋也 1970「その他の建築資材」『新版考古学講座』第7巻 有史文化(下) 雄山閣出版株式会社
- 奈良国立文化財研修所 1985「土器集成図録 近畿古代篇」
- 岸本一宏 2006「建築部材」『加都遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会
- 池田征弘 2006「まとめ」『加都遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会
- 岡田章一 1990「県下の輸入陶磁器」『福出片岡遺跡』兵庫県文化財調査報告書第94号

# 第5章 兵庫県筒江大垣遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

## 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

## 2. 試料

試料は、筒江大垣遺跡より出土した剣物、火つき臼、漆器碗、箸、有頭棒、組み物、鞘、杭、柱材、板材などの木材20点である。時期は古代～中世である。

## 3. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（粂目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 4. 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

### スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 図2-1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

### ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図2-2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。

日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 図3-5

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で緻密、軟性があるが、保存性は低い。容器などに用いられる。

クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* ブナ科 図2-3、図3-4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水浸によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸など広く用いられる。

トチノキ *Aesculus turbinata Blume* トチノキ科 図3-6

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に2～数個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

以上の形質よりトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽性、保存性がなく、容器などに用いられる。

## 5. 所見

箇江大垣遺跡の木材は、スギ6点、ヒノキ3点、クリ9点、ブナ属1点、トチノキ1点であった。

スギは火きり臼、底板、板材に使用されており、加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。温帯に広く分布し、特に多雨地帯や積雪地帯で純林を形成する常緑高木である。ヒノキは糸巻き、組み物、鞘に使用されており、木理通直で大きな材が取れる良材であり特に保存性が高い。温帯に分布し、特に温帯中部に多い常緑高木である。クリは漆器挽、柱材、杭、矢板、有頭棒に使用されており、重厚で保存性が良く、建築材や土木材に適する。温帯に広く分布する落葉高木で、暖温帯と冷温帯の中間域

では純林を形成することもあり二次林要素でもある。ブナ属は倒木に使用されており、強さ中庸、切削、加工も中庸であるが、弹性と従曲性に富む。温帯上部の冷温帶から温帯中間域の落葉広葉樹林帯に分布する落葉高木で、冷温帶落葉広葉樹林の代表的なブナ林を形成する。トチノキは漆椀に使用されており、切削、加工は容易で柔らかい材である。温帯域に広く分布する落葉高木で、谷沿いなどの湿润地を好んで生育する。クリ、ブナ属、トチノキは绳文時代以降本地に用いられる材である。

いずれの樹種も温帯ないし冷温帶に分布する樹種であり、遺跡周辺から近隣より流通でもたらされたと考えられる。

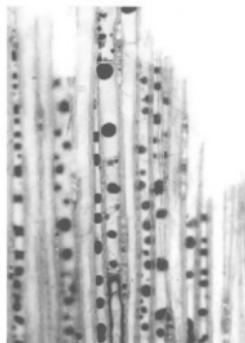
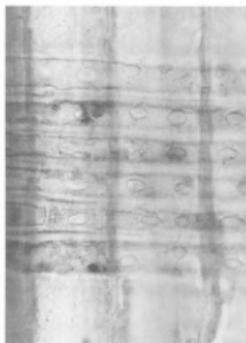
#### 参考文献

- 佐伯浩・原田清 (1985) 鈴木樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.  
 佐伯浩・原田清 (1985) 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.  
 岩地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総観、雄山閣、p.296  
 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.212

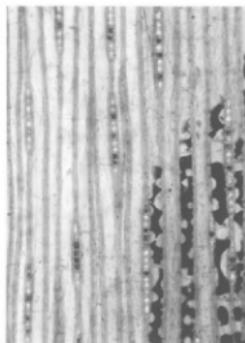
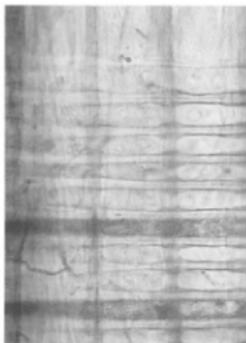
表1 筒江大垣遺跡における樹種同定結果

No.	報告番号	種類	時代	遺構	結果 (学名/和名)	
1	W54	倒木	中世	井戸 (SKIII - 1)	<i>Fagus</i>	ブナ属
2	W65	火きり臼	古代～中世	V区谷	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
3	W52	漆器樽	中世	井戸 (SKIII - 1)	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
4	W53	漆器樽	中世	井戸 (SKIII - 1)	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
5	W2	底板	中世	溝 (SD I - 1)	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
6	W7	箸	中世	溝 (SD I - 1)	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
7	W57	柱材	中世	柱穴 (PIII - 75)	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
8	W27	糸巻き	中世	II区流路上層	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
9	W36	杭	口世	II区流路上層	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
10	W40	矢板	古代～中世	II区流路	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
11	W35	有頭棒	中世	II区流路上層	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
12	W47	杭	古代～中世	II区流路	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
13	W48	杭	古代～中世	II区流路	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
14	W44	杭	古代～中世	II区流路	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
15	W18	杭	中世	溝 (SD I - 1)	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
16	W11	板材	中世	溝 (SD I - 1)	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
17	W10	板材	中世	溝 (SD I - 1)	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
18	W28	組み物	中世	II区流路上層	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
19	W58	鞆	古代～中世	V区谷	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
20	W60	底板	古代～中世	V区谷	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ

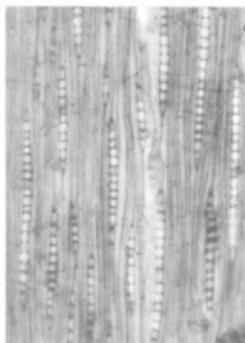
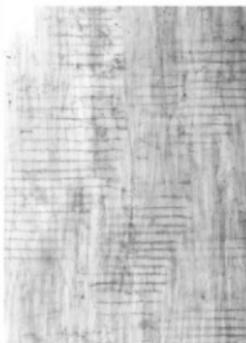
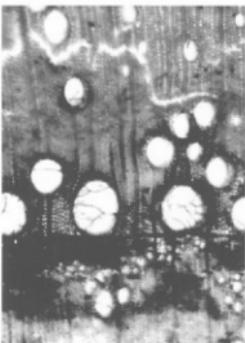
図2 筒江大堤遺跡の木材 I



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm  
1. 5 底板 スギ

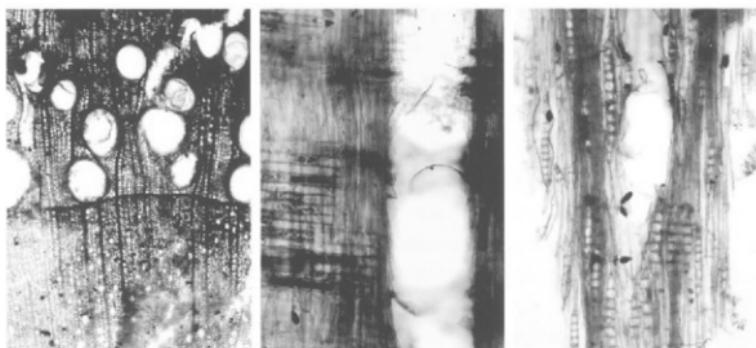


横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm  
2. 18 組み物 ヒノキ

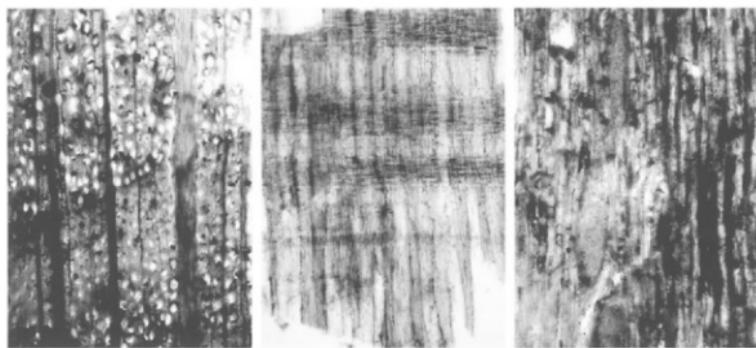


横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm  
3. 7 柱材 クリ

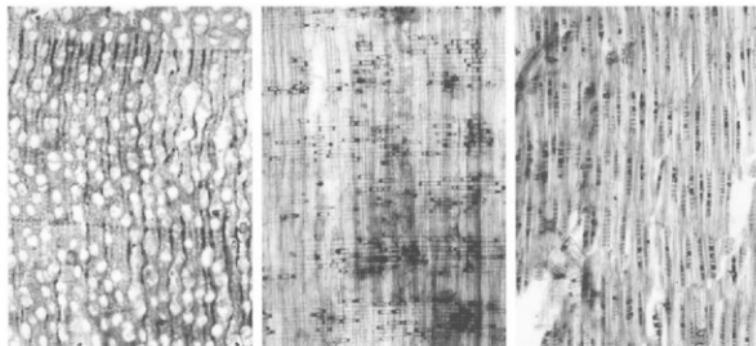
図3 篠江大垣遺跡の木材 II



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm  
4. 15 杭 クリ



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.5mm 接線断面 : 0.5mm  
5. 1 刹物 ブナ属



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.5mm 接線断面 : 0.5mm  
6. 3 漆器 トチノキ

## 第6章 まとめにかえて

### 第1節 遺跡の立地について

筒江大垣遺跡は朝来市和田山町筒江に所在し、遺跡の東にある宝珠峠を越えれば旧山東町となり、町境を越えて、峠を西に降りた位置にある。それは山東の盆地から「加都千石」と称された和田山盆地へと入る地点である。峠道の比高差は山東側からは約30m程度である。

推定されている古代山陰道は、丹波側から遠阪峠を越えて北側の山裾沿いに西に向かい、山東町域で北側へと迂回する現在、山陰本線や国道9号線が通るルートと考えられている。その他に、遠阪峠から粟鹿川に沿って直線的に西へ向かうと和田山町と山東町を分ける山塊にぶつかる。この山塊には深い谷が入り込むが、そのひとつが宝珠峠を抜けるルートである。また、梶原遺跡や梅ヶ作遺跡が検査された谷へと続き、大月北山遺跡で検出された切り通しを抜けて、南西へと抜ける谷から宝珠峠のルートに結ばれるルートも設定できる。さらに第1章で述べられている比治城の北側の谷を抜けるルートも推定されている。

宝珠峠のルートは直線的に加都の平野へと続き、加都遺跡で検出された但馬道と呼ばれる直線的な道路状遺構へと結ばれる。この道路状遺構には分岐した枝路も検出されており、この枝路は宝珠峠を目指している。宝珠峠の東側には「向大道」の地名が残されている。

また、宝珠峠を挟んだ両側にはこの筒江大垣遺跡や前述したような律令期の遺跡が存在することも、このルートが少なくとも古代山陰道と同等の機能を有したルート、あるいは支路であったことを示している。遺跡の立地が峠を越えた位置にあることは、播磨の古代山陽道布勢駅家である小丸遺跡や野磨駅家である南地遺跡の立地と共通している。

このルートの西を抑える位置に筒江大垣遺跡や茶すり山古墳が存在することは古墳時代にまで遡って、この街道が重視されたこととなる。また、比治城の出城とされる茶すり山の城跡も同様の意味合いで築造されたものであろう。検出された中世の集落の中心部に立つと、南西に竹田城址を望むことができる。平安時代以降には縁釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、羅織須恵器、瓦器、丹波、常滑、東播系、中国產など各地からもたらされた土器が出土しており、流通の経路にのった集落であると共に、これらの土器を求め、使用したこの集落の性格の一端が垣間見える。

調査区は現道などに規制されて、6区地区に分割して調査したが、Ⅲ～Ⅵ区はひとまとまりとなる。地形的にはⅡ区とV区の東半で検出された谷状地形により大きく分断されている。

### 第2節 遺構・遺物について

弥生時代前期から古墳時代前期の遺物も出土しているが、弥生時代の遺構は検出できなかった。更に西側に存在する片引遺跡からは弥生時代前期の土器や装飾を施された木製壺などが出土しており、また加都遺跡の東部でも同時期の遺物が出土している。同時期の集落の中心は片引遺跡やその東側の丘陵間にあったものと考えられ、当時の人々の生活範囲は本遺跡まで及んでいたのであろう。

古墳時代前期の遺物もわずかながら見つかっており、I区では柱穴内に意図的に埋め込まれたように出土している。但し、それ以外の顕著な遺構は見つかっておらず、集落の本体があったものとは思われ

ない。近接して存在する筒江浦石遺跡では大規模な粘土採掘坑群が見つかっている。

古墳時代中期以降でも同様の状態で、顯著な遺構は認められない。但し、東の丘陵上には古墳時代中期の巨大な円墳である茶すり山古墳が築かれており、その埴輪が後世の開削や流出により本遺跡内からも見つかっている。最も古墳から遠いI区から多く見つかることには別の意味があるのかもしれない。

飛鳥時代になると、III区で検出された下層遺構のように建物が構築される。斜面を掘り下げて平坦面をつくり、溝を巡らせた内側に柱穴が並ぶ建物であり、床に移動式の竈を置いて用いている。それがこの時期の一般的な住居であるかは不明である。I・III区のクロボクド層で見つかった遺物もほぼ同時期のものと考えられ、散漫ではあるが集落の範囲が広がっている。

奈良時代から平安時代前半にかけては、流路や谷部から多くの遺物が見つかっている。円面鏡や須恵器・灰釉陶器を用いた転用鏡、刀子鞘など文書用器に使われたものが見られ、「東家」「上」などと書かれた墨書き器等から官衛的な性格が窺われる。出土した灰釉陶器の皿のほとんどが硯に転用されていたが、朱墨のものは見られなかった。また、綠釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・縄文須恵器など山陰道を通じてもたらされた土器が多いことも特徴のひとつである。この時代の遺構は、V区で検出された掘立柱建物（SBV-21、V-22）の2棟である。

宝珠鉢を挟んだ東側の梶原遺跡、梅ヶ作遺跡では8世紀代の遺構群が検出されており、鉢を挟む山麓・山間の谷部に位置するこれらの遺跡はその消長も含めて、連関して存在したものであろう。その両者を結ぶものが時道であり、それは朝来郡の二つの盆地平野、山東と和田山を結ぶものでもある。

朝来郡の郡家所在地はまだ確定されていないが、筒江大塙遺跡は、郡家の支所的な施設や街道に面した駅家や閘などの機能を有していた可能性を考える。

13世紀に入ると、II～VI区に多くの建物や井戸、墓址が作られ、また、I区にも集落の範囲が広がる。この集落は断続的ではあるが16世紀後半まで続く。建物のなかには4間×6間の規模の大きなものがあり、集落の中心部が含まれるようである。この集落には東播や丹波・常滑から焼物がもたらされている。集落内の縁辺部では鍛冶がおこなわれていた。

墓址は木棺墓あるいは土壙墓で、鎌が副葬されていた。構築された時期は限定できないが、中世後半の武士の墓ではなかろう。

井戸からは15世紀代の青磁碗とともに漆器碗が出土しており、トチノキやブナといった木胎を用いている。山名氏が生産を奨励したと言われる地元産の漆器の可能性がある。旧出石町の此隅山城下からも大量の漆器が出土しており、比較検討し得る材料である。

この集落から東を見上げた位置には、比治城の出城と考えられる茶すり山城址が存在し、輸入陶磁器なども出土している。本遺跡からも青磁や青花といった輸入陶磁器が出土しており、15世紀から16世紀にかけて、山上と山裾とで密接に関連した集落だったのだろう。

相手名	相手名	種類	品種	法華(回)			在庫	頭面番号	地区	販路番号	備考
				日本	支那	米国					
1	38	39	小葉松	小葉丸葉(3)	85	-	ロウダカ・ササガラ 1/30	99204	I	P-102	下屋
2	38	39	土産物	新柿(圓)	-	11.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99205	I	P-102	内
3	38	39	土産物	新柿(圓)	-	12.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99206	I	P-102	内
4	38	39	土産物	新柿(圓)	-	12.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99207	I	P-102	内
5	38	39	土産物	柿	-	12.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99208	I	P-102	内
6	38	39	土産物	小豆	38.0	1.4	ロウダカ・ササガラ 1/30	99209	I	P-102	内
7	38	39	土産物	柿	125.0	2.4	ロウダカ・ササガラ 1/30	99210	I	P-102	内
8	38	39	小葉松	新柿	20.0	3.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99211	I	P-102	-
9	38	39	土産物	柿	115.0	3.6	ロウダカ・ササガラ 1/30	99212	I	P-102	内
10	38	39	土産物	柿	21.0	3.8	ロウダカ・ササガラ 1/30	99213	I	P-102	内
11	38	39	土産物	柿	21.0	3.8	ロウダカ・ササガラ 1/30	99214	I	P-102	内
12	38	39	土産物	柿(通称)	22.5	6.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99215	I	P-102	内
13	38	40	山茶花	柿(通称)	20.0	4.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99216	I	P-102	-
14	38	40	山茶花	柿(通称)	20.0	-	ロウダカ・ササガラ 1/30	99217	I	SD-101	-
15	38	40	山茶花	三輪柿	10.0	9.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99218	I	P-102	通
16	38	40	山茶花	柿	21.0	-	ロウダカ・ササガラ 1/30	99219	I	P-102	-
17	38	40	山茶花	柿	21.0	-	ロウダカ・ササガラ 1/30	99220	I	SD-101	-
18	38	40	山茶花	柿	21.0	5.5	ロウダカ・ササガラ 1/30	99221	I	SD-101	-
19	38	40	山茶花	柿	21.0	5.5	ロウダカ・ササガラ 1/30	99222	I	SD-101	通
20	38	40	山茶花	柿	21.0	-	ロウダカ・ササガラ 1/30	99223	I	SD-101	通
21	38	40	山茶花	柿	-	4.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99224	I	SD-101	-
22	38	40	山茶花	柿	21.0	4.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99225	I	SD-101	-
23	38	40	山茶花	柿	21.0	4.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99226	I	SD-101	上場
24	38	40	山茶花	柿	21.0	4.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99227	I	SD-101	上場
25	38	40	山茶花	柿	21.0	4.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99228	I	SD-101	上場
26	38	40	山茶花	柿(通称)	21.0	4.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99229	I	SD-101	上場
27	38	40	山茶花	柿(通称)	22.5	6.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99230	I	SD-101	上場
28	38	40	山茶花	柿	21.0	6.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99231	I	SD-101	上場
29	38	41	山茶花	柿(通称)	15.0	5.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99232	I	SD-101	上場
30	38	41	山茶花	柿(通称)	15.0	5.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99233	I	SD-101	上場
31	38	41	山茶花	柿	-	12.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99234	I	SD-101	-
32	38	40	小葉松	土産	20.0	40.0	一箱 2.0kg	99235	I	SD-101	有り
33	39	41	山茶花	柿	-	6.0	モモザクラ	99236	I	SD-101	アメ
34	39	41	山茶花	柿	-	6.0	モモザクラ	99237	I	SD-101	アメ
35	39	41	山茶花	柿(通称)	10.0	11.0	モモザクラ	99238	I	SD-101	モモザクラ 土産
36	39	42	山茶花	小桃	54.0	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99239	I	SD-101	内
37	39	42	山茶花	小桃	81.0	1.2	ロウダカ・ササガラ 1/30	99240	I	SD-101	内
38	39	42	山茶花	目	12.0	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99241	I	SD-101	内
39	39	42	山茶花	目	12.0	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99242	I	SD-101	内
40	39	42	山茶花	目	12.0	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99243	I	SD-101	内
41	39	42	山茶花	目	12.0	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99244	I	SD-101	内
42	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99245	I	SD-101	内
43	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99246	I	SD-101	内
44	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99247	I	SD-101	内
45	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99248	I	SD-101	内
46	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99249	I	SD-101	内
47	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99250	I	SD-101	内
48	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99251	I	SD-101	内
49	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99252	I	SD-101	内
50	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99253	I	SD-101	内
51	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99254	I	SD-101	内
52	39	42	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99255	I	SD-101	内
53	39	43	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99256	I	SD-101	内
54	39	43	山茶花	目	-	1.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99257	I	SD-101	内
55	39	43	山茶花	カット	-	-	ツバキの切 合	99258	I	SD-101	内
56	40	44	小葉松	チヅクネ	4.5	6.0	ロウダカ・ササガラ 1/30	99259	I	SD-101	内
57	40	44	小葉松	柿(通称)	-	-	ロウダカ・ササガラ 1/30	99260	I	SD-101	内
58	40	44	小葉松	柿(通称)	-	-	ロウダカ・ササガラ 1/30	99261	I	SD-101	内
59	40	44	小葉松	柿(通称)	-	-	ロウダカ・ササガラ 1/30	99262	I	SD-101	内
60	40	44	小葉松	柿(通称)	-	-	ロウダカ・ササガラ 1/30	99263	I	SD-101	内

試験番号	回数番号	品種名	種子	品種	試験 (m)			開花	調査番号	地区	収量名	評定
					L	短	長					
43	50	44	高麗豆	高	(130)	24	74	11/4	99254	E	高麗豆	上等
44	46	56	高麗豆	高	-	(24)	66	開花未(3)	99254	E	高麗豆	中等
45	46	45	高麗豆	高麗豆	-	(145)	33	未開花	99254	E	高麗豆	中等
46	46	44	上等豆	豆	(35)	82	-	11/18	99254	E	上等豆	良品
47	46	44	上等豆	豆	(36)	94	-	11/9	99254	E	上等豆	良品
48	46	44	上等豆	豆	(36)	106	-	11/9	99254	E	上等豆	良品
49	46	44	上等豆	豆	(36)	106	-	11/9	99254	E	上等豆	良品
50	46	44	上等豆	豆	(36)	106	-	11/9	99254	E	上等豆	良品
51	46	45	上等豆	豆	(31)	(46)	-	11/2	99254	E	上等豆	良品
52	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
53	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
54	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
55	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
56	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
57	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
58	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
59	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
60	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
61	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
62	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
63	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
64	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
65	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
66	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
67	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
68	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
69	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
70	46	45	上等豆	豆	(31)	(38)	-	11/1/2	99254	E	上等豆	良品
71	46	44	中種豆	豆	(25)	51	-	11/1/2	99254	E	中種豆	中等
72	46	44	中種豆	豆	(25)	51	-	11/1/2	99254	E	中種豆	中等
73	46	45	上等豆	豆	(32)	56	24.7	開花未(3)	99254	E	上等豆	良品
74	46	45	上等豆	豆	(32)	56	24.7	開花未(3)	99254	E	上等豆	良品
75	46	45	上等豆	豆	(32)	56	24.7	開花未(3)	99254	E	上等豆	良品
76	46	45	上等豆	豆	(32)	56	24.7	開花未(3)	99254	E	上等豆	良品
77	46	45	上等豆	豆	(32)	56	24.7	開花未(3)	99254	E	上等豆	良品
78	46	45	高麗豆	高	-	(13)	38	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
79	46	45	高麗豆	高	-	(14)	48	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
80	46	45	高麗豆	高	-	(15)	51	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
81	46	45	高麗豆	高	-	(16)	54	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
82	46	45	高麗豆	高	-	(17)	57	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
83	46	45	高麗豆	高	-	(18)	60	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
84	46	45	高麗豆	高	-	(19)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
85	46	45	高麗豆	高	-	(20)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
86	46	45	高麗豆	高	-	(21)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
87	46	45	高麗豆	高	-	(22)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
88	46	45	高麗豆	高	-	(23)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
89	46	45	高麗豆	高	-	(24)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
90	46	45	高麗豆	高	-	(25)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
91	46	45	高麗豆	高	-	(26)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
92	46	45	高麗豆	高	-	(27)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
93	46	45	高麗豆	高	-	(28)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
94	46	45	高麗豆	高	-	(29)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
95	46	45	高麗豆	高	-	(30)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
96	46	45	高麗豆	高	-	(31)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
97	46	45	高麗豆	高	-	(32)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
98	46	45	高麗豆	高	-	(33)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
99	46	45	高麗豆	高	-	(34)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
100	46	45	高麗豆	高	-	(35)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
101	46	45	高麗豆	高	-	(36)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
102	46	45	高麗豆	高	-	(37)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
103	46	45	高麗豆	高	-	(38)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
104	46	45	高麗豆	高	-	(39)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
105	46	45	高麗豆	高	-	(40)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
106	46	45	高麗豆	高	-	(41)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
107	46	45	高麗豆	高	-	(42)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
108	46	45	高麗豆	高	-	(43)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
109	46	45	高麗豆	高	-	(44)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
110	46	45	高麗豆	高	-	(45)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
111	46	45	高麗豆	高	-	(46)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
112	46	45	高麗豆	高	-	(47)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
113	46	45	高麗豆	高	-	(48)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
114	46	45	高麗豆	高	-	(49)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
115	46	45	高麗豆	高	-	(50)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
116	46	45	高麗豆	高	-	(51)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
117	46	45	高麗豆	高	-	(52)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等
118	46	45	高麗豆	高	-	(53)	63	開花1/2	99254	E	高麗豆	上等

番号	区域番号	町名(通称)	地點	種性	高さ(cm)			根状	葉色番号	花色	田地名	類似
					日中	夜間	表皮					
119	41	47	田原	中	-	6.0	-	根状	990294	■	高尾	上野上
120	43	48	上野村	サトウカズ	3.3	2.8	-	根状	990294	■	白	白地神?
121	43	48	上野村	根	(27.8)	(26)	-	根状	990294	■	白	白地土
122	43	48	上野村	根	(10.1)	2.7	2.0	根状	990294	■	白	白地土
123	43	48	上野村	根	(11.8)	2.7	0.8	根状	990294	■	白	白地土
124	43	48	上野村	小葉	(2.2)	(1.1)	-	根状	990294	■	白	-
125	43	48	上野村	根	(3.8)	(2.3)	-	根状	990294	■	白	白地土
126	43	48	上野村	根	(2.8)	(2.0)	-	根状	990294	■	白	白地土
127	44	49	高瀬	根(口付)	0.9	0.8	-	根状	990294	■	白	-
128	43	49	高瀬	根(口付)	-	0.9	0.15	根状	990294	■	白	高瀬
129	43	49	高瀬	根(口付)	(6.7)	3.4	-	根状	990294	■	白	高瀬?
130	43	49	高瀬	根	(2.1)	-	-	根状	990294	■	白	高瀬?
131	43	49	三野村	根	-	(2.0)	-	根状	990294	■	白	-
132	43	49	三野村	根	(13.0)	(2.0)	-	根状	990294	■	白	-
133	42	51	高瀬	根	12.9	7.4	4.8	口一輪1/2	高瀬	■	白	高瀬内野上小
134	42	51	上野村	丸り体	-	(5.6)	(10.8)	体-紫葉1/2	990294	■	白	紫葉1/2
135	42	51	上野村	丸手	-	(4.9)	-	体	990294	■	白	紫葉1/2
136	42	51	上野村	根	(2.8)	(2.7)	-	口1/2	990294	■	白	紫葉1/2
137	42	51	上野村	根	(2.8)	(2.1)	-	口1/2	990294	■	白	紫葉1/2
138	42	51	上野村	根	(2.8)	(2.0)	-	口1/2	990294	■	白	紫葉1/2
139	42	51	上野村	根	(2.8)	(2.0)	-	口1/2	990294	■	白	紫葉1/2
140	42	51	上野村	根	(2.8)	(2.0)	-	口1/2	990294	■	白	紫葉1/2
141	42	51	上野村	根	(1.6)	(2.0)	-	口1/2	990294	■	白	紫葉1/2
142	43	50	上野村	小葉	(7.6)	3.8	(5.8)	口1/2-3	高瀬	■	白	S.33
143	43	50	上野村	根	(1.8)	1.4	0.8	口1/2	990294	■	白	S.33
144	43	50	上野村	根	(2.7)	(2.7)	-	口1/2	990294	■	白	S.33
145	43	50	上野村	根	(1.6)	3.0	0.8	口1/2	990294	■	白	S.34
146	43	50	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2	990294	■	白	S.34
147	43	50	上野村	根	(3.8)	(2.9)	-	口1/2	990294	■	白	S.34
148	43	50	上野村	根	1.8	0.5	0.8	口1/2-3	高瀬	■	白	S.34
149	43	50	上野村	根	(0.5)	0.6	-	口1/2	990294	■	白	S.34
150	32	50	上野村	根	(0.6)	0.6	-	口1/2	990294	■	白	S.34
151	43	50	上野村	根	3.6	0.6	(0.6)	体-紫葉1/2	990294	■	白	紫葉1/2
152	43	52	上野村	根	(2.6)	0.6	-	口1/2	990294	■	白	紫葉1/2
153	43	52	上野村	根	(0.6)	0.9	-	口1/2	990294	■	白	紫葉1/2
154	43	53	上野村	上野	0.5	0.6	0.6	口1/2-3	高瀬	■	白	紫葉1/2
155	43	53	上野村	上野	(0.5)	0.2	0.2	口1/2-3	高瀬	■	白	紫葉1/2
156	43	53	上野村	根	-	(2.5)	0.8	体-紫葉1/2	990294	■	白	紫葉1/2
157	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.1)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
158	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.1)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
159	43	53	上野村	根	-	(2.0)	0.8	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
160	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
161	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
162	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
163	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
164	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
165	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
166	43	53	上野村	根	(0.6)	0.8	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
167	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
168	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
169	43	53	上野村	根	-	(2.0)	0.8	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
170	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
171	43	53	上野村	根	(0.6)	0.8	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
172	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
173	43	53	上野村	根	-	(2.0)	0.8	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
174	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
175	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
176	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
177	43	53	上野村	根	-	(2.0)	0.8	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
178	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
179	43	53	上野村	根	(2.7)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
180	44	55	上野村	根?	-	(2.0)	0.8	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2
181	44	55	上野村	根?	(2.0)	(2.0)	-	口1/2-1/3	990294	■	白	紫葉1/2

母番号	品目番号	名前(通称)	種別	性別	出産(回)			死因	産業率	産区	出産数	原化
					回数	性別	死因					
186	44	C6	純白地番	男	-	(13)	(28)	-	1/1/2	200029	V 北半	黒鳩色シルト
183	44	C6	純白地番	男	-	-	(6)	-	春-秋鶴L-3	200029	V 北東半1	黒鳩色シルト
184	44	C6	純白地番	男	-	2/2	(7)	純白L-2	200029	V E. N. 東半	黒1-2生糞2	
185	44	C6	純白地番	男	-	1/6	(6)	白(白)5	200029	V 北(北半)	ホウジ生糞2	
186	44	C6	純白地番	男	-	2/4	(6)	純白L-2	200029	V E. S. N. W.	黒鳩色シルト	
187	44	52	純白地番	男	(13)	6/6	(7)	1/1-19 鳥鶴L-5	200029	V 北(北半)	白に斑の斑	
188	44	53	純白地番	男	-	2/6	(7)	2-4-4-2	200029	V E. S. N. 東半	白に斑の斑	
189	44	C6	純白地番	男	-	2/2	(7)	純白L-2	200029	V 北(北半)	黒1-2斑糞2	
190	44	C6	純白地番	男	(13)	2/4	7/1	1/1-19 鳥鶴L-2	200029	V E. S. N. W.	桜西洋	
191	44	C6	純白地番	男	(14)	-	(6)	純白L-3	200029	V B.	黒鳩色シルト	
192	44	26-32	純白地番	女	(13)	2/5	(7)	1/1-4 鳥鶴L-2	200029	V E. S. N. W.	黒1-3斑糞2	
193	44	C6	純白地番	女	(13)	-	(6)	純白、白合の斑	200029	V E. S. N. W.	黒鳩色シルト	
194	44	52	純白地番	女	(12)	-	(6)	1/1-2	200029	V 北半1	黒鳩色シルト	
195	44	24-33	純白地番	女	1/7	2/1	6/6	1/1-2 純白	200029	V 北区と南区の間	黒土毛(白化)	
196	44	54	黒地土毛	男	(13)	4/6	-	1/1-8	990029	NaJUH4	白の斑糞2	
197	44	54	黒地土毛	男	(11)	2/4	6/6	1/1-8	200029	V 北半2	黒鳩色シルト	
198	44	54	黒地土毛	男	-	(10)	(6)	純白(白)	200029	V 北半1	黒鳩色シルト	
199	44	54	黒地土毛	男	-	(7)	(12)	純白(白)	200029	V E. S. N. 東半	13周	
200	45	53	土地鶴	仔	(12)	3/0	(9)	0/0+2 黑鶴	200029	V B.	黒鳩色シルト	
201	45	55	土地鶴	母	(23)	-	6/5	青白(白)2	200029	V 北半	黒鳩色シルトより上空の黒色2	
202	45	53	土地鶴	母	(10)	3/4	4/7	1/1-2 純白	200029	V W. X. と型の内	地上鶴(藍色)	
203	45	53	土地鶴	母	(16)	0/0	0/0	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	1-2周	
204	45	55	土地鶴	母	(13)	0/0	0/0	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
205	45	55	土地鶴	母	(24)	5/7	6/6	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	黒鳩色シルト	
206	45	54	土地鶴	母	(22)	(0)	-	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
207	45	54	土地鶴	母	(22)	(0)	-	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
208	45	54	土地鶴	母	(22)	(0)	-	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
209	45	54	土地鶴	母	(22)	(0)	-	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
210	45	54	土地鶴	母	(22)	(0)	-	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
211	45	55	土地鶴	母	(11)	(0)	-	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
212	45	56	土地鶴	母	(12)	2/2	2/2	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
213	44	55	二重鶴	上緯	1/1-2	1/1-2	2/2	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	黒尾毛(90cmあたり)	
214	45	36	黒地鶴	母	1/6	3/7	8/9	コ-ビ-ヒタカ完	200029	V 北区	黒鳩色シルト	
215	45	36	黒地鶴	母	(3)	3/5	8/4	1-1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
216	45	57	黒地鶴	母	(15)	3/4	(11)	1/1-4 黒鶴	200029	V E. S. N. W.	1-2周	
217	45	56	黒地鶴	母	(4)	2/7	(11)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
218	45	56	黒地鶴	母	(5)	4/2	(9)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周	
219	45	55	黒地鶴	母	(4)	-	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	0.13周		
220	45	57	黒地鶴	母	1/1-2	2/2	-	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	黒鳩色シルト	
221	45	55	黒地鶴	母	-	1/1-2	(7)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	黒鳩色シルト	
222	45	55	黒地鶴	母	(11)	2/6	(6)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	黒鳩色シルト	
223	45	55	黒地鶴	母	(13)	4/5	9/5	1-1-2	200029	V E. S. N. W.	1-2周	
224	45	56	黒地鶴	母	1/2	3/7	9/4	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
225	45	56	黒地鶴	母	(13)	2/7	(6)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	1-2周	
226	45	57	黒地鶴	母	-	1/1-2	(10)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	黒鳩色シルト	
227	45	57	黒地鶴	母	-	(2)	(6)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
228	45	57	黒地鶴	母	(15)	(3)	(3)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖(灰色)	
229	45	57	黒地鶴	母	-	1/1-2	(6)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖(灰色)	
230	45	57	黒地鶴	母	-	1/1-2	(6)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
231	45	57	黒地鶴	母	-	1/1-2	6/3	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
232	45	57	黒地鶴	母	(2)	1/1-2	1/1-2	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
233	45	57	黒地鶴	母	-	1/1-2	2/7	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
234	45	57	黒地鶴	母	-	1/1-2	2/7	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
235	45	57	黒地鶴	母	-	1/1-2	2/7	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
236	45	57	黒地鶴	母	-	1/1-2	2/7	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	
237	45	58	黒地鶴	母	-	1/1-2	(6)	1/1-2	200029	V E. S. N. W.	繁殖	

被番号	測定番号	測定場所	地名	季節	距離 (cm)			段数	直差番号	局区	通過地名	位数
					上行	下行	處理					
216	45	JR	新潟駅	春(武)	-	(4.6)	(8.0)	無断片	900070	V 33区	新潟市シタト	
219	42	JR	舟波	秋(武)	-	(6.6)	(C44)	無断片	900070	V 32区	新潟市シタト	
240	45	JR	青柳	秋	(2.2)	-	無断片	4000070	V 32区	新潟市シタト		
241	45	JR	青柳	秋	(2.2)	-	無断片	2000070	V 32区	新潟市シタト		
242	45	JR	青柳	秋	(20.1)	(6.0)	-	231-5	007108	新潟・南区	新潟市シタト	
243	42	JR	舟波	秋(武)	(27.5)	(6.1)	-	231-6	007108	新潟・南区	新潟市シタト	
244	42	JR	青柳	秋	(2.2)	(6.0)	無断片	200108	V 32区	新潟市シタト		
245	46	JR	青柳	冬(武)	(5)	(4.5)	-	232-1	990704	T	SD-101中区	
246	46	JR	青柳	冬(武)	-	(3.4)	(6.0)	無断片	900704	T	新潟市シタト	
247	45	JR	舟波	冬(武)	(2.2)	-	無断片	900204	T-b	SD-101		
248	46	JR	青柳	冬(武)	-	(8.7)	無断片	200707	V 33区	新潟市シタト		
249	45	JR	青柳	冬(武)	-	(4.7)	(6.0)	無断片	900204	T-b	SD-101	
250	10	JR	舟波	冬(武)	-	(4.5)	(6.0)	無断片	900204	T-b	SD-101	
251	45	JR	舟波	冬(武)	-	(6.9)	(2.5)	無断片	900204	T-b	SD-101北区	
252	45	JR	舟波	冬(武)	-	(3.1)	-	無断片	900204	T-b	SD-101北区	
253	46	JR	舟波	冬(武)	-	(2.5)	-	無断片	200707	97EE	新潟市シタト	
254	46	JR	青柳	冬(武)	-	(3.9)	-	無断片	900704	T	SD-101中区	
255	46	JR	青柳	冬(武)	-	(3.6)	-	無断片	900704	T	SD-101中区	
256	45	JR	青柳	冬(武)	-	(4.5)	-	無断片	900704	T	SD-101中区	
257	45	JR	青柳	冬(武)	-	(3.3)	-	無断片	200207	V 32区	新潟市シタト	
258	46	JR	舟波	冬(武)	(7.4)	(5.3)	無断片	900704	J	SD-101中区		
259	46	JR	舟波	冬(武)	(7.5)	-	無断片	900704	J	SD-101中区		
260	-	JR	六日町	成	-	-	-	-	900704	T	SD-101新潟管内	
301	-	JR	土炭高	動(10)	-	210.0g	-	-	900704	T	SD-101	新潟
302	-	JR	土炭高	動(10)	-	210.0g	-	-	900704	T	SD-101	新潟
303	-	JR	スラグ	新潟	-	-	-	-	900704	T	SD-101	新潟
304	-	JR	スラグ	新潟	-	-	-	-	900704	T	SD-101	新潟
305	-	JR	スラグ	新潟	-	-	-	-	900704	I	SD-101新潟管内	
306	-	JR	スラグ	新潟	-	-	-	-	900704	T	SD-101新潟管内	
307	-	JR	松代	新潟	-	-	-	-	900704	I	新潟	下野
308	-	JR	舟波	新潟	-	-	-	-	900704	I	新潟	下野
309	-	JR	舟波	新潟	-	-	-	-	200070	97EC	新潟	野上
310	-	JR	土師物	新潟	(5.5)	-	無断片	200070	V 32区	SD-101		
311	-	JR	土師物	新潟	(5.5)	-	無断片	200070	V 32区	新潟市シタト		
312	-	JR	土師物	新潟	(5.5)	-	無断片	200070	V 32区	新潟市シタト		
313	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	SD-101	新潟管内	新潟路線運送	
314	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	T	セシムン	セシムン
315	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	200070	V 32区	SD-101	
316	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	200070	V 32区	SD-101	
317	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	200070	V 32区	SD-101	
318	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	007108	97EE	新潟	下野
319	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
320	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
321	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
322	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
323	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
324	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
325	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
326	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
327	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
328	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
329	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
330	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
331	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
332	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
333	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野
334	-	JR	新潟路	新潟	-	-	-	-	900704	J	新潟	下野

松井秀介	調査番号	採取試験場所	方法	標本	試験 (cm)			結果	調査番号	地名	調査場所	延長
					高さ	幅	厚さ					
					cm	cm	cm					
W1	47	⑨	砂質	細粒土質	(24.2)	64	0.95	99259	I区	SD-J01北端		
W2	47	⑨	砂質	透水性土質	(22)	(10.4)	1.1	99259	I区	SD-J01北端		
W3	47	⑨	砂質	粗粒地盤	(4.95)	(1.7)	0.2	99259	I区	SD-J01		
W4	47	⑨	砂質土質	土質	22.9	0.2	0.4	99259	I区	SD-J01		
W5	47	⑩	砂質土質	土質	23.2	0.5	0.4	99259	I区	SD-J01北端		
W6	47	⑩	砂質土質	土質	(26.8)	0.6	0.4	99259	I区	SD-J01北端		
W7	47	⑩	砂質土質	土質	(22.2)	0.6	0.2	99259	I区	SD-J01北端		
W8	47	⑩	砂質土質	土質	(14.6)	0.8	0.4	99259	I区	SD-J01		
W9	47	⑩	砂質土質	土質	(26.9)	2.7	0.5	99259	I区	SD-J01		
W10	48	⑪	透水性地盤	地盤	22.6	14.0	0.8	99259	I区	SD-J01		
W11	48	⑪	透水性地盤	地盤	(26.1)	15.0	1.	99259	I区	SD-J01北端		
W12	48	⑪	透水性地盤	地盤	(13.4)	12.6	0.9	99259	I区	SD-J01		
W13	48	⑪	透水性地盤	地盤	(12.2)	12.3	0.9	99259	I区	SD-J01		
W14	48	⑪	透水性地盤	地盤	(10.9)	12.4	0.8	99259	I区	SD-J01		
W15	48	⑪	透水性地盤	地盤	(9.4)	11.9	0.6	99259	I区	SD-J01		
W16	48	⑫	透水性地盤	地盤	(25.8)	16.0	1.0	99259	I区	SD-J01北端	マツヤ	
W17	48	⑫	透水性地盤	地盤	(21.6)	2.5	0.8	99259	I区	SD-J01北端	マツヤ	
W18	48	⑬	透水性地盤	地盤	(7.0)	7.4	0.5	99259	I区	SD-J01		
W19	49	⑮	透水性地盤	木質	30.9	31	0.55	99259	II区	透水性地盤	上界	
W20	49	⑯	透水性地盤	木質	(6.1)	23	0.3	99259	II区	透水性地盤	上界	
W21	49	⑯	透水性地盤	木質	(14.6)	49	0.3	99259	II区	透水性地盤	上界	
W22	49	⑯	透水性地盤	木質	(26.9)	45	0.3	99259	II区	透水性地盤	上界	
W23	49	⑰	透水性地盤	木質	(2.2)	2.6	0.4	99259	II区	透水性地盤	セクションド	頂
W24	49	⑰	透水性地盤	木質	(2.4)	2.3	0.3	99259	II区	透水性地盤	上界	
W25	49	⑰	透水性地盤	木質	(24.5)	5.6	0.8	99259	II区	透水性地盤	上界	
W26	49	⑰	透水性地盤	木質	(1.5)	2.0	0.3	99259	II区	透水性地盤	シルト下	
W27	50	⑰	透水性地盤	木質	(0.9)	(1.4)	0.01	99259	II区	透水性地盤	上界	
W28	50	⑰	透水性地盤	木質	(9.3)	5.05	0.6	99259	II区	透水性地盤	上界	
W29	50	⑰	透水性地盤	木質	(1.7)	7.1	1.9	99259	II区	透水性地盤	シルト下	
W30	50	⑰	透水性地盤	木質	(2.2)	1.8	1.8	99259	II区	透水性地盤	上界	
W31	50	⑰	透水性地盤	木質	(16.6)	4.75	0.65	99259	II区	透水性地盤	上界	
W32	50	⑰	透水性地盤	木質	(7.7)	4.9	0.5	99259	II区	透水性地盤	上界	
W33	50	⑰	透水性地盤	木質	(3.7)	3.15	0.3	99259	II区	透水性地盤	上界	
W34	50	⑰	透水性地盤	木質	(?)	5.9	0.7	99259	II区	透水性地盤	上界	
W35	50	⑰	透水性地盤	木質	(2.5)	4.2	0.9	99259	II区	透水性地盤	上界	
W36	51	⑲	透水性地盤	木質	(14.1)	4.8	0.6	99259	II区	透水性地盤	上界	
W37	51	⑲	透水性地盤	木質	(3.6)	3.7	0.1	99259	II区	透水性地盤	上界	
W38	51	⑲	透水性地盤	木質	(26.6)	6.0	0.6	99259	II区	透水性地盤	上界	
W39	51	⑲	透水性地盤	木質	(28.4)	6.0	0.6	99259	II区	透水性地盤	上界	
W40	51	⑲	透水性地盤	木質	(26.6)	7.7	0.8	99259	II区	透水性地盤	シルト下	
W41	51	⑲	透水性地盤	木質	(4.0)	5.3	0.9	99259	II区	透水性地盤	石粉	
W42	51	⑲	透水性地盤	木質	(40.8)	5.2	2.2	99259	II区	透水性地盤	石粉	
W43	51	⑲	透水性地盤	木質	(28.5)	4.05	2.1	99259	II区	透水性地盤	上界	
W44	52	⑳	透水性地盤	木質	(8.6)	8.85	2.05	99259	II区	透水性地盤	上界	
W45	52	⑳	透水性地盤	木質	(0.4)	0.1	4.7	99259	II区	透水性地盤	上界	
W46	52	⑳	透水性地盤	木質	(26.9)	8.2	5.3	99259	II区	透水性地盤	上界	
W47	52	⑳	透水性地盤	木質	(12.0)	9.65	5.75	99259	II区	透水性地盤	上界	
W48	52	⑳	透水性地盤	木質	(22.8)	11.9	5.2	99259	II区	透水性地盤	上界	
W49	52	⑳	透水性地盤	木質	(0.9)	(11.4)	5.5	99259	II区	透水性地盤	上界	
W50	52	⑳	透水性地盤	木質	(10.2)	(14.0)	2.8	99259	II区	透水性地盤	上界	
W51	52	⑳	透水性地盤	木質	(14.7)	17.5	2.8	99259	II区	透水性地盤	上界	
W52	52	⑳	透水性地盤	木質	(12.9)	6.3	0.8	99259	II区	透水性地盤	上界	
W53	52	⑳	透水性地盤	木質	(11.9)	5.5	0.2	99259	II区	透水性地盤	上界	
W54	53	㉑	森林	樹木	(34.5)	(28.1)	0.55	99259	II区	SD-J01	葉下部細胞質	2
W55	53	㉑	森林	樹木	(22.7)	36.0	1.5	99259	II区	SD-J01	SD-J01	
W56	53	㉑	森林	樹木	(32.0)	35.0	1.0	99259	II区	SD-J01	SD-J01	
W57	53	㉑	森林	樹木	(24.7)	35	0.5	99259	II区	SD-J01	SD-J01	
W58	53	㉑	森林	樹木	(17.2)	1.5	0.5	99259	II区	SD-J01	SD-J01	
W59	53	㉑	森林	樹木	(16.7)	4.3	0.7	99259	II区	SD-J01	SD-J01	
W60	53	㉑	森林	樹木	(24.9)	24	1.9	99259	II区	SD-J01	SD-J01	
S1	55	68	石炭層	岩石	17.0m	95.7m	50.5m	100.0m	I区	SD-J01	北の山	
S2	55	68	石炭層	岩石	122.7m	73.2m	43.0m	44.0m	I区	SD-J01	北の山	
S3	55	68	石炭層	岩石	81.0m	65.0m	51.5m	50.5m	I区	SD-J01	北の山	
S4	55	68	石炭層	岩石	96.2m	25.0m	20.5m	10.0m	I区	SD-J01	北の山	
S5	55	68	石炭層	岩石	16.0m	1.4m	0.5m	0.2m	I区	SD-J01	北の山	
S6	55	68	石炭層	岩石	15.0m	1.0m	0.5m	0.2m	I区	SD-J01	北の山	
S7	55	68	石炭層	岩石	100.7m	85.0m	49.0m	38.0m	I区	SD-J01	北の山	
S8	55	68	石炭層	岩石	192.0m	55.0m	29.0m	45.0m	I区	SD-J01	北の山	

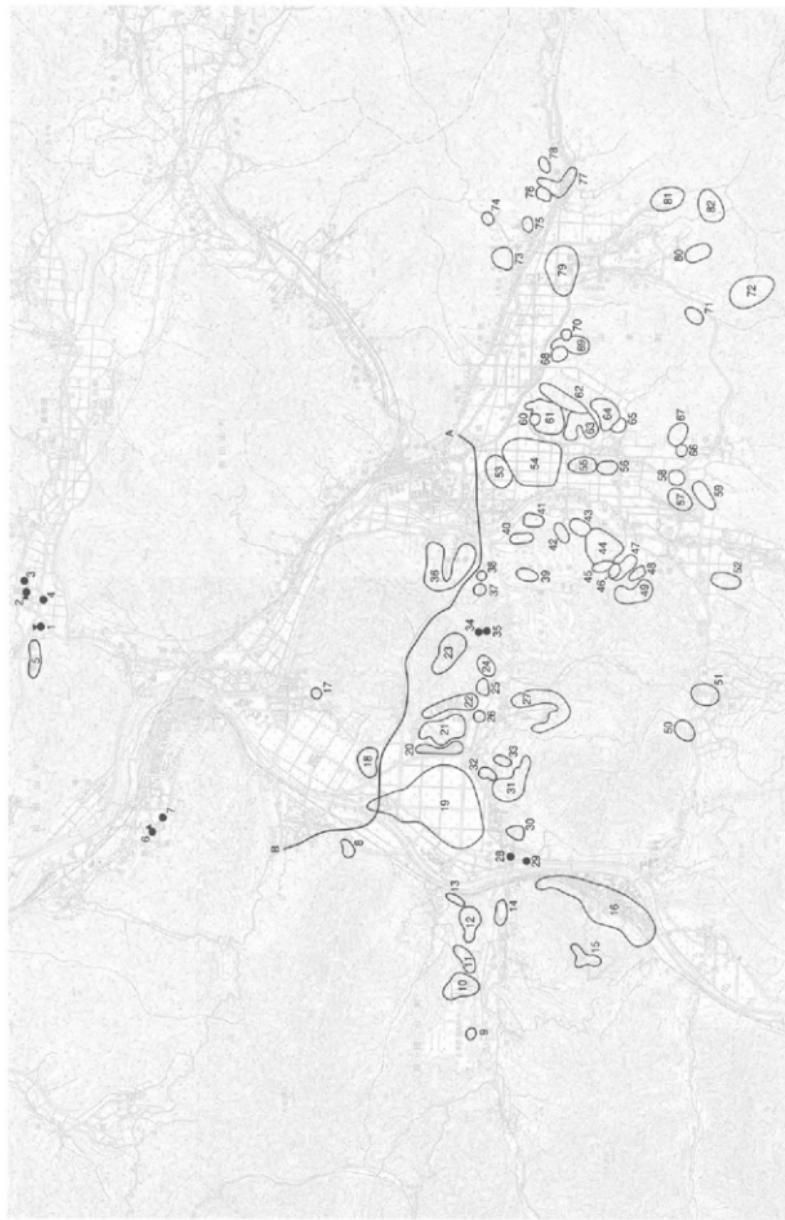
辨証番号	回収番号	可販回収番号	種別	性別	寸法(cm)			産名	調査番号	地区	測量場所	測定
					丈	幅	厚さ					
M9	56	69	漆器品	女性	149.0mm	65.7mm	26.2mm	漆器13cm 262g	200119	Y. X - 中区		
M11	57	70	漆器品	男性	2.3	2.3	0.1	漆器2.1g	990204	Y - 6	住吉港	
M23	57	70	漆器品	男性	(3.0)	2.25	0.1	漆器2.1g	990204	木村		
M3	57	70	漆器品	男	0.7	2.1	0.4	漆器0.1g	990204	1.3	SE-02	
M4	57	70	漆器品	男	(2.0)	2.6	0.5	漆器12.9g	200279	V.X. 2001X 12.9g	藤十(住吉 町)	
M5	57	70	スラック		14.65	164.9	6.65	漆器15.0g	990204	I	Po-1647	
M678	-	71	スラック					漆器10.5g 27.7g 75.9g 4.0g	990204	I - a	SD-161	中層
M9	-	71	スラック					漆器3.5g	990204	I - b	SD-161	
M10.11	-	71	スラック					漆器29.2g 11.3g 数枚	990204	I - b	下層漆皮	黑色, 油光
M12.13 14.15	-	71	スラック					漆器18.1g 35.7g 20.6g 集 数枚	990204	T	Po-1648	
M16	-	71	スラック					漆器15.5g	990204	I	Po-1650	
M17	-	71	スラック					漆器15.4g	990204	T	Po-1655	
M18	-	71	スラック					漆器21.9g	990204	II	漆皮	上層 1
M19	-	71	スラック					漆器34.7g	990204	II	漆皮	上層 2
M20	-	71	スラック					漆器37.6g	990204	T	漆皮	下層 3-4
M21	-	71	スラック					漆器56.7g	200279	V.X. 2001 56.7g	黒褐色シート	

表2 出土遺物観察表

# 図 版

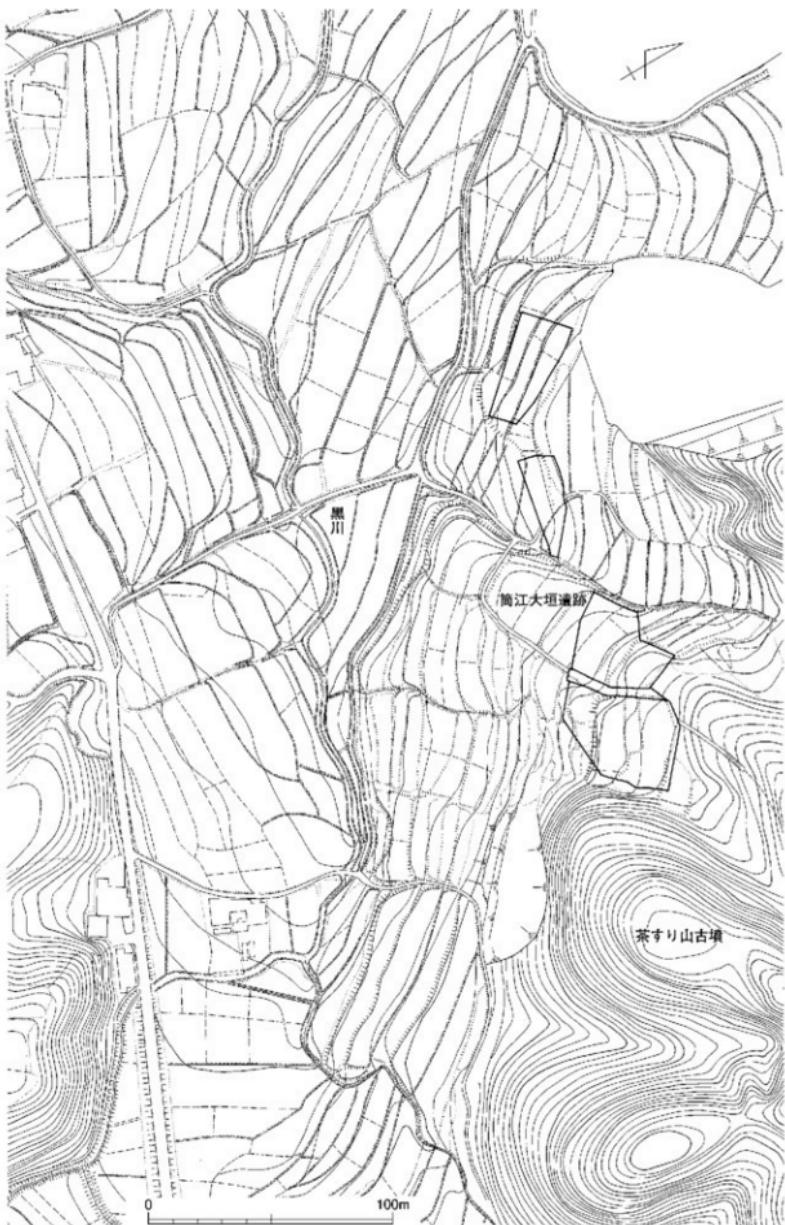
1 小丸山古墳	22 箕面原古墳群	43 寺山古墳群	64 馬場古墳群
2 長塚古墳	23 比治城跡	44 宮ノ谷古墳群	65 越田宮之前遺跡
3 背塚古墳	24 奈り山古墳	45 大將軍古墳群	66 恵谷遺跡
4 岡田2号墳	25 箕面大垣遺跡	46 北大工山古墳群	67 南越谷古墳群
5 大盛山遺跡	26 箕面白遺跡	47 大工山古墳群	68 岩水A古墳群
6 池田古墳	27 長尾古墳・長尾中世墓群	48 矢谷古墳群	69 若水城跡
7 城の山古墳	28 加都車塚	49 押坂古墳群	70 若水B古墳群
8 松田城跡	29 加都工塚	50 イノオク古墳群	71 堀所古墳群
9 市条寺経塚	30 加都神社裏古墳群	51 比治向山古墳群	72 西谷古墳群
10 南山古墳群	31 城ヤブ古墳群	52 森向山古墳群	73 大同寺古墳群
11 梅田古墳群	32 加都城跡	53 水篠遺跡	74 大原1・2号墳
12 安井城跡	33 箕面城跡	54 布坪遺跡	75 宮裏古墳群
13 梅田東古墳群	34 大月北山1号墳	55 柿坪中山古墳群	76 方谷古墳群
14 安井遺跡	35 大月北山2号墳	56 越田段古墳群	77 柴道跡
15 竹田城跡	36 大師山古墳群	57 与布土氏館跡	78 方谷遺跡
16 竹田城下町遺跡	37 榛原遺跡	58 二保遺跡	79 窪庵遺跡
17 法興寺跡	38 梅ヶ作遺跡	59 山根古墳群	80 焼名谷古墳群
18 市御前城跡	39 大月向山古墳群	60 芝ヶ端遺跡・古墳	81 滝ノ口古墳群
19 加都遺跡	40 城ノ越古墳群	61 芝端古墳群	82 滝ノ口北古墳群
20 片引遺跡	41 跡畠城跡	62 和賀向山古墳群	A-B 山陰道
21 術江中山古墳群	42 東南山古墳群	63 植坪向山古墳群	

図版 1  
周辺の遺跡

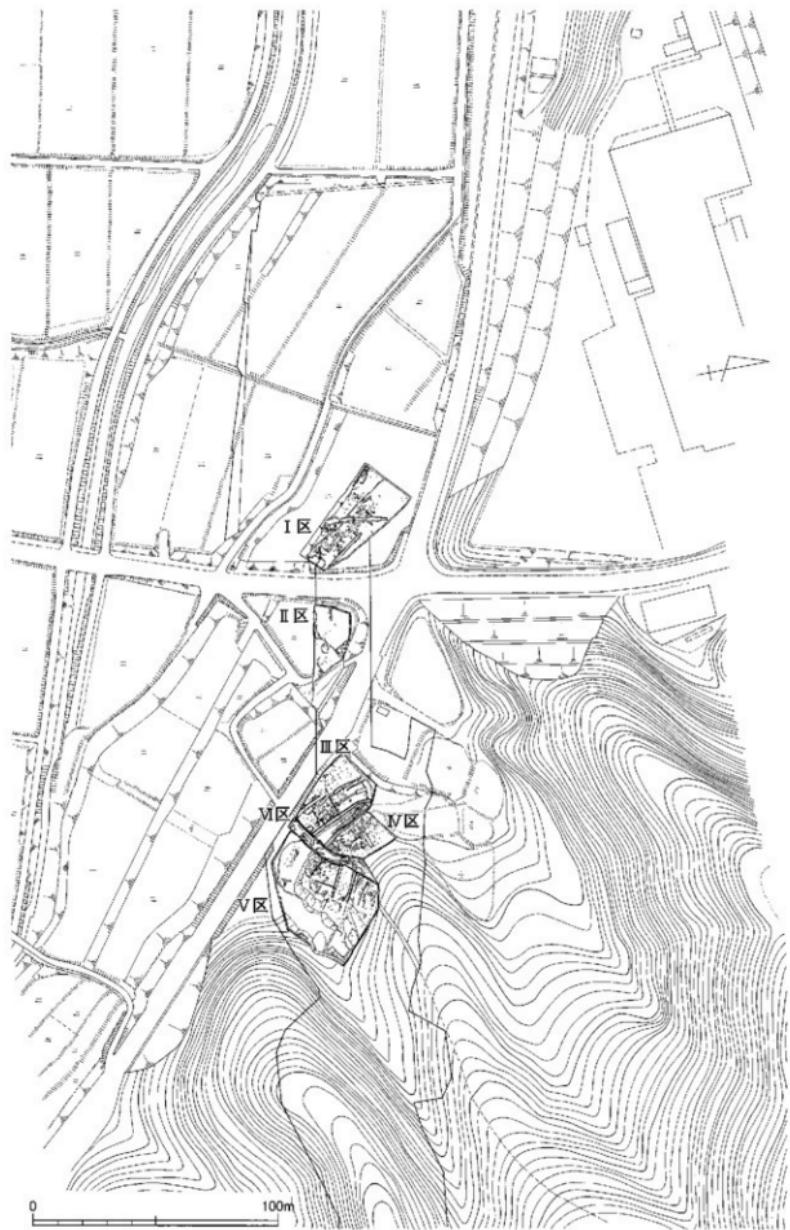


図版2

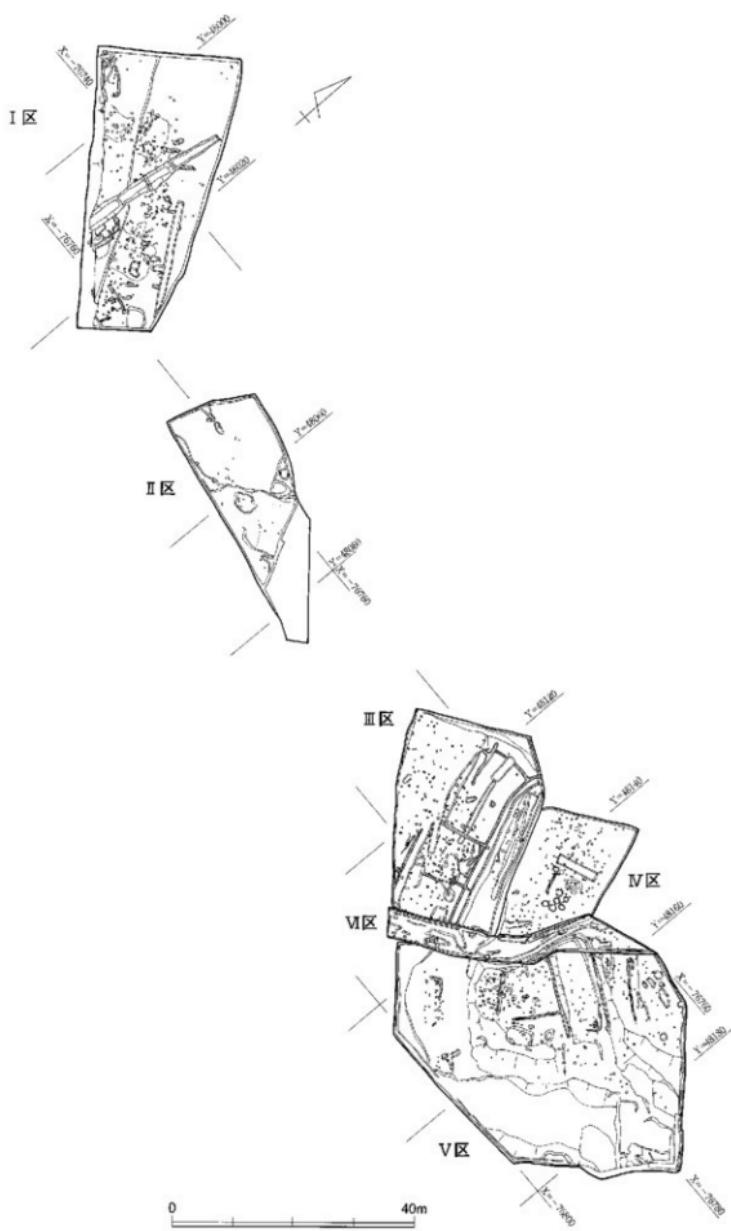
周辺の地形（圃場整備前の状況）



図版3  
調査範囲図

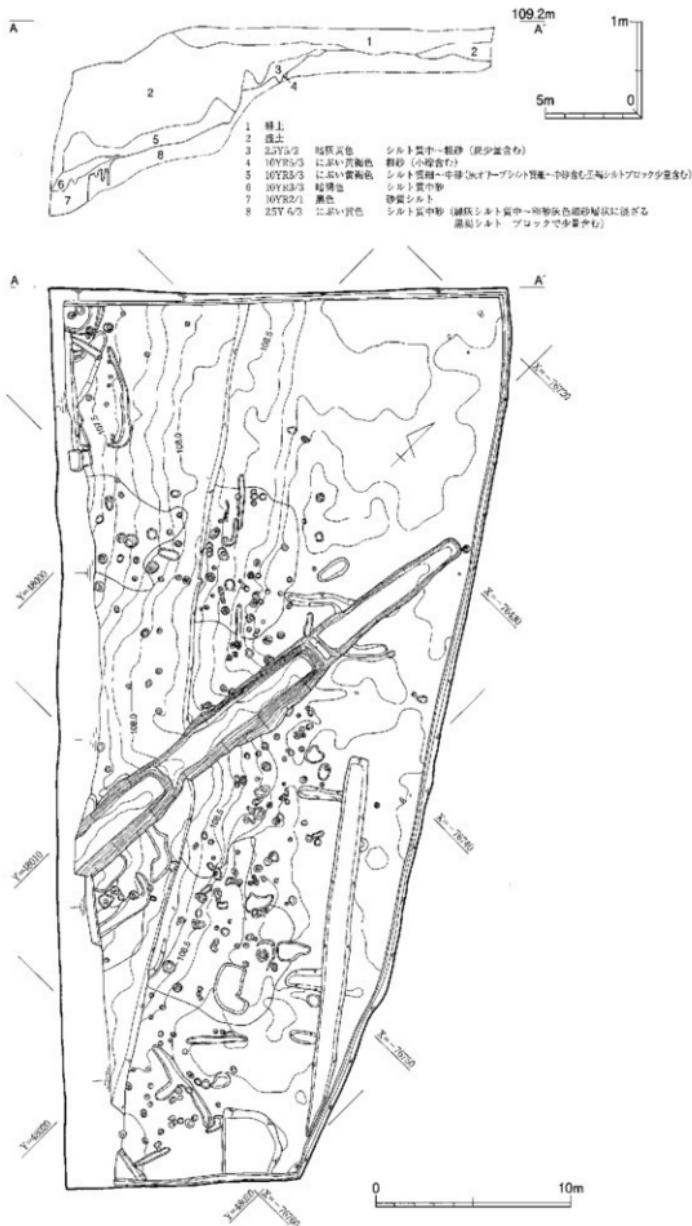


図版4  
調査区全図



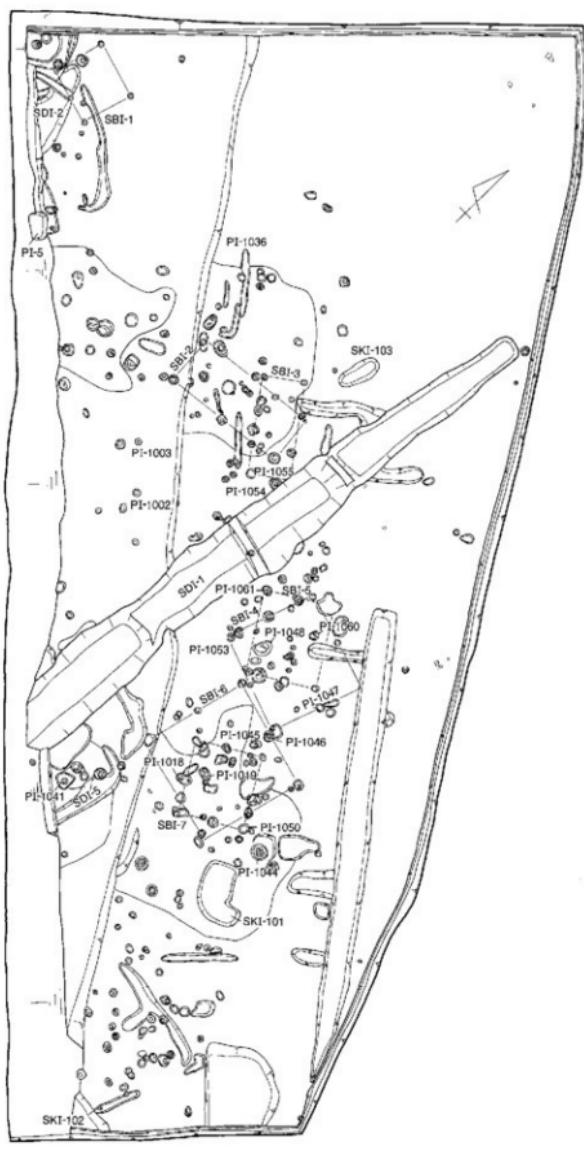
図版5

## I 区の地形と基本土層図



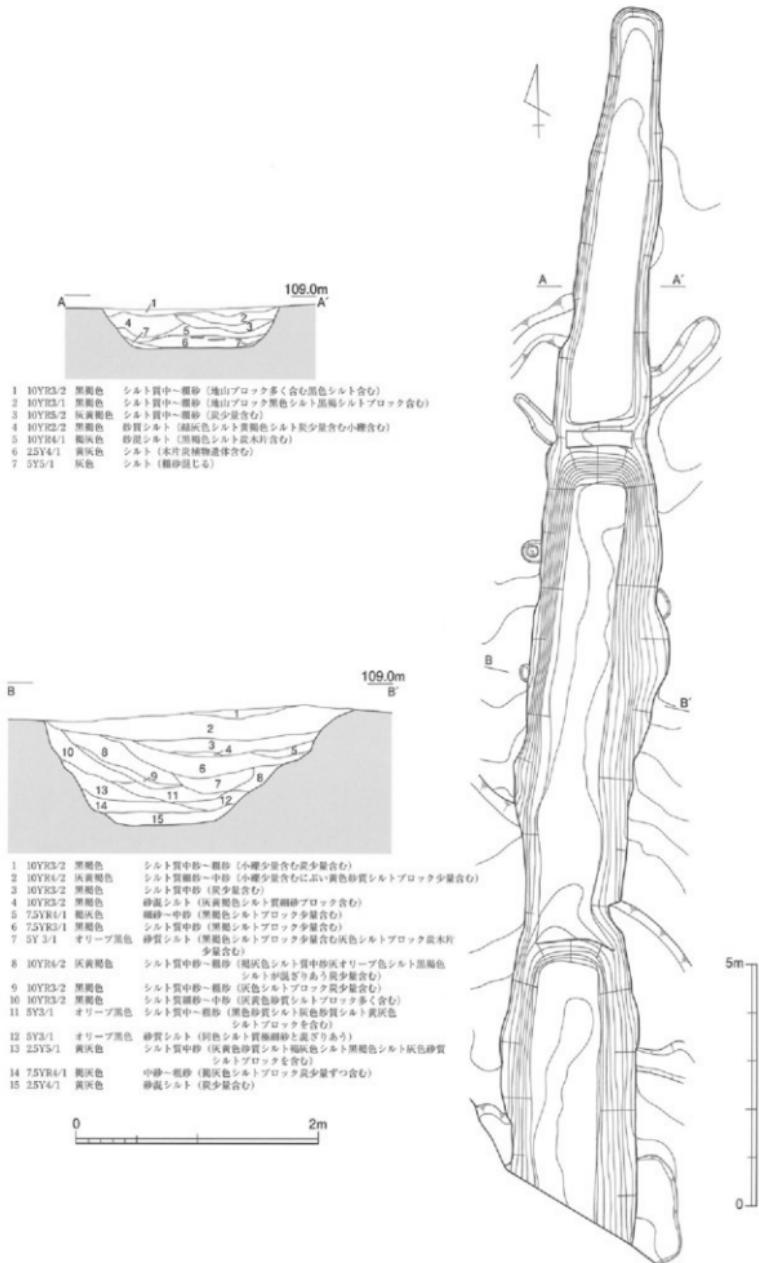
# 図版6

## I区遺構配置図



0 10m

図版7  
溝 SD I - 1



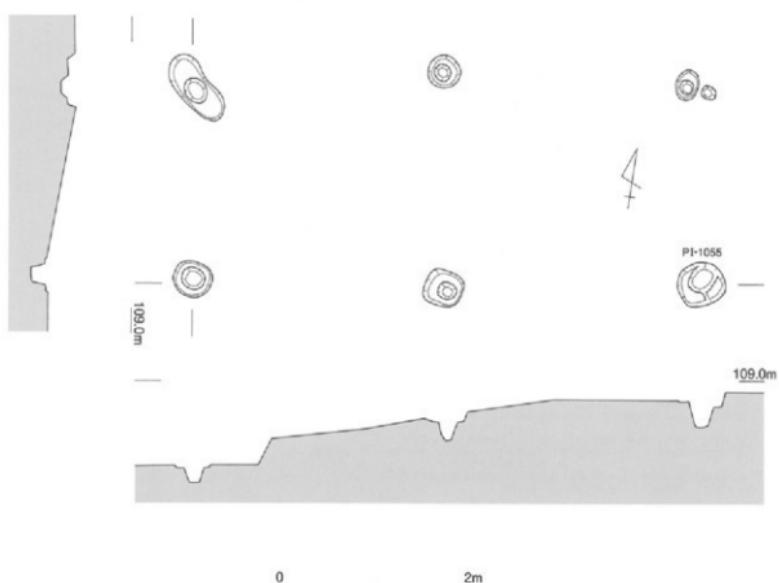
図版8

掘立柱建物 SB I-1・I-2

SBI-1

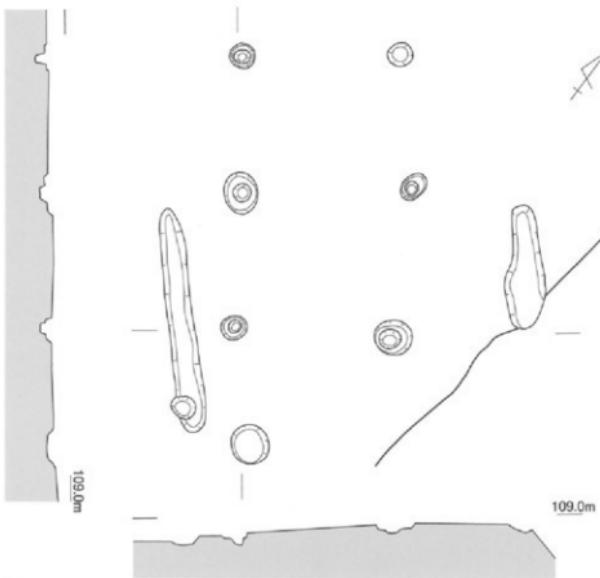


SBI-2



図版9  
掘立柱建物 SB I -3・I -4

SBI-3

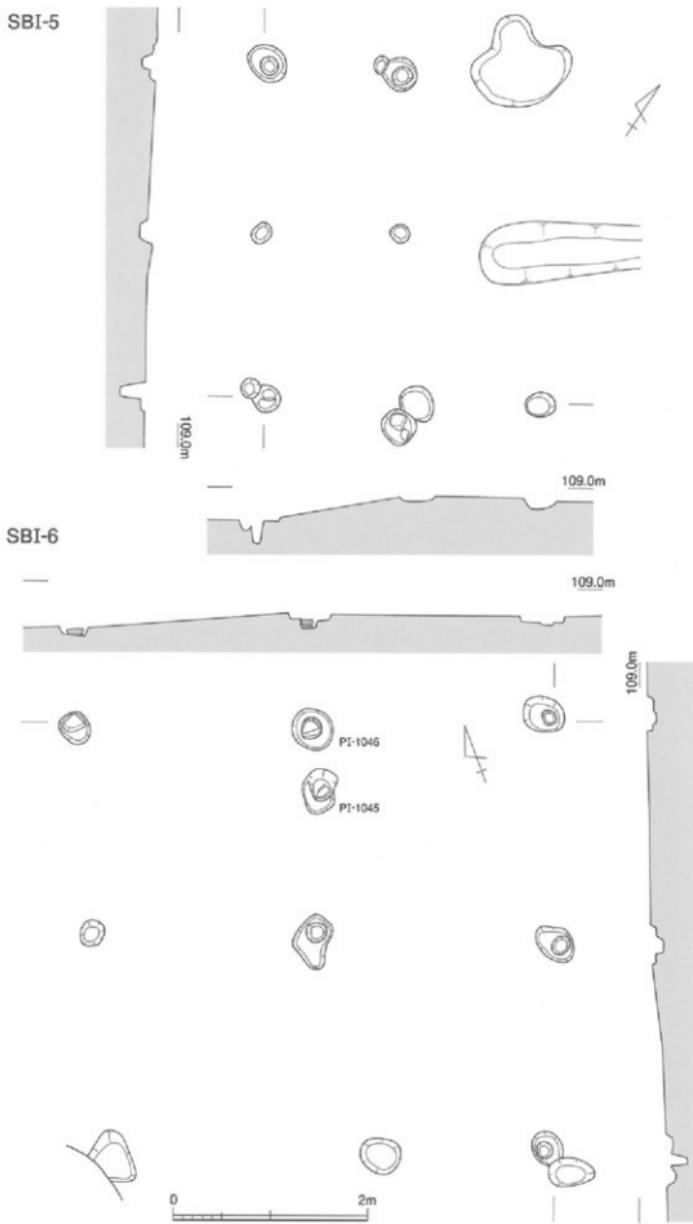


SBI-4

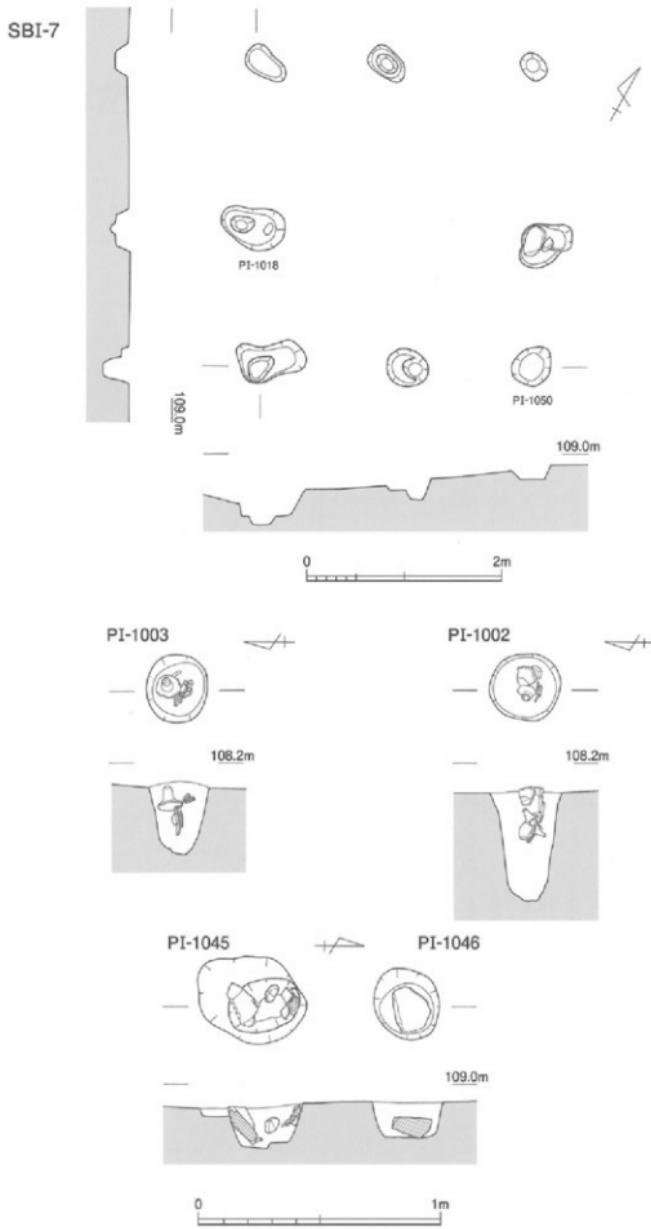


図版10

掘立柱建物 SB I -5・I -6

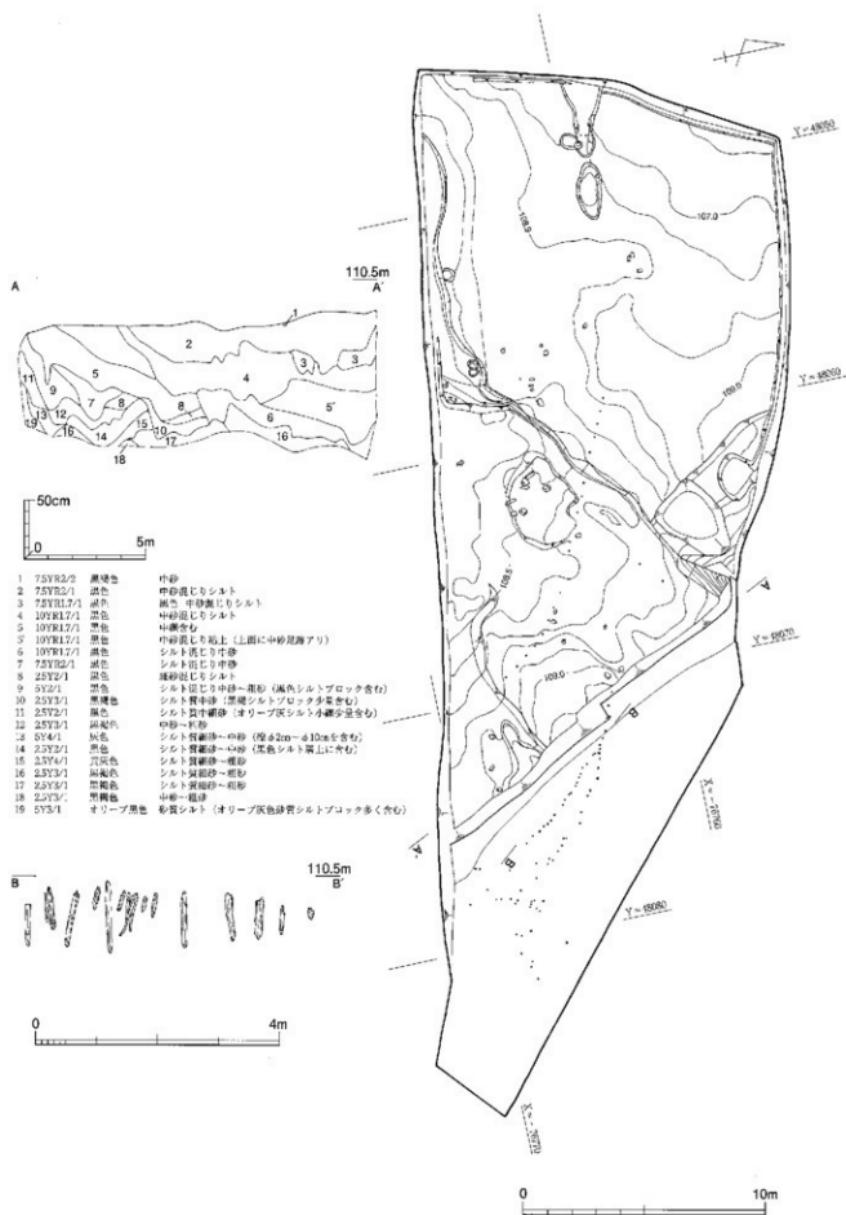


## 掘立柱建物 SB I -7・柱穴

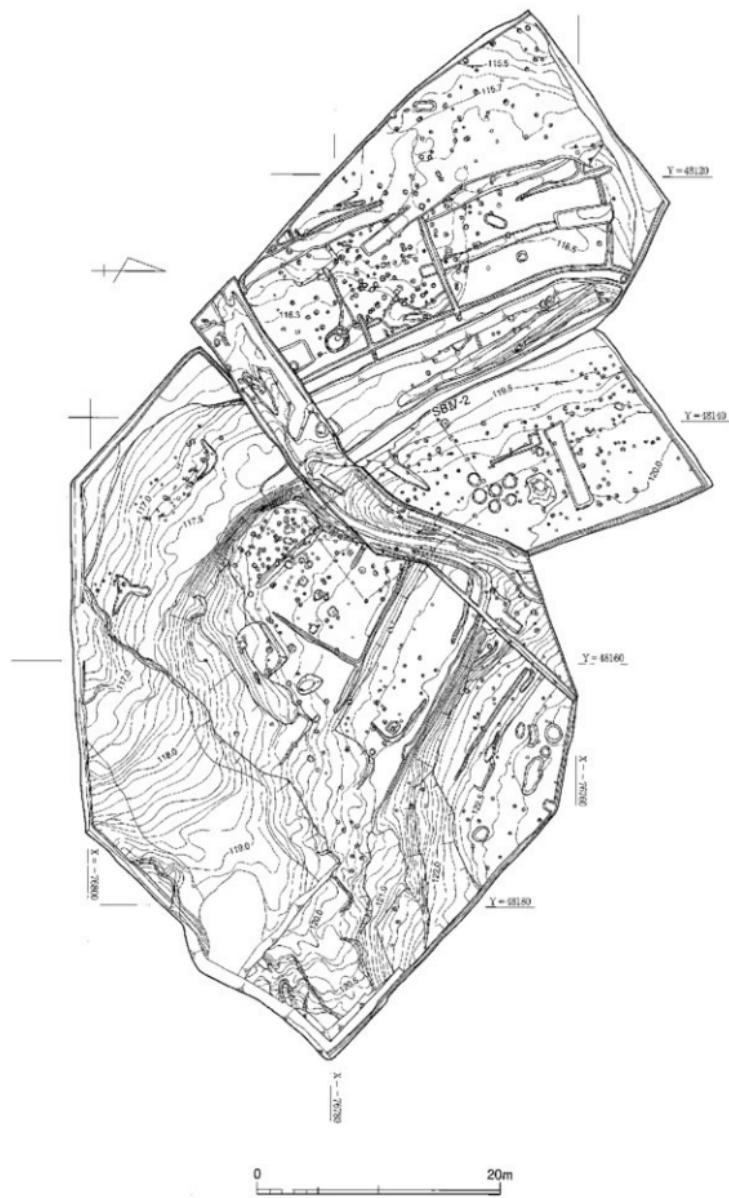


図版12

## Ⅱ区の地形と基本土層図

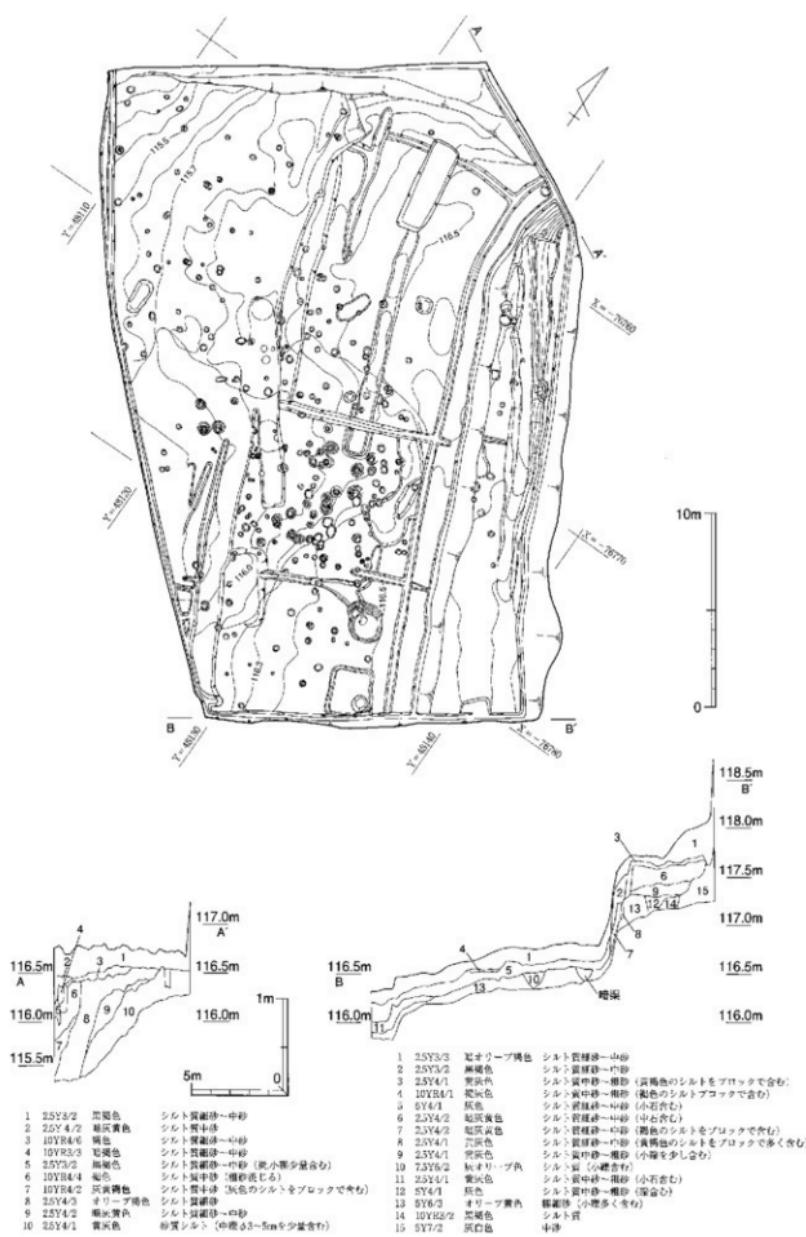


図版13  
III・IV・V・VI区全図

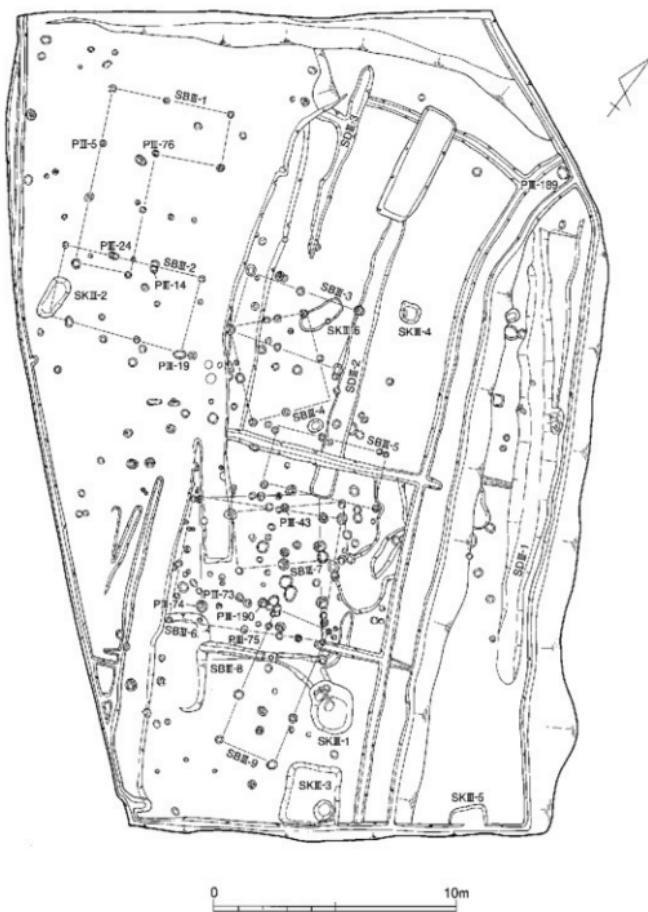


図版14

## Ⅲ区の地形と基本土層図



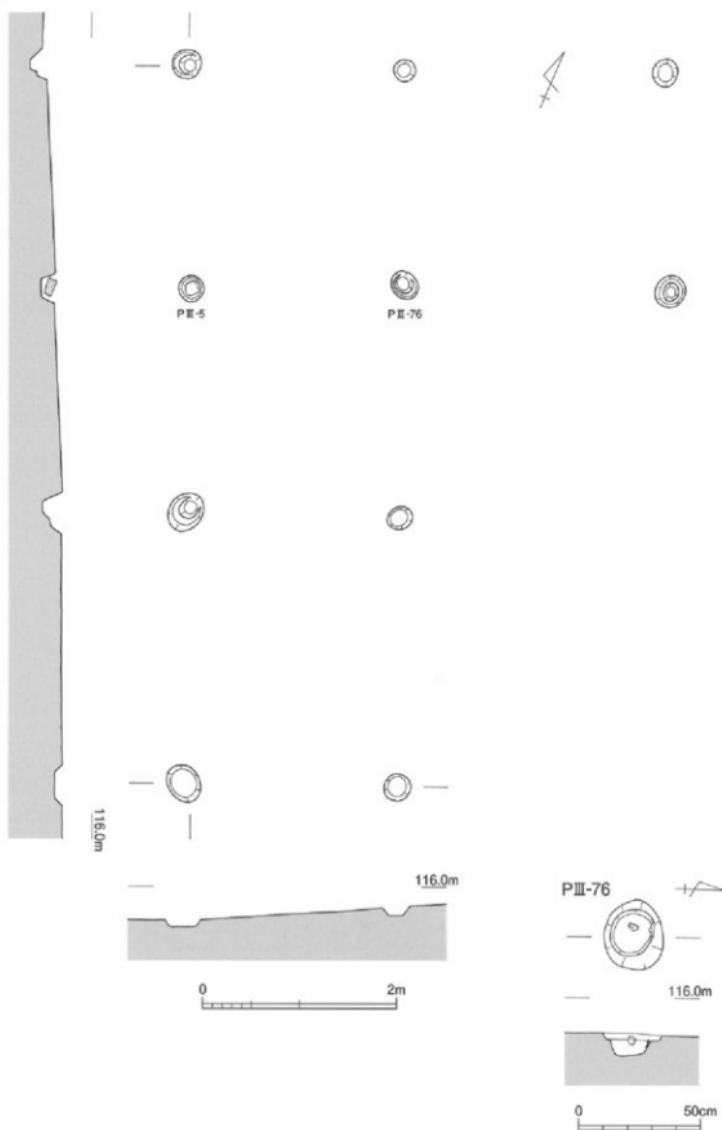
図版15  
Ⅲ区遺構配置図



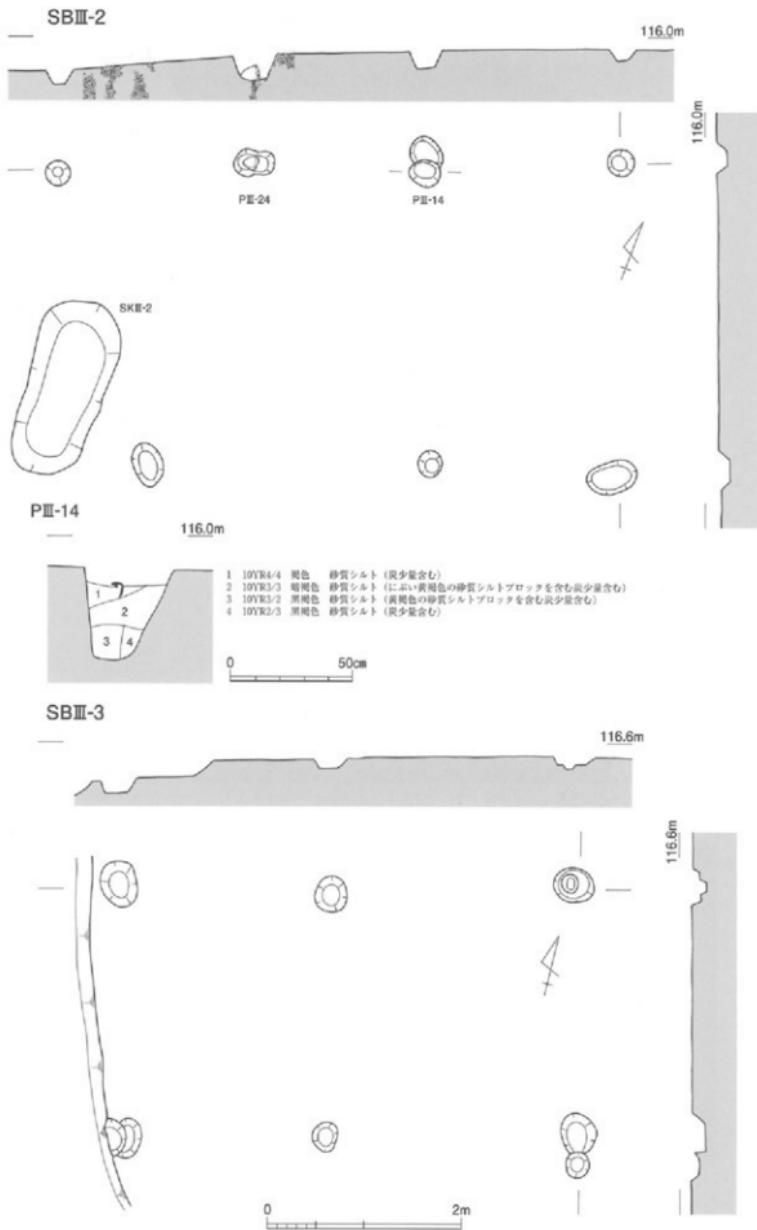
図版16

掘立柱建物 SB III-1

SBIII-1



## 掘立柱建物 SBⅢ-2・Ⅲ-3



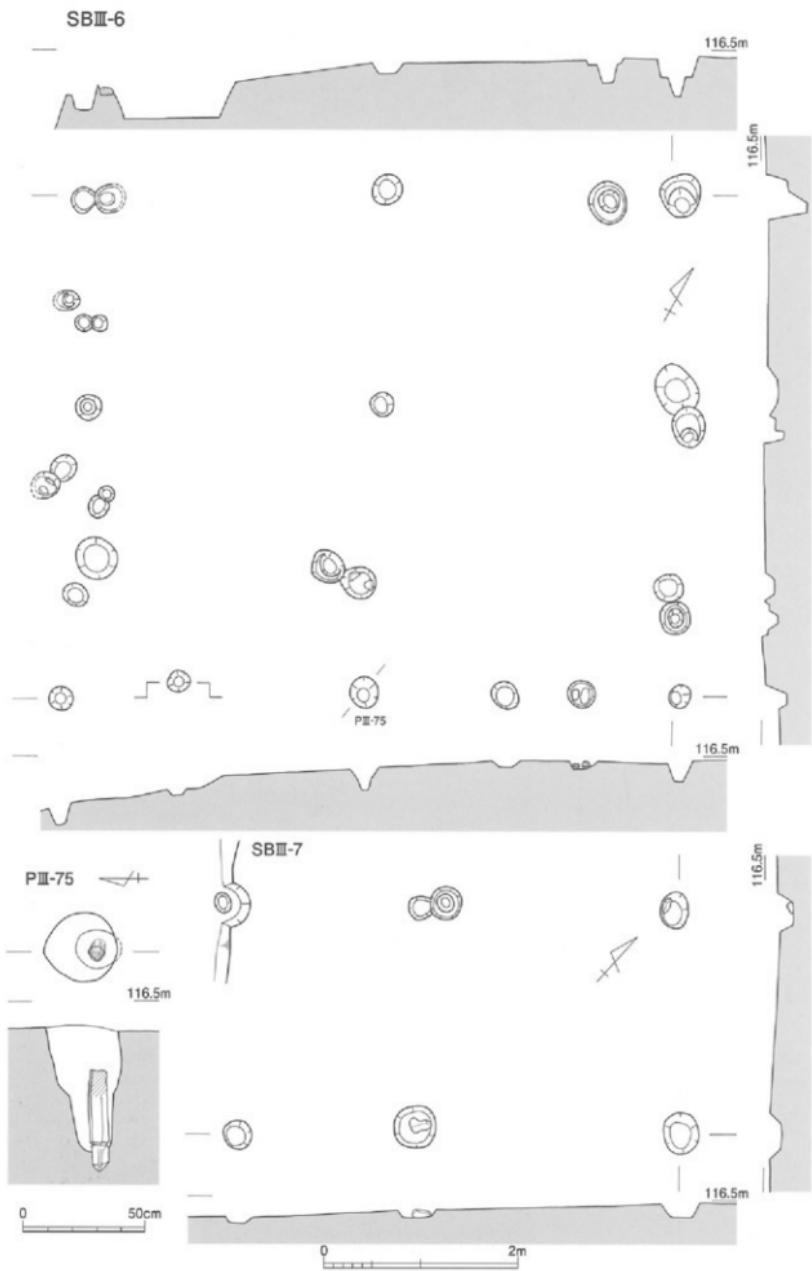
図版18

掘立柱建物 SBⅢ-4・Ⅲ-5



図版19

掘立柱建物 SB III-6・III-7



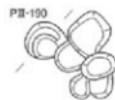
図版20

掘立柱建物 SB III-8・柱穴

SB III-8



116.6m



116.6m

0

2m

P III-74



116.4m



P III-73



116.4m



P III-190



116.4m



116.4m

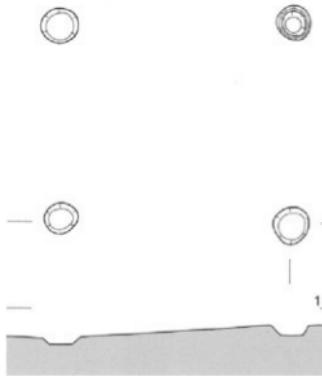
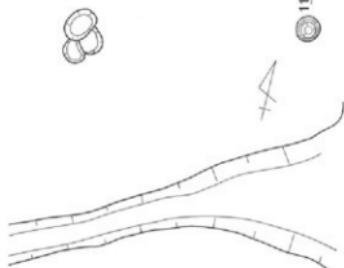
0



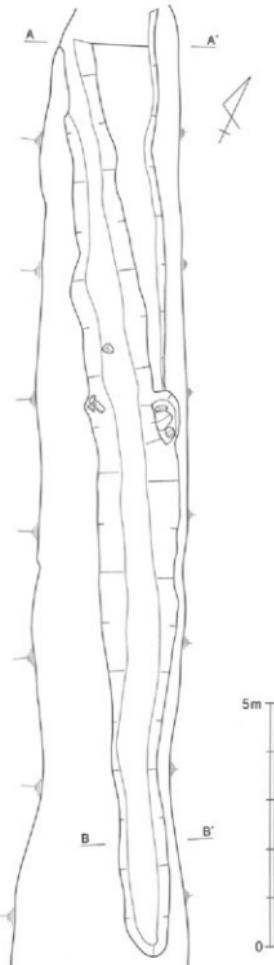
1m

## 掘立柱建物 SB III-9・溝

SB III-9



- 1 10YR2/2 黒褐色 中砂混じり粗砂  
(褐色シルト・小石少量含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 褐質シルト  
(褐色シルト・ブロック多く含む)
- 3 10YR5/1 開灰色 シルト混じり粗砂  
(褐色色シルト少量含む)
- 4 10YR3/1 黑褐色 砂質シルト  
(淡小石少量含む)

0  
2m

- 1 75YR2/2 黒褐色 シルト質細砂 (褐色小石少量含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト質細砂～中砂
- 3 10YR3/1 黒褐色 シルト質細砂～中砂 (黒色シルトブロック少量含む)
- 4 10YR3/1 黑褐色 シルト質細砂～中砂 (小石含む)
- 5 75YR2/1 黑褐色 シルト質中砂 (小石含む)
- 6 5YR4/1 灰色 シルト質細砂

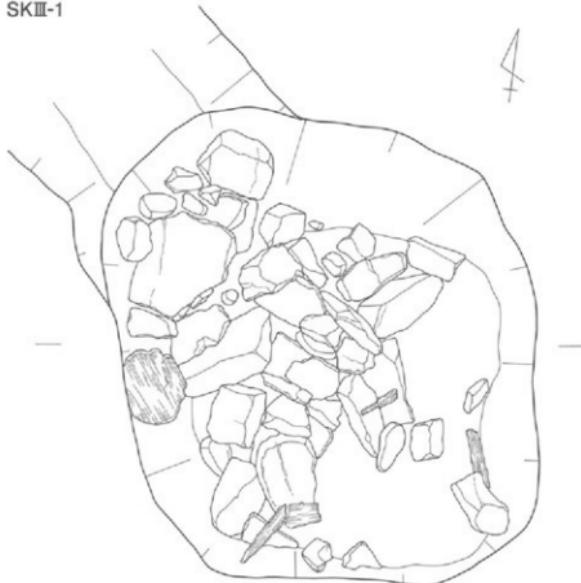
117.6m

0  
2m

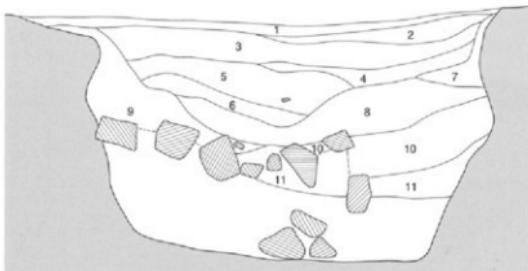
図版22

井戸 SKIII-1

SKIII-1



116.6m

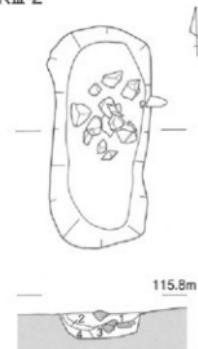


- |    |        |      |                          |
|----|--------|------|--------------------------|
| 1  | 10Y3-2 | 黒褐色  | 砂質シルト                    |
| 2  | 10Y4-1 | 黄褐色  | 砂質シルト (白色小礫混じり)          |
| 3  | 2SY4/1 | 黄灰色  | 砂質シルト (進出小ブロック含む)        |
| 4  | 2SY3/1 | 黒褐色  | 砂質シルト                    |
| 5  | 10Y3-2 | 黒褐色  | 砂質シルト (小礫含む)ナ状地山ブロック含む)  |
| 6  | 2SY4/1 | 黄褐色  | 砂質シルト (既往大礫少量含む地山ブロック含む) |
| 7  | 2SY4/1 | 黄褐色  | 砂質シルト 滑面鏡面シルト            |
| 8  | 10Y4/1 | 黄褐色  | 砂質シルト 滑面鏡面シルト            |
| 9  | 2SY4/2 | 暗灰褐色 | 中・粗砂 (地山ブロック含む)          |
| 10 | 2SY4/2 | 暗灰褐色 | シルト (中礫含む)               |
| 11 | 3Y4/1  | 灰色   | シルト                      |

0 1m

図版23  
土坑

SKIII-2



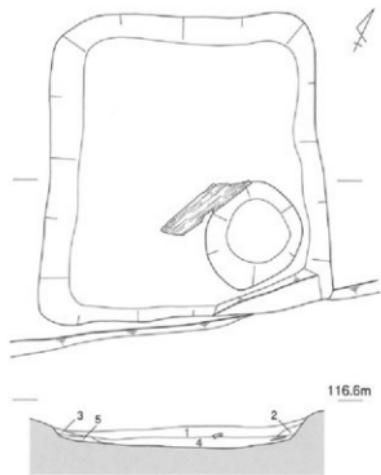
SKIII-6



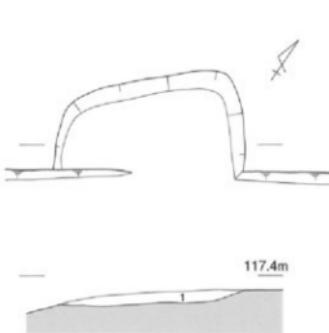
- 1 10YR3/4 細褐色 シルト質中砂（地山の黄土ブロックが少量混じる）
- 2 10YR3/3 細褐色 シルト質細砂
- 3 7.5YR3/3 細褐色 シルト質細砂～中砂
- 4 7.5YR3/2 黑褐色 シルト質細砂～中砂（礫が混じる）

1 10YR3/2 黒褐色 シルト質細砂～中砂（地山の黄土黒褐色シルト含む）

SKIII-3



SKIII-5



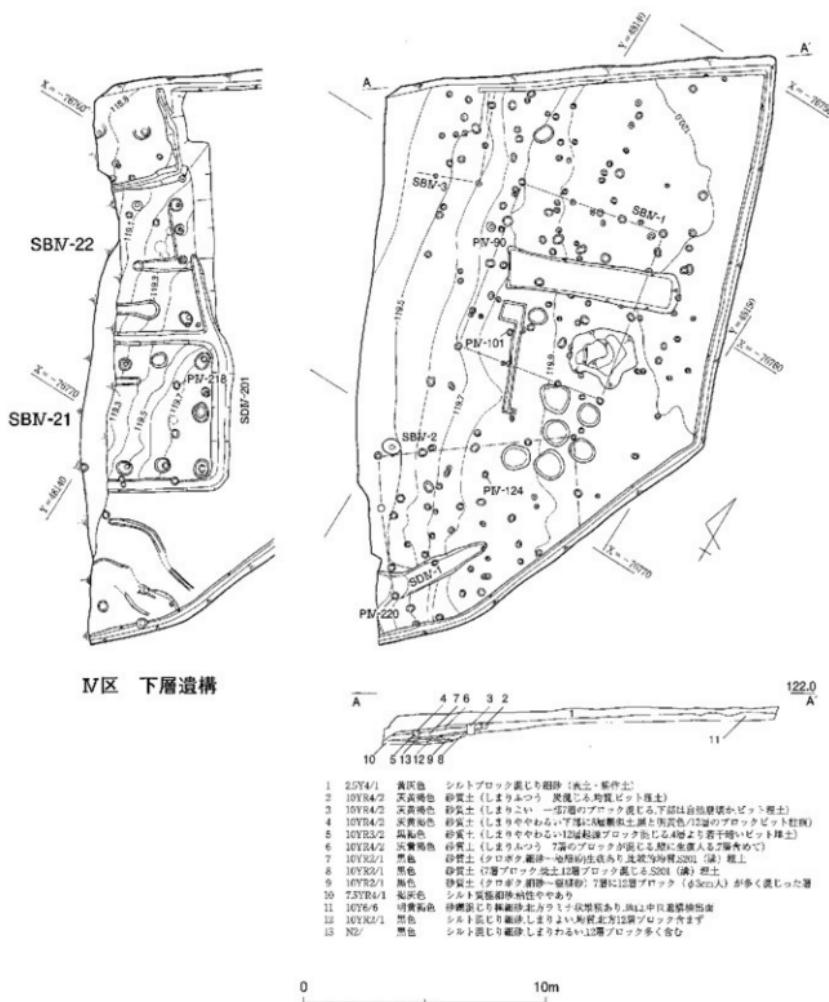
1 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト（オリーブ墨色の細砂ブロックを含む）

- 1 10YR3/3 細褐色 シルト質中砂（地山の灰褐色土のブロックが少量混じる）
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 中砂～粗砂
- 3 10YR4/2 灰黃褐色 シルト質中砂
- 4 2.5Y4/1 黄灰色 シルト
- 5 10YR3/4 細褐色 中砂～粗砂



図版24

## IV区遺構配置図



## 掘立柱建物 SBV-1

## SBV-1



# 図版26

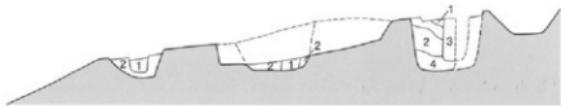
## 掘立柱建物 SBIV-2

SBIV-2



SBN-21

120.0m



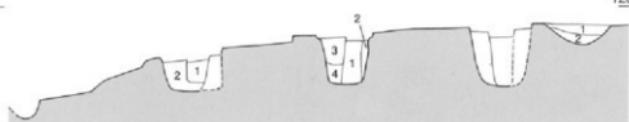
- 1 10YR5/2 灰青褐色 シルト質細砂  
2 10YR4/2 灰青褐色 シルト質細砂ブロック状堆土  
10YR5/6 黄褐色
- 1 10YR5/2 灰青褐色 シルト質細砂  
2 10YR5/2 灰青褐色 ブロック状堆土  
10YR5/6 黄褐色

120.0m



- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト質細砂  
2 10YR5/6 黄褐色 シルト質細砂ブロック状堆土  
3 10YR4/3 黄褐色  
4 10YR5/6 黄褐色
- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト質細砂  
2 10YR5/6 黄褐色  
3 10YR4/3 黄褐色  
4 10YR5/6 黄褐色
- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト質細砂  
2 10YR5/6 黄褐色  
3 10YR4/3 黄褐色  
4 10YR5/6 黄褐色

- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト質細砂  
2 10YR5/6 黄褐色  
3 10YR4/3 黄褐色  
4 10YR5/6 黄褐色
- 1 10YR2/2 黑褐色 中細砂混じりシルト  
2 10YR5/6 黄褐色  
3 10YR4/3 黄褐色  
4 10YR5/6 黄褐色



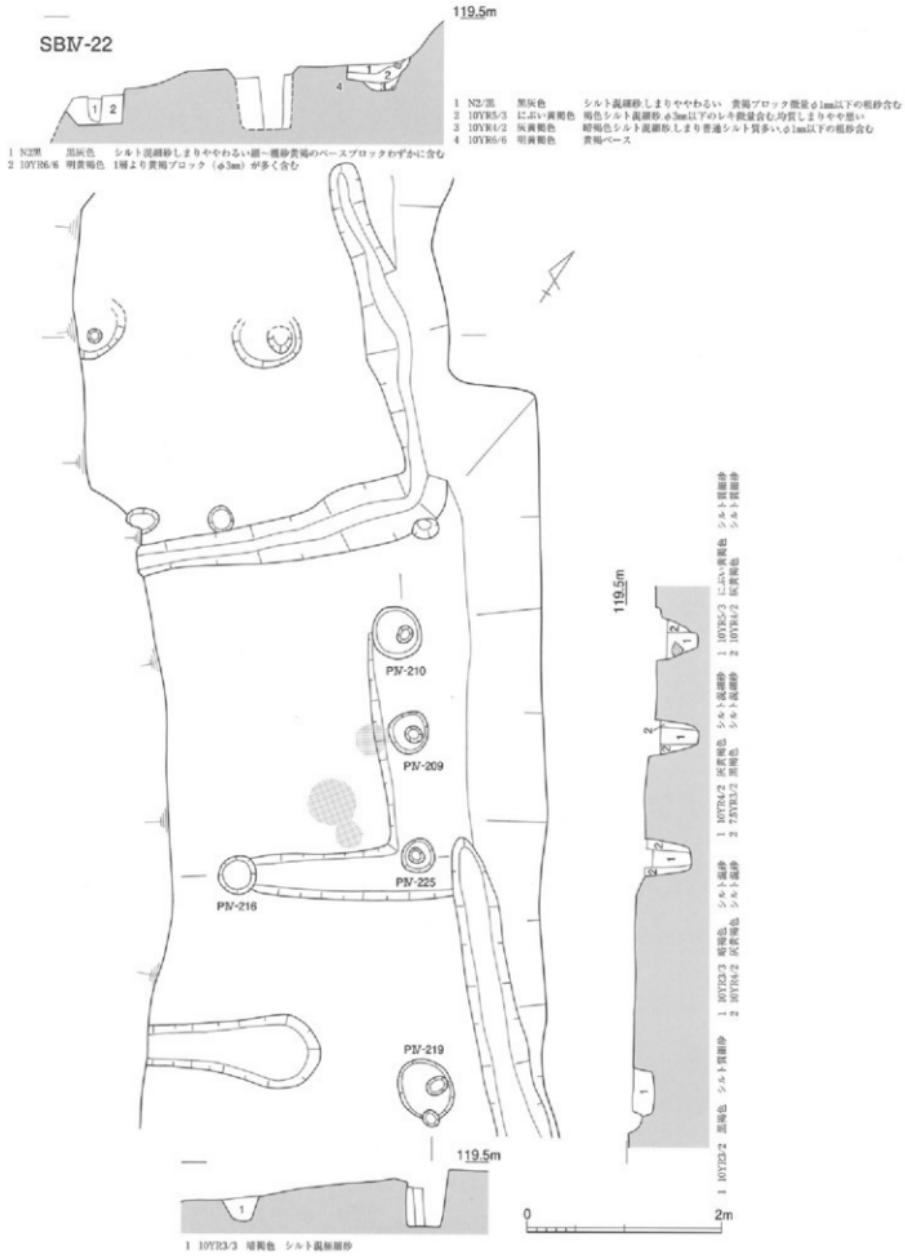
- 1 10YR5/2 黑褐色 粘土  
2 10YR5/6 明黄褐色 シルト質細砂ブロック状堆土  
10YR3/3 黄褐色  
3 10YR5/6 明黄褐色  
4 10YR5/3 黄褐色
- 1 10YR5/6 明黄褐色 シルト質細砂ブロック状堆土  
10YR3/3 黄褐色  
3 10YR5/6 明黄褐色  
4 10YR5/3 黄褐色
- 1 10YR2/1 黑褐色 中細砂混じりシルト  
2 75YR2/2 黑褐色 中細砂混じりシルト  
(施山黄土の小段多く含む)

0

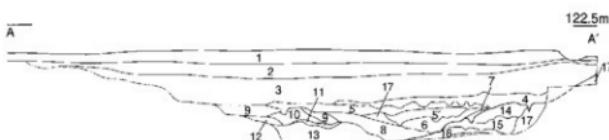
2m

図版28

下層遺構 SBIV-22



図版29  
V区の地形と基本土層図



- |                |   |                  |                          |
|----------------|---|------------------|--------------------------|
| 1 2SY5/3 黄褐色   | シルト混じり細粒粗砂～地盤がしまりわるい耕作土                 | 11 2SY5/1 黒色     | 3層と同じ                    |
| 2 3Y4/1 灰色     | シルト混じり細粒粗砂～變種砂～しまりよい1cm以下               | 12 2SY5/1 黒色     | 3層と似状線の入り方が多い            |
| 3 K4/          | シルト混じり細粒粗砂～しまりよい1cm以下のレキ含む              | 13 10YR5/1 暗灰色   | 10層と11層と同じ質様             |
| 4 3Y3/1 灰色     | マングンが全般的に少し含まれる（3層との差）                  | 14 5G7/1 オリーブ灰色  | シルトしまりふつう半て短柱色シルトブロック混じる |
| 5 K2/          | シルト混じり細粒粗砂～しまりよい2層と同質マングン含まず            | 15 3GY7/1 オリーブ灰色 | シルト層と砂層のシルトブロック混じる       |
| 6 K2/          | 混じり、しまりやわらか～柔軟～よくひきずり、下部は黄色粗砂           | 16 2SY6/1 变质色    | 粗砂・0.5cm以上のレキ含む          |
| 7 K2/          | シルト混じり細粒粗砂～しまりやわらか～柔軟～よくひきずり            | 17 N3/           | 無色                       |
| 8 2SY7/2 黑色    | シルト混じり、しまりやわらか～柔軟～よくひきずり、下部は砂質シルトの無いシルト |                  | 砂質シルト・均質・0.5cm以上の塊砂      |
| 9 2SY2/1 黑色    | シルト混じり、しまりやわらか～柔軟～よくひきずり                |                  | *4層から13層は連続包含層           |
| 10 10YR5/1 暗灰色 | 地盤～しまりよい、クヌガ貝られない灰褐色シルト若干含む             |                  |                          |

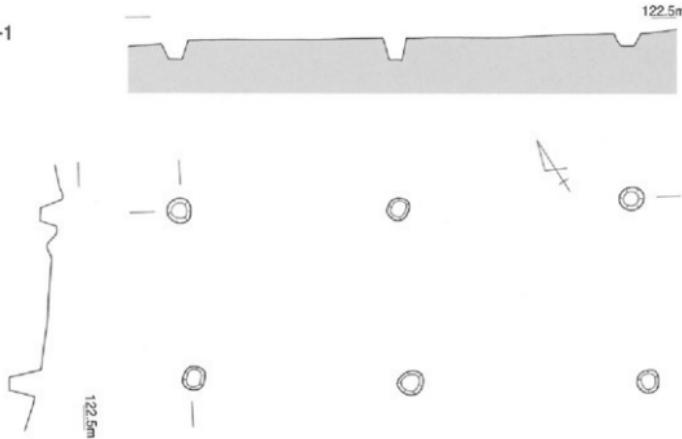
0 5m

図版30

V区遺構配置図



SBV-1



SBV-5



○

○

○

○

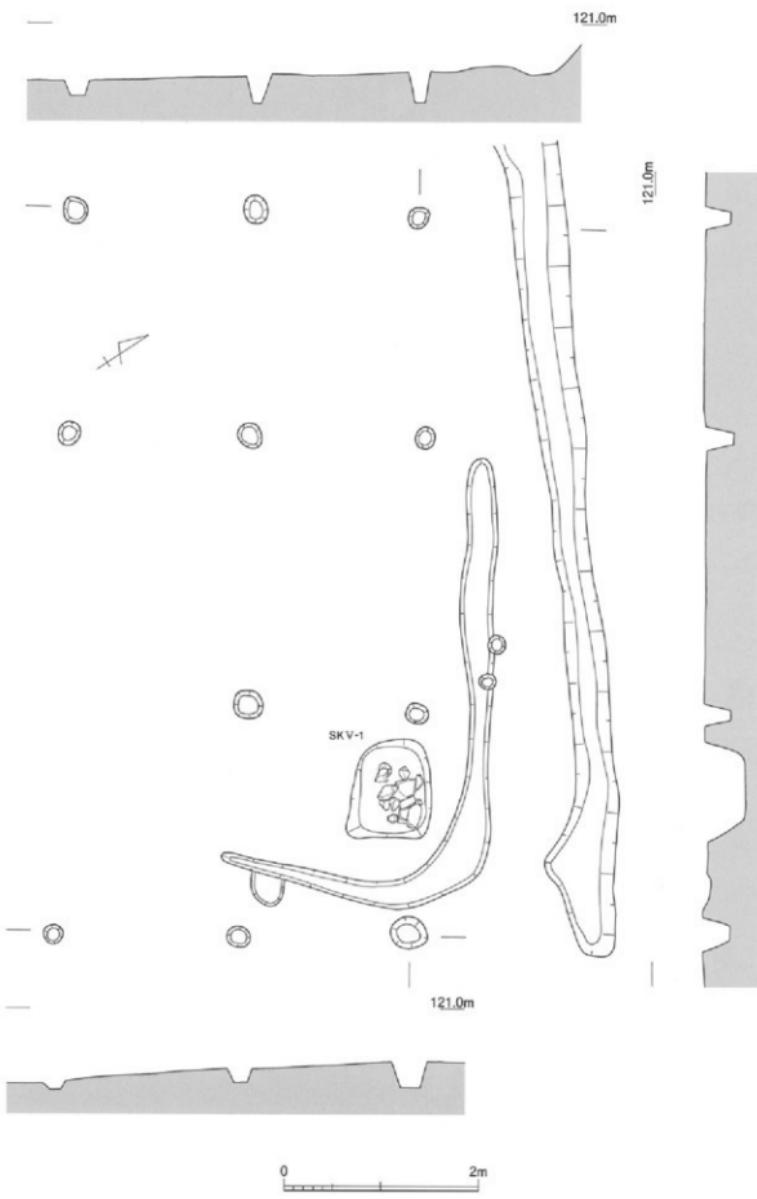


0 2m

図版32

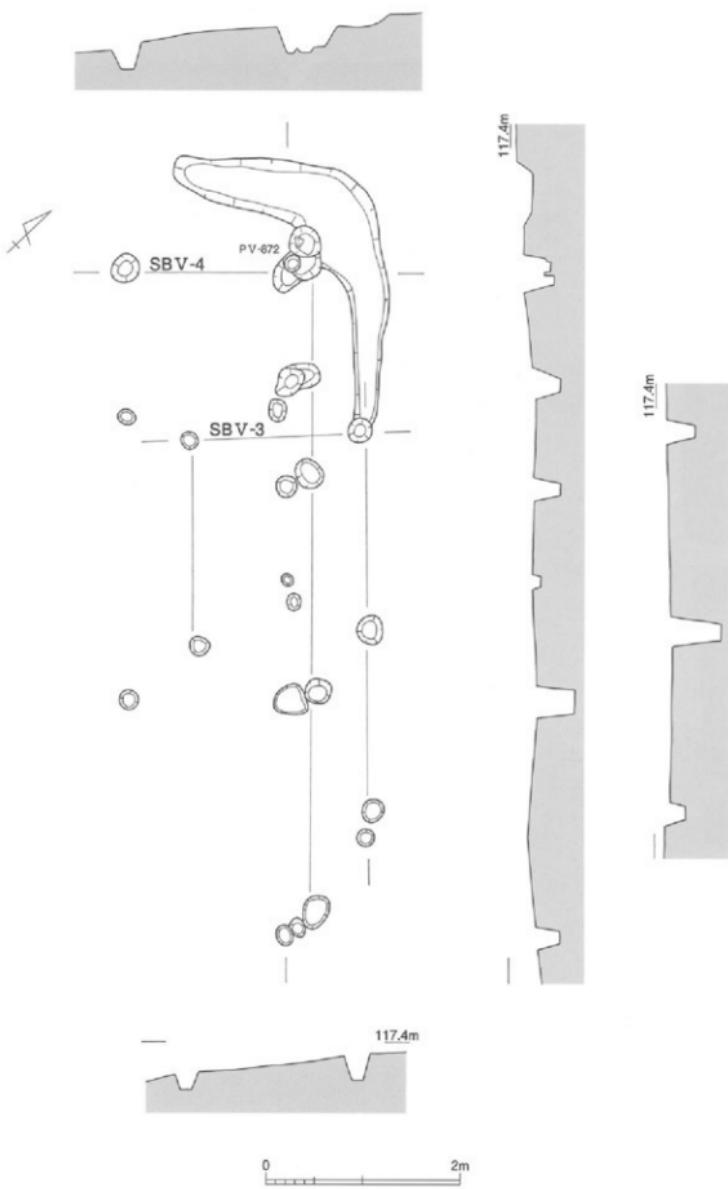
掘立柱建物 SBV-2

SBV-2



SBV-3・4

117.4m



図版34

掘立柱建物 SBV-6

SBV-6



掘立柱建物 SBV-21

SBV-21

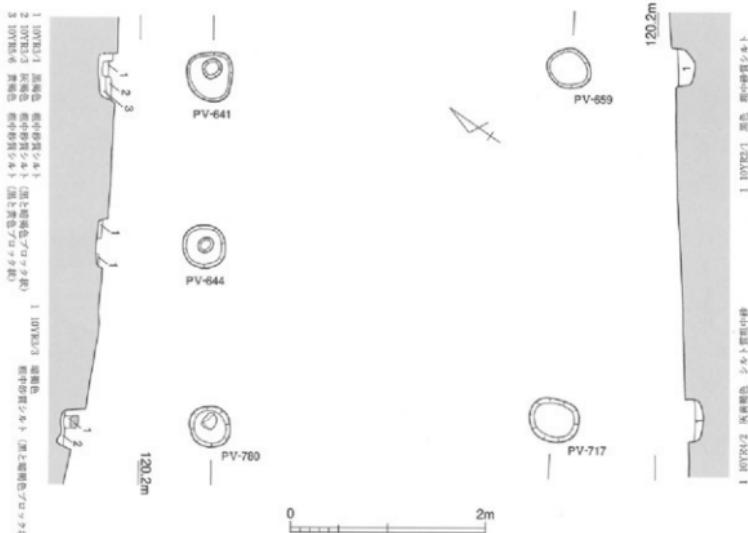
120.3π



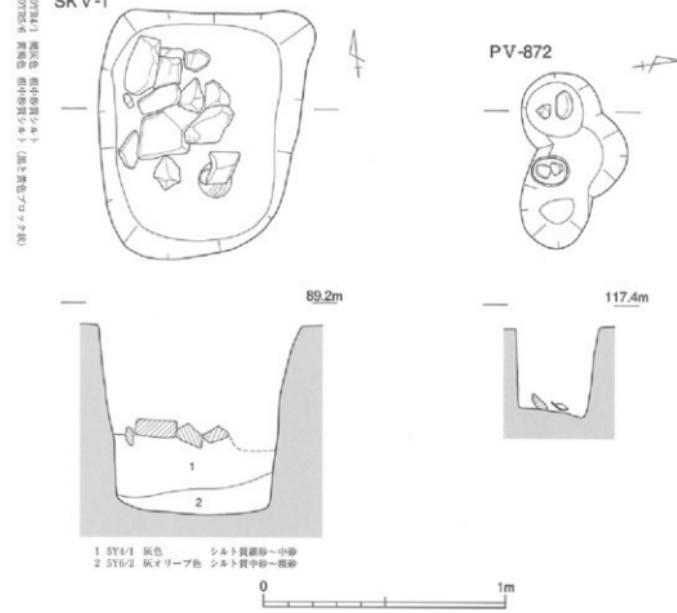
図版36

掘立柱建物 SBV-22・土坑・柱穴

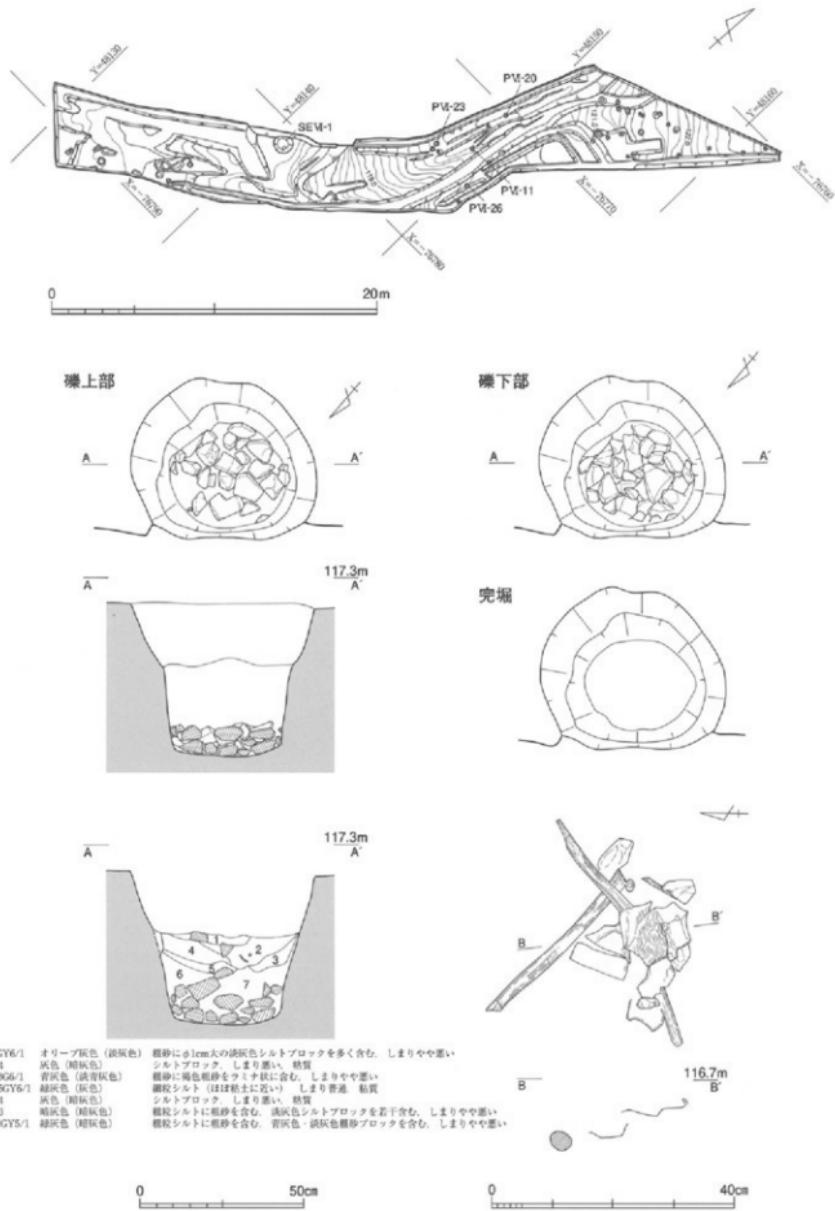
SBV-22



SKV-1

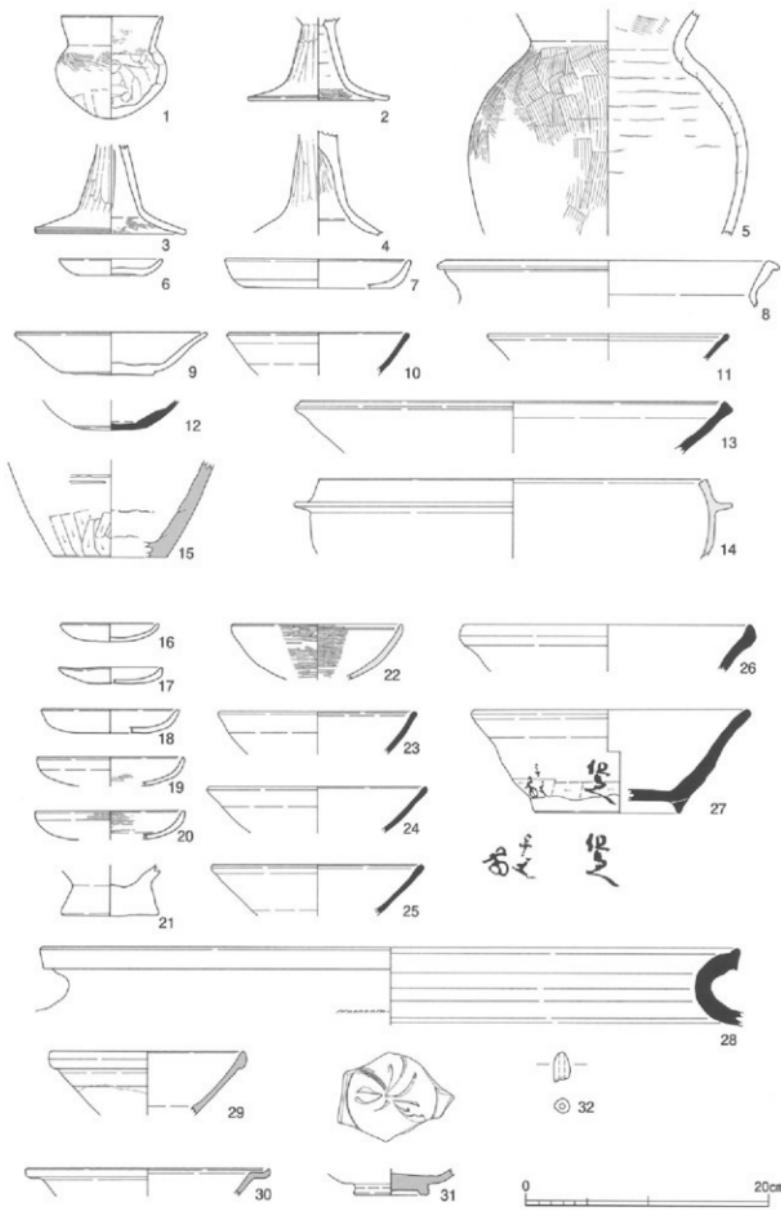


## VI区遺構配置図と井戸 SEVI-1

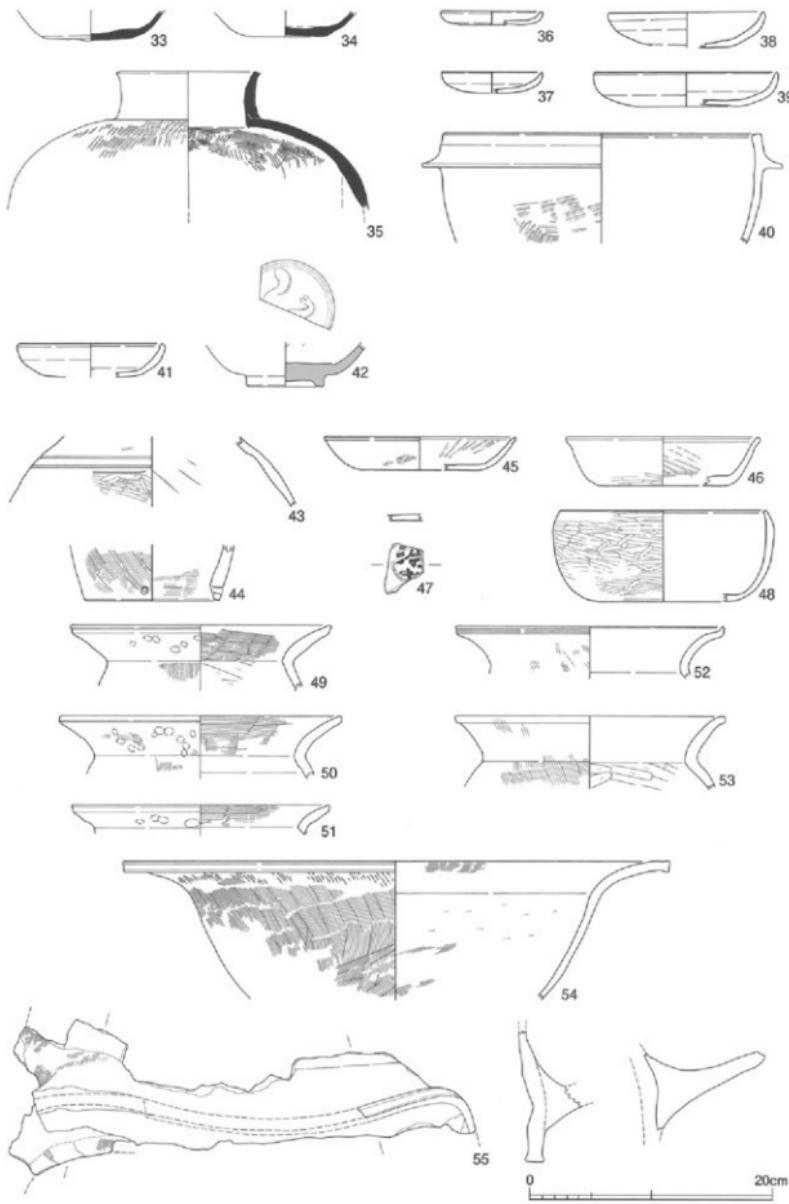


## 図版38

## 出土土器 1 (I 区)

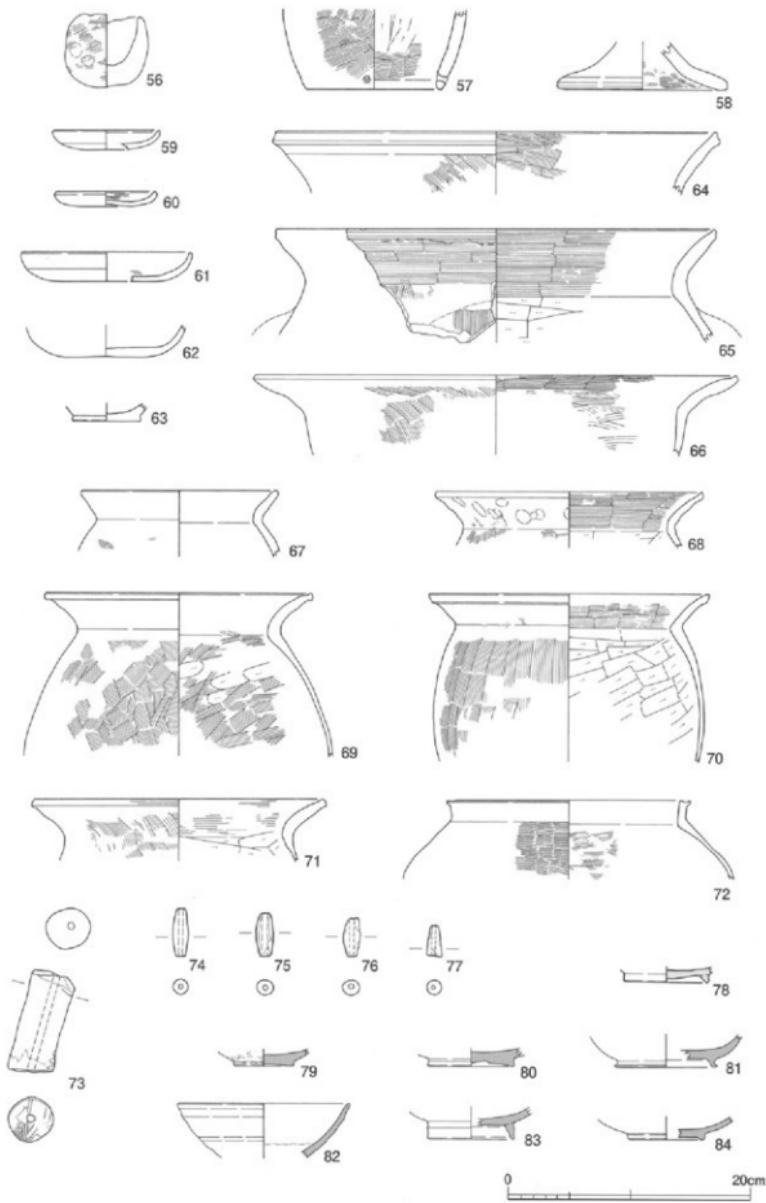


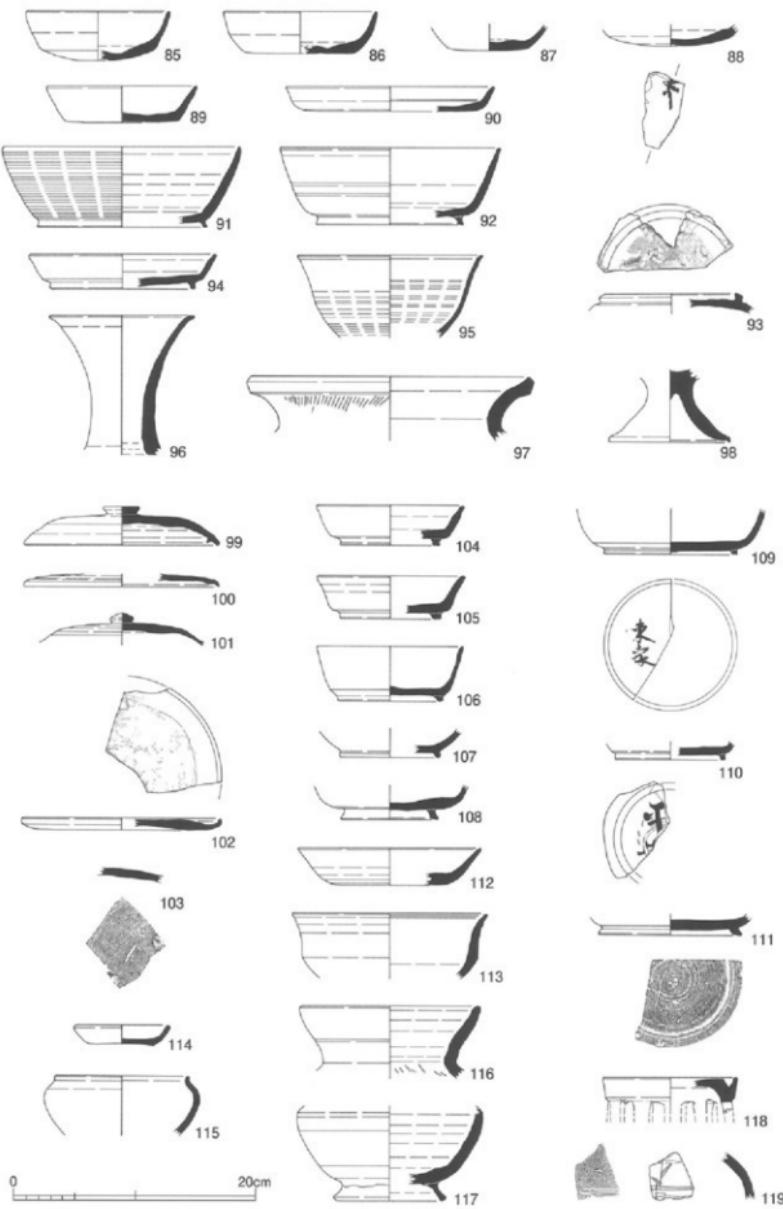
図版39  
出土土器2(I・II区)



図版40

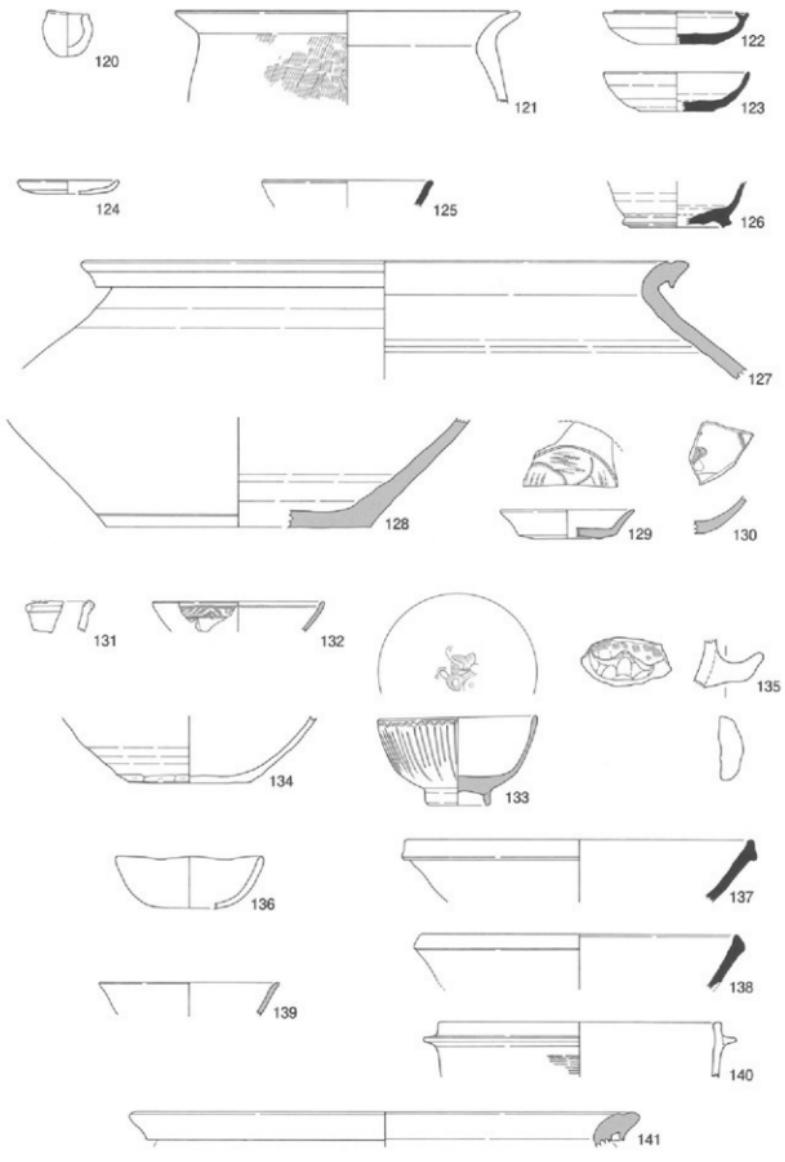
出土土器3(Ⅱ区)



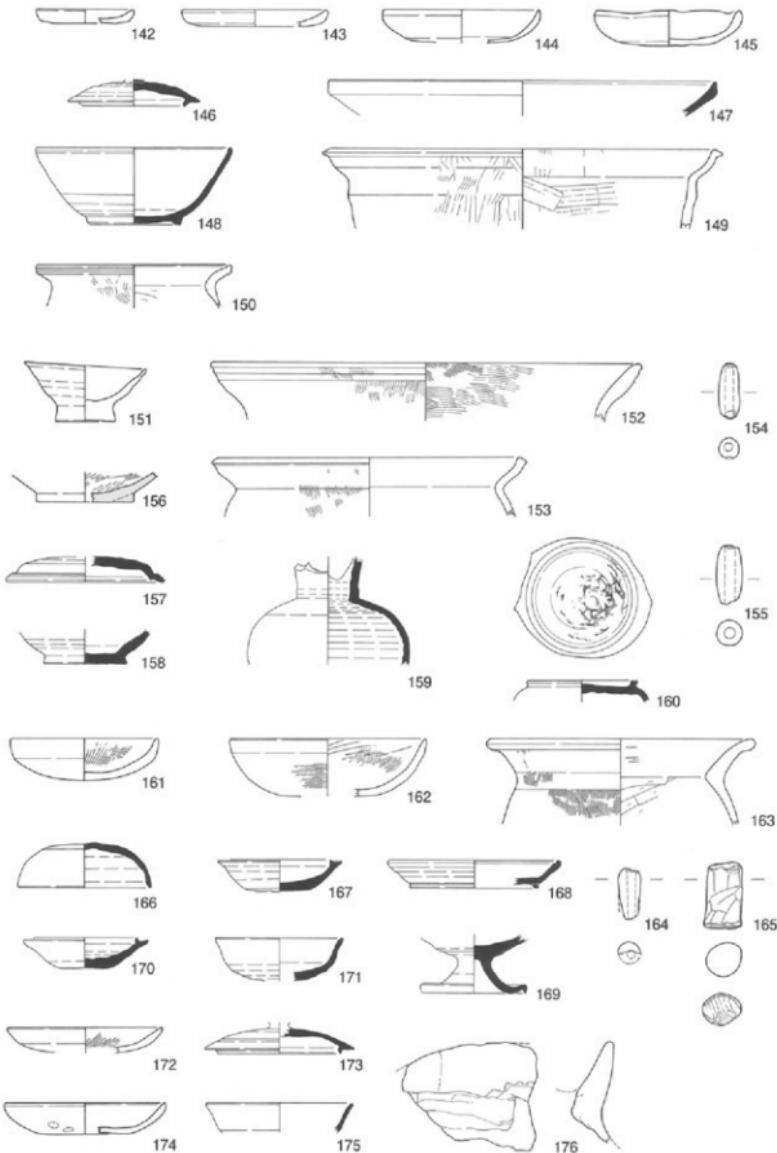


## 図版42

## 出土土器 5 (Ⅲ区)



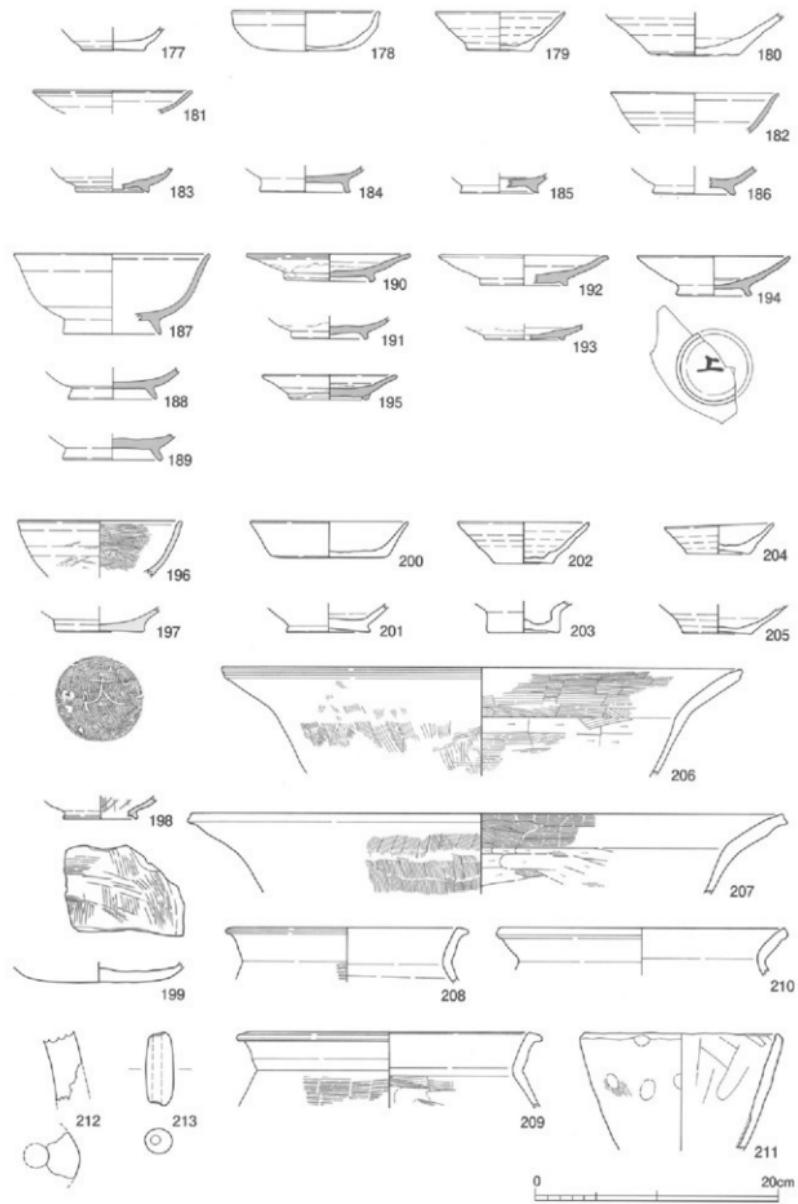
0 20cm



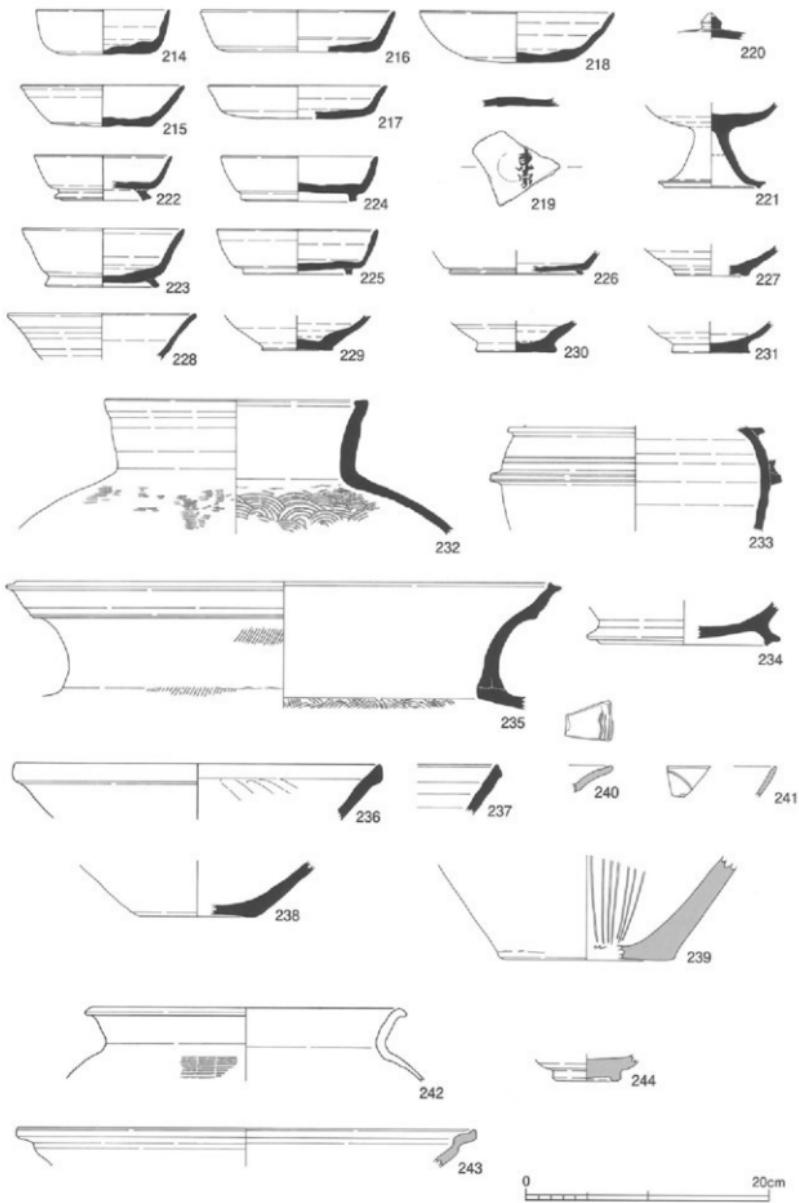
0 20cm

## 図版44

## 出土土器 7 (V区)



図版45  
出土土器8(V・VI区)



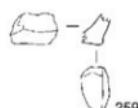
図版46  
出土埴輪



245



258



259



257



246



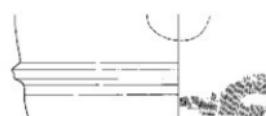
256



247



254



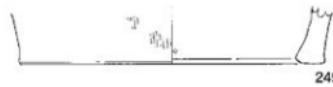
248



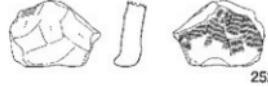
255



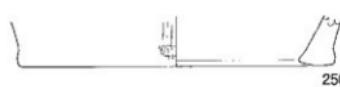
253



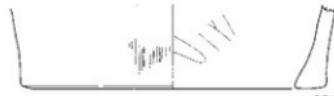
249



252



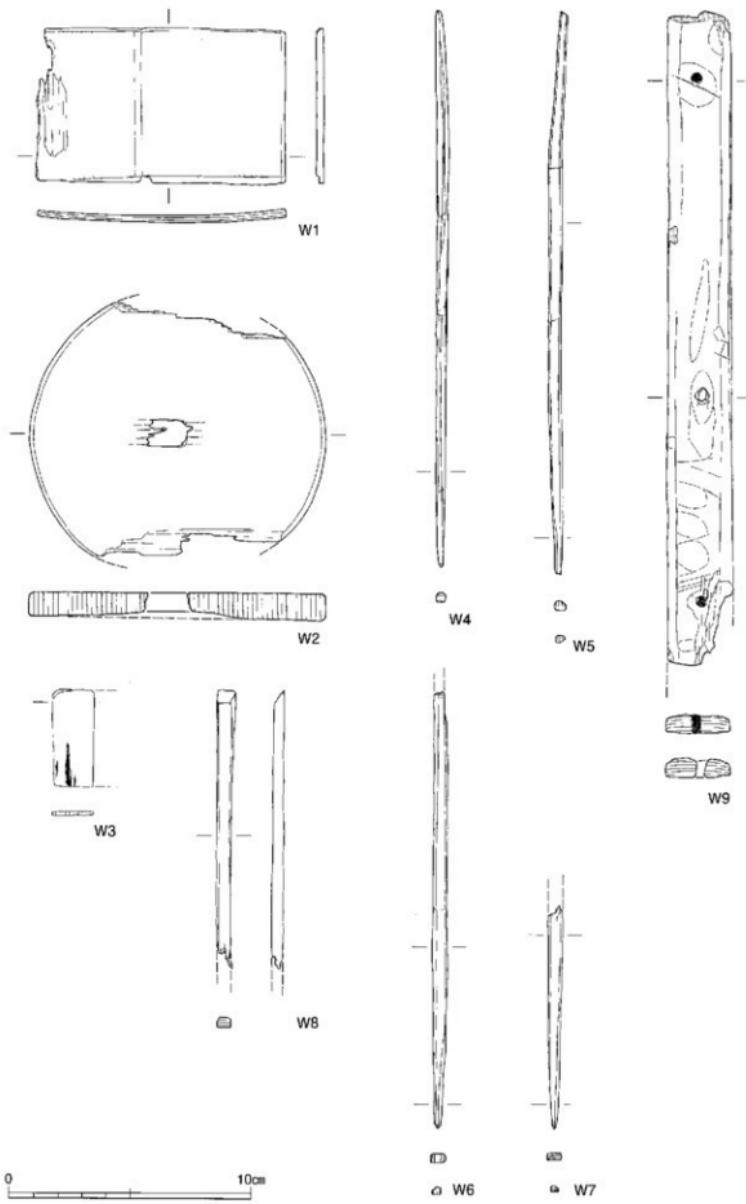
250



251

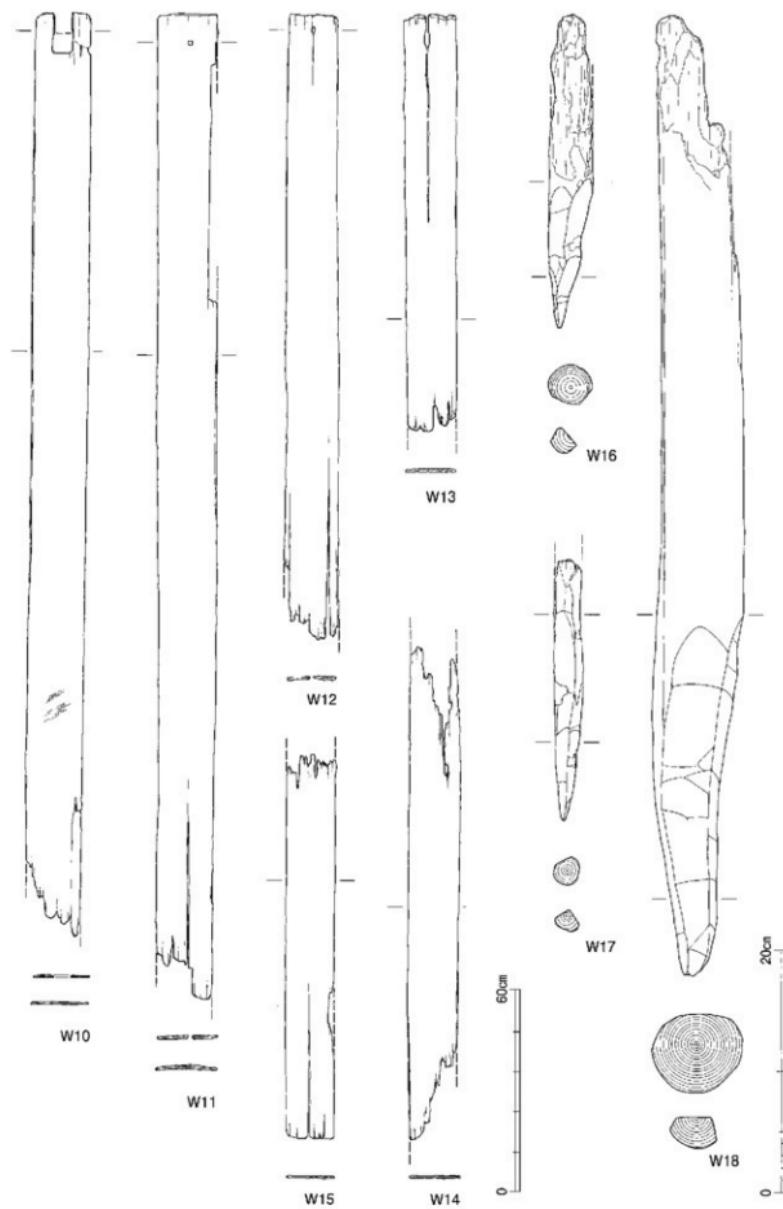
0 20cm

図版47  
出土木器(I区)



図版48

出土木器(I区)

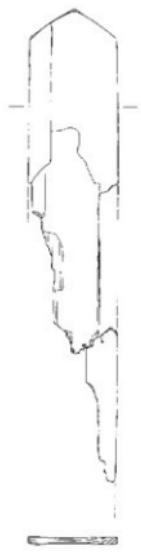




W19



W20



W21



W22



W24



W23



W25

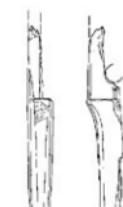


W26

0 10cm

図版50

出土木器(Ⅱ区)



W27



W28



W29



W30



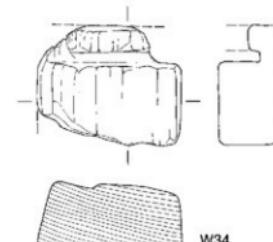
W31



W32

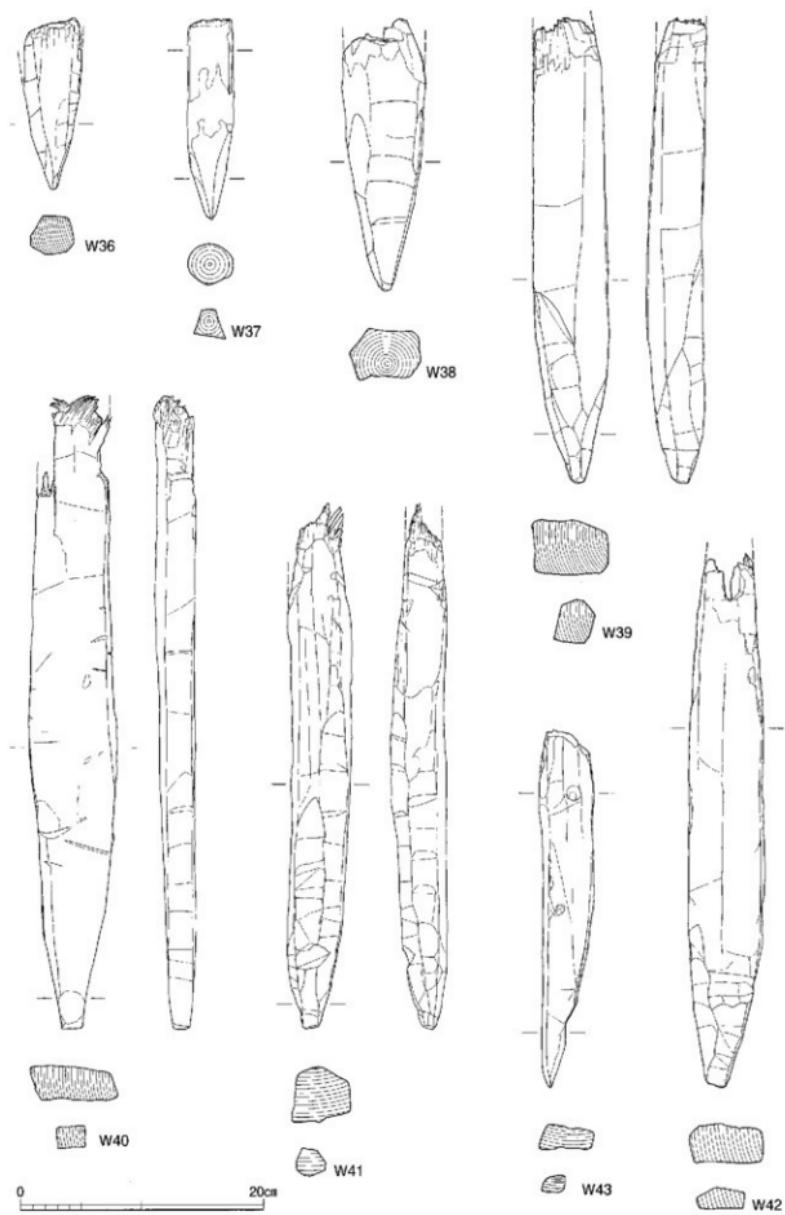


W35



W33

0 10cm

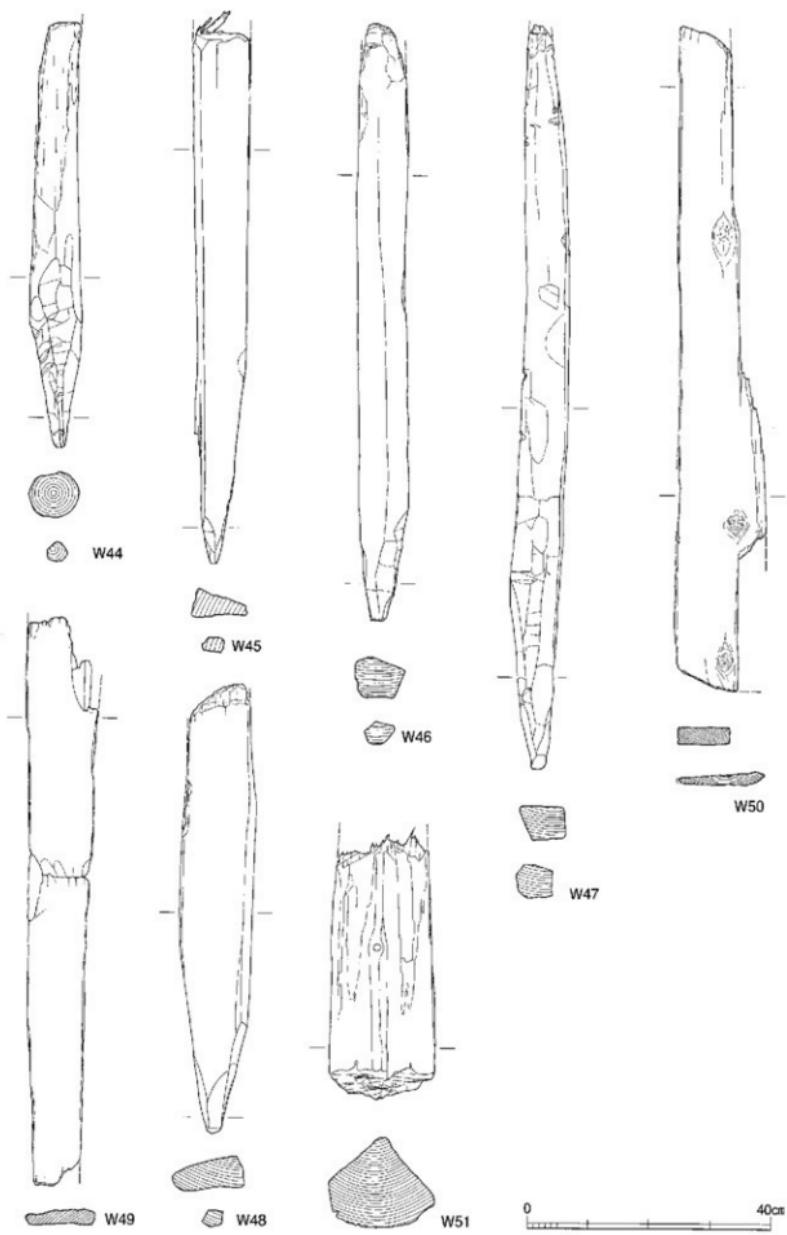


0

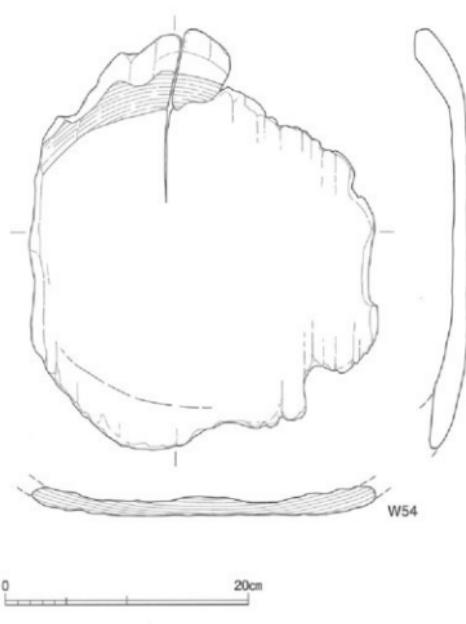
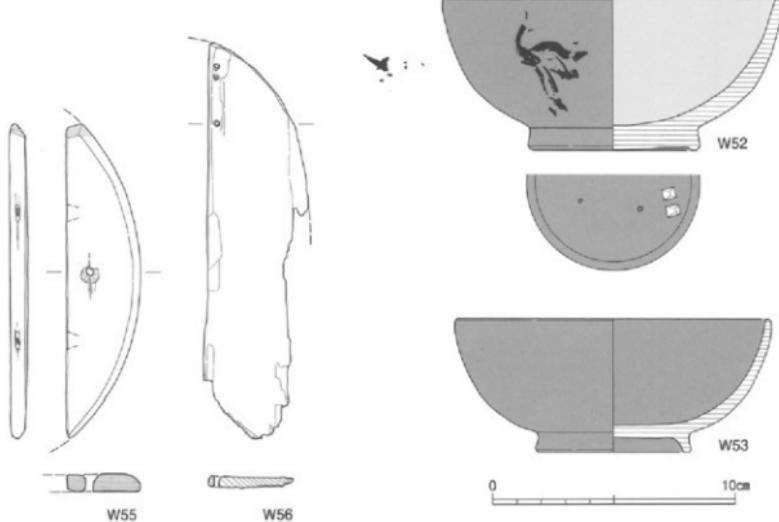
20cm

図版52

出土木器(Ⅱ区)

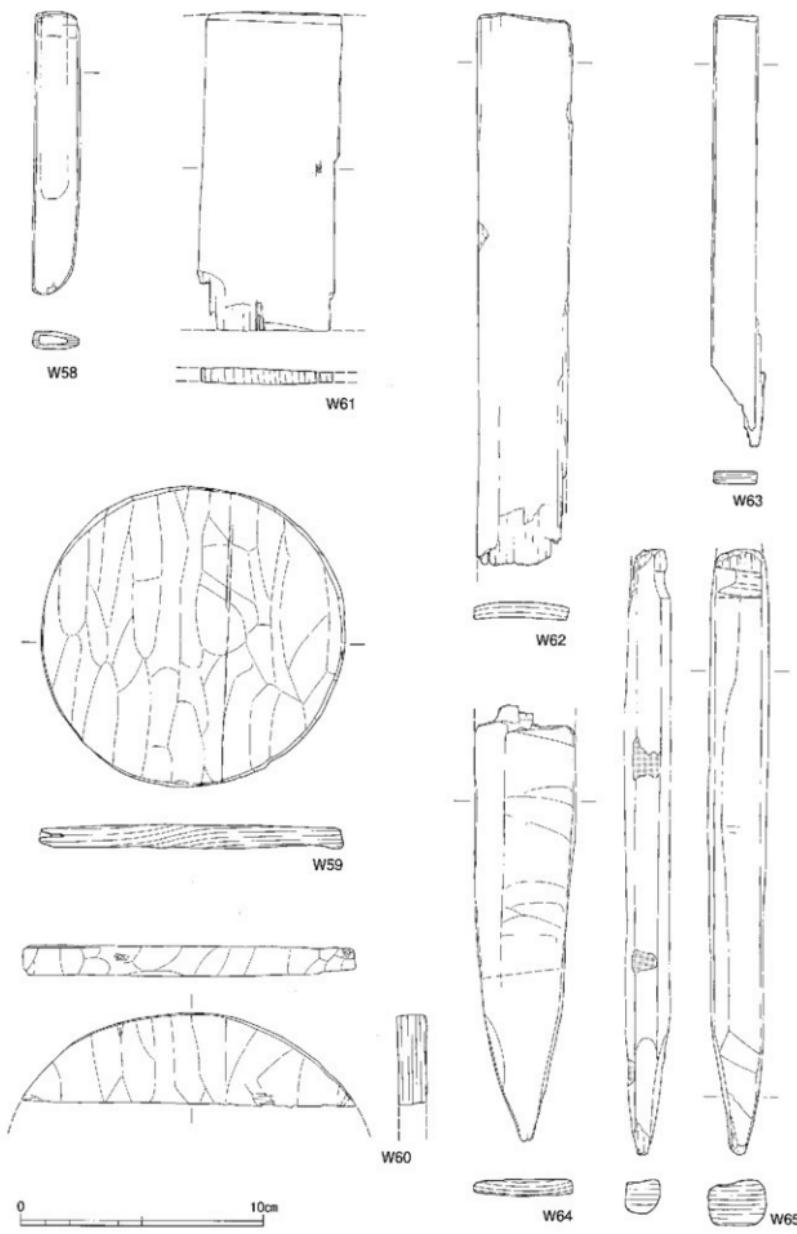


図版53  
出土木器(Ⅲ区)

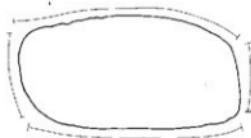
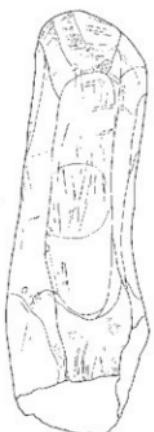
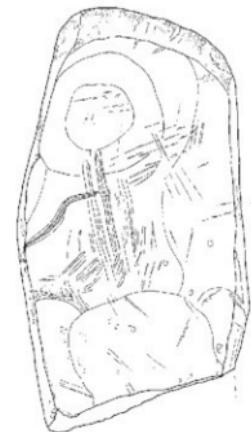


図版54

出土木器(V区)



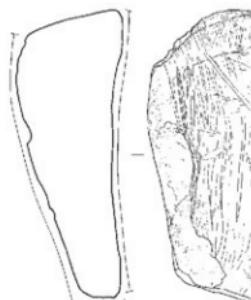
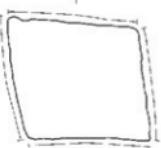
図版55  
出土石器(I・II・III区)



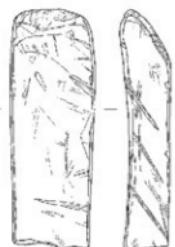
S1



S3



S2

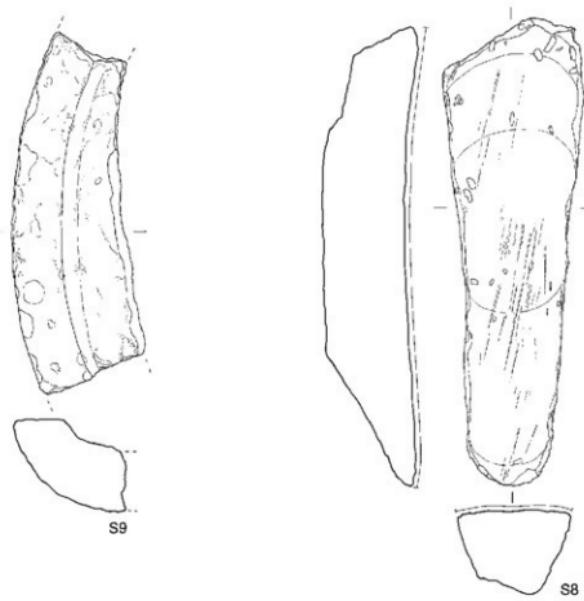
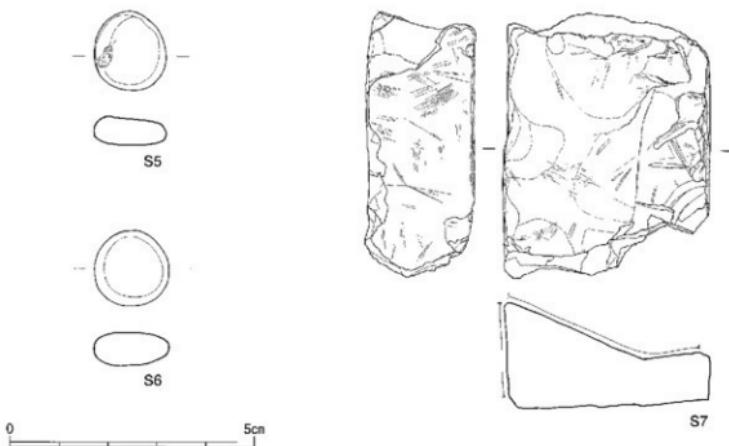


S4

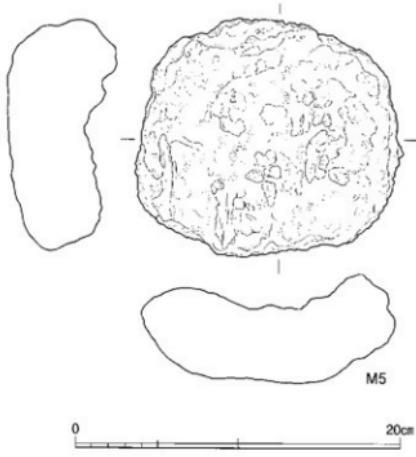
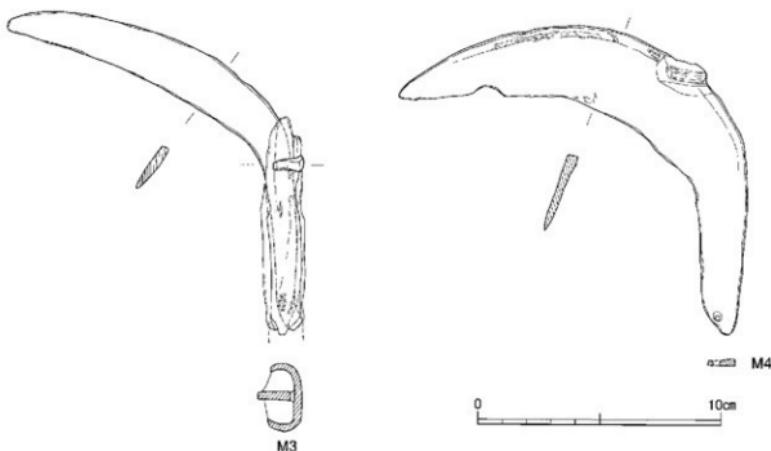
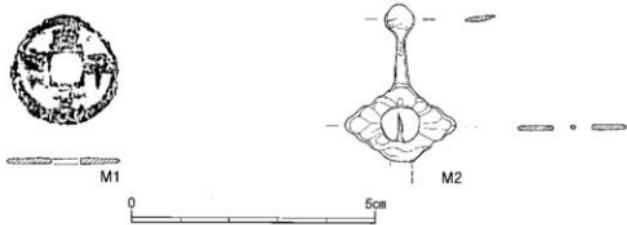
0 10cm

図版56

出土石器(N・VI区)



図版57  
出土金属器



# 写真図版

写真図版 1  
遠景



遠景（西から栗鹿山を望む）



遠景（東から）

## 写真図版2

### 遠景



遠景（南から）



遠景（東から遠阪峰を望む）

写真図版3  
全景



全景

写真図版4  
全景



I・II・III区全景



I区全景



I 区全景（東から）



I 区全景（西から）

## 写真図版6

I 区



溝SD I-1(南から)



溝SD I-1(南から)



溝SD I-1(北から)



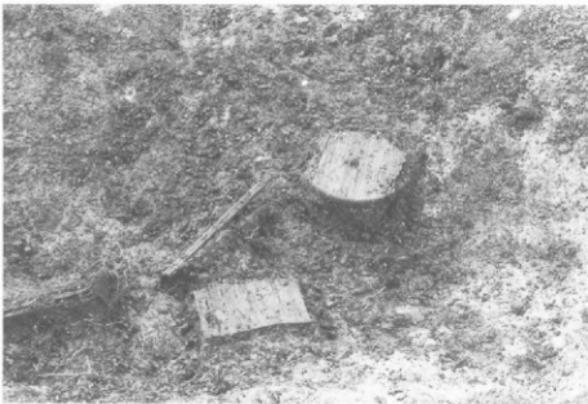
溝SD I-1(北から)



溝SD I - 1堆積状況(南から)



溝SD I - 1木製品出土状況



溝SD I - 1木製品出土状況

写真図版8

I 区



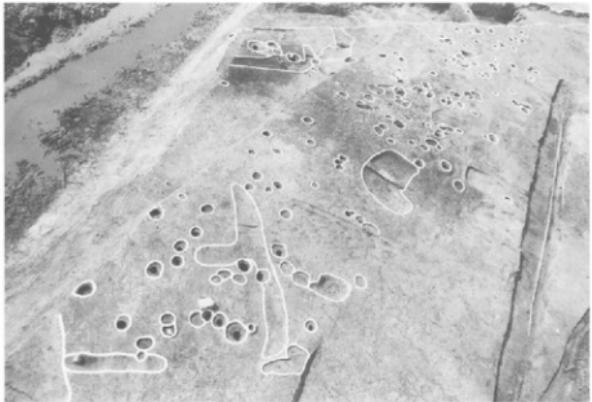
掘立柱建物SB I -1(北から)



掘立柱建物SB I -2・I -3(南から)



掘立柱建物SB I -2・I -3(西から)



写真図版10

I 区



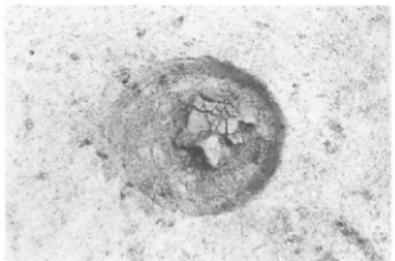
掘立柱建物SB I -6・I -7(西から)



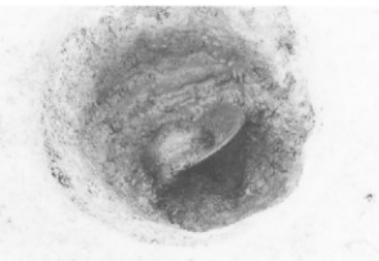
掘立柱建物SB I -6・I -7(北から)



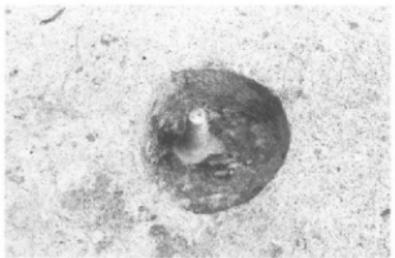
I 区東半部(西から)



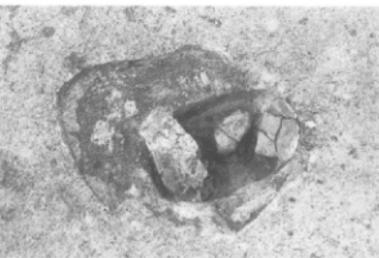
柱穴P1002上面



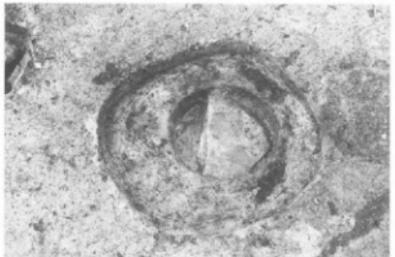
P1002土師器出土状況



柱穴P1003土師器出土状況



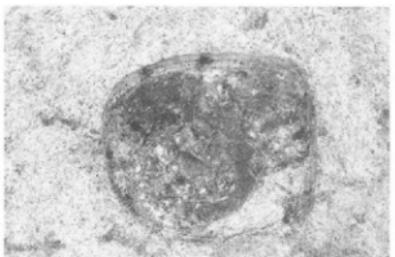
P1045



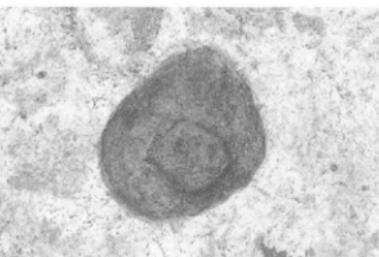
柱穴P1046



P1015鉄滓出土状況



柱穴P1055鉄滓出土状況



P1047梳形鉄滓出土状況

写真図版12

Ⅱ区



Ⅱ区全景



Ⅱ区全景(東から)



流路土層断面(西から)



作業状況(東から)



上層杭列



上層杭列



上層杭列断ち割り状況



流路内土器出土状況



流路内土器出土状況

写真図版14

Ⅲ区全景



Ⅲ区全景



Ⅲ区全景（西から）



Ⅲ区全景（東から）

写真図版16

Ⅲ区



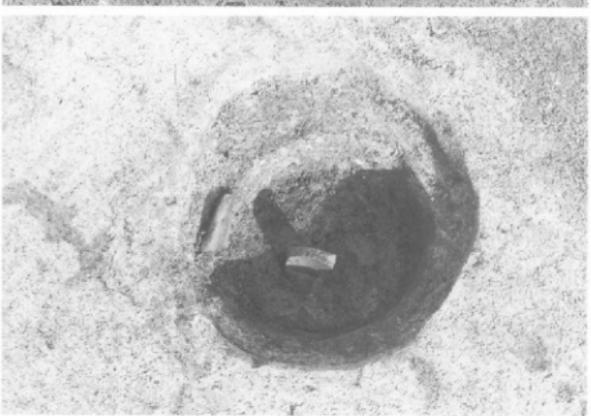
掘立柱建物SB III-1・III-2・  
III-3・III-4(北から)



掘立柱建物SB III-4・III-5(南から)



掘立柱建物SB III-4・III-5(東から)



写真図版18

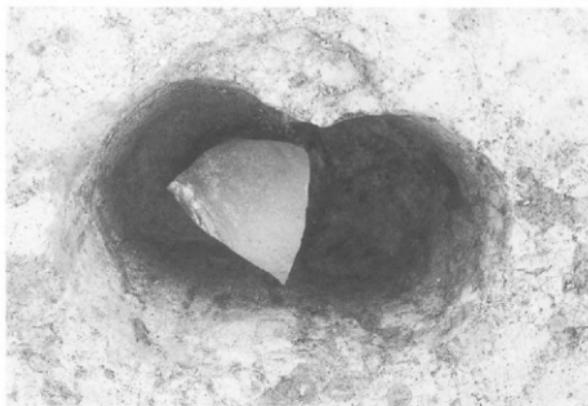
Ⅲ区



掘立柱建物SBⅢ-2(東から)



SBⅢ-2 P14常滑出土状況



SBⅢ-2 P24常滑出土状況



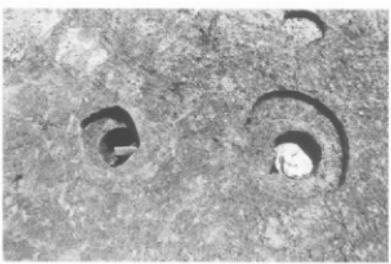
掘立柱建物SBⅢ-3~9(北から)



掘立柱建物SBⅢ-5~8(南西から)



掘立柱建物SBⅢ-5~9(南東から)



SBⅢ-8 P73·74(北西から)



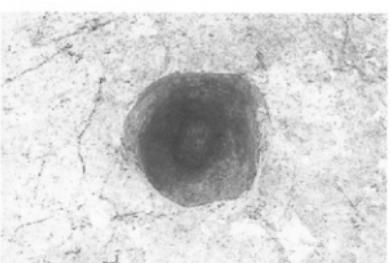
SBⅢ-8 P73



SBⅢ-8 P74



SBⅢ-8 P190



SBⅢ-7 P75

写真図版20

Ⅲ区



井戸SKⅢ-1(西から)



井戸SKⅢ-1(北から)



井戸SKⅢ-1土層断面(南から)



井戸SKⅢ-1土層断面(北から)



SKⅢ-1出土漆器

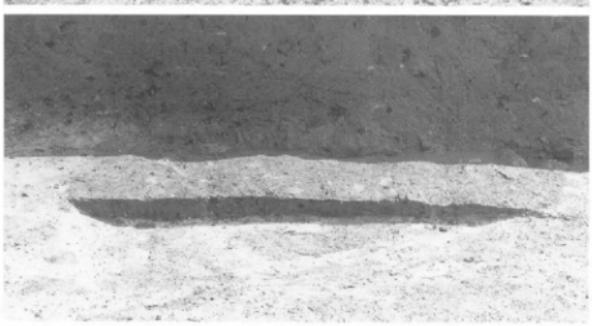
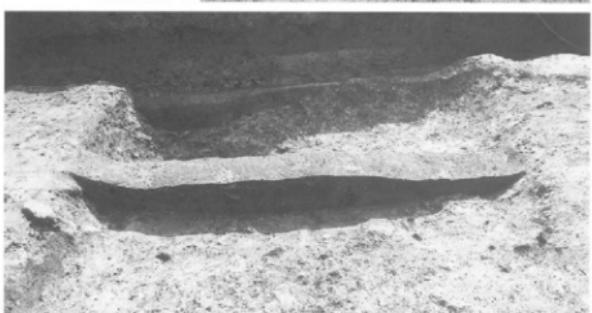


SKⅢ-1出土漆器

写真図版22

Ⅲ区





写真図版24

Ⅲ区



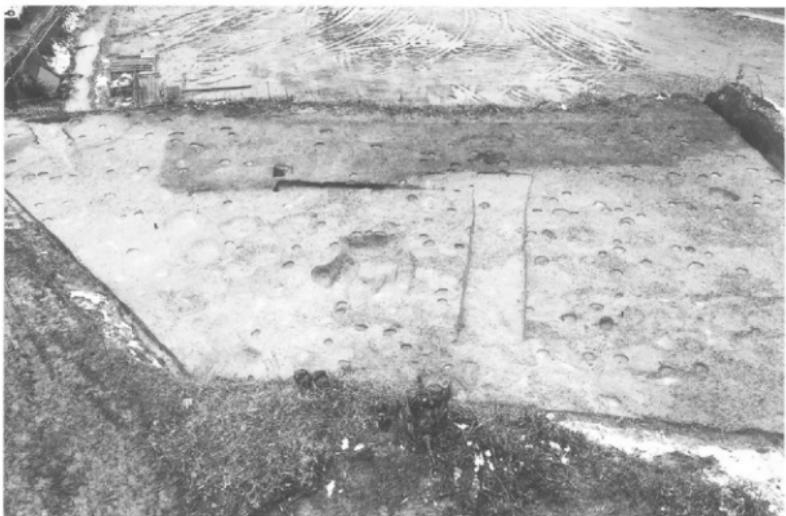
溝SD III-1(南東から)



溝SD III-2(南から)



Ⅲ区北端の落ち込み(南から)



IV区上層全景（北東から）



IV区上層全景（南東から）

写真図版26

IV区



掘立柱建物SBIV-1(東から)



掘立柱建物SBIV-2(南から)



SBN-1 P20土層断面



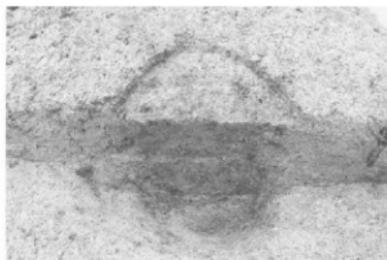
SBN-1 P26土層断面



SBN-1 P27土層断面



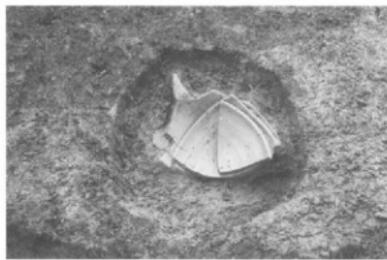
SBN-1 P31土層断面



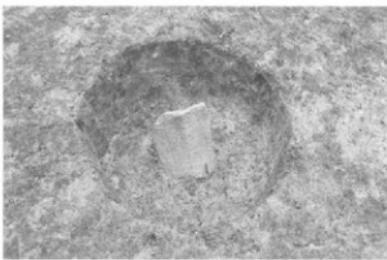
SBN-1 P32土層断面



SBN-1 P24土器出土状況



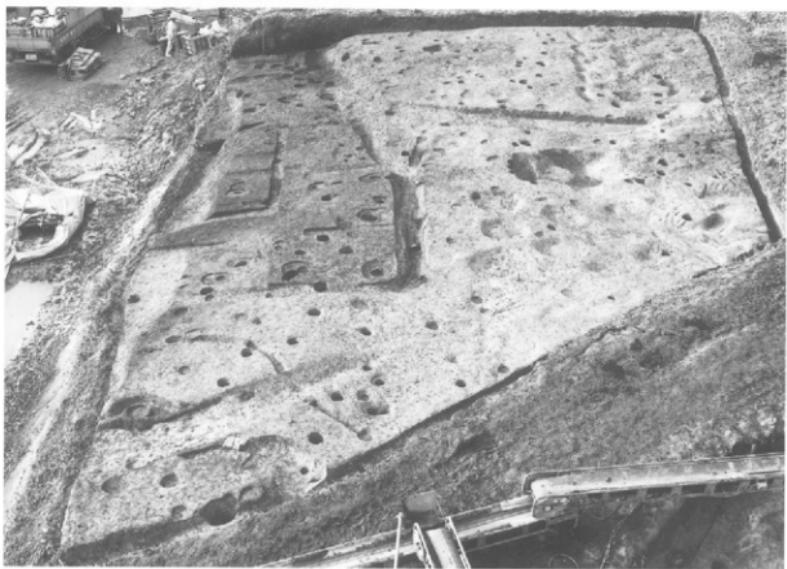
SBN-1内P101土器出土状況



SBN-2内P124土器出土状況

写真図版28

IV区



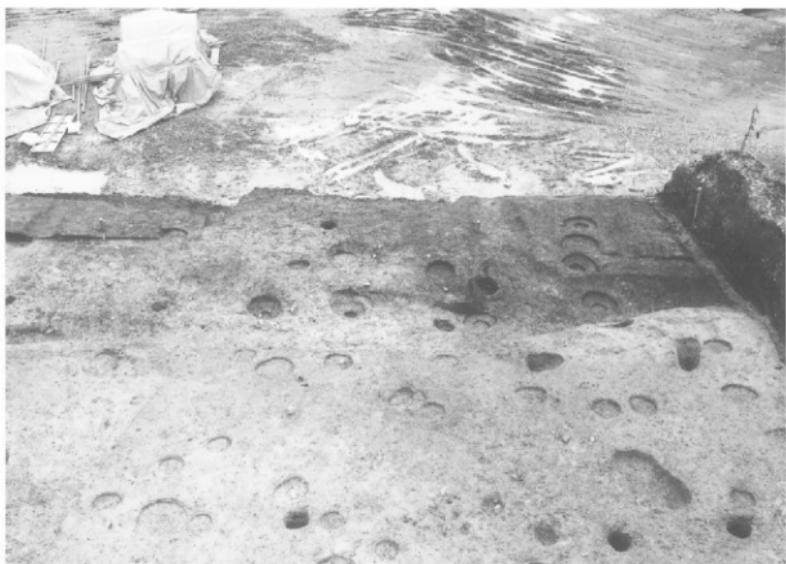
下層全景（南から）



SBI-21・IV-22(南から)



SBM-21(東から)



SBM-22(東から)

写真図版30

IV区



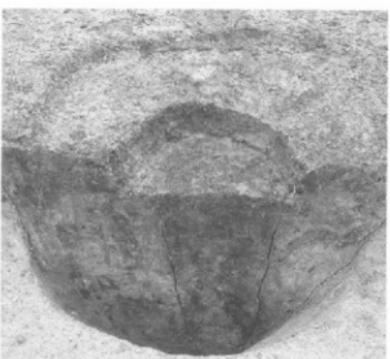
IV区下層北壁(南から)



SD201遺物出土状況(北から)



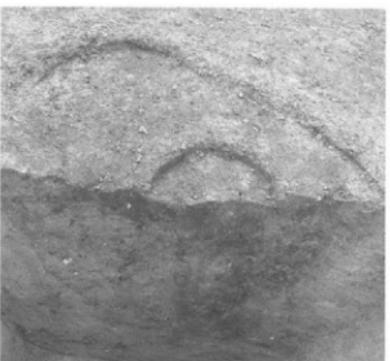
SBIV-21 P203土層断面(南から)



SBIV-21 P222土層断面(東から)



SBIV-21 P202土層断面(東から)



SBIV-21 P223土層断面(東から)



V区全景（西から）



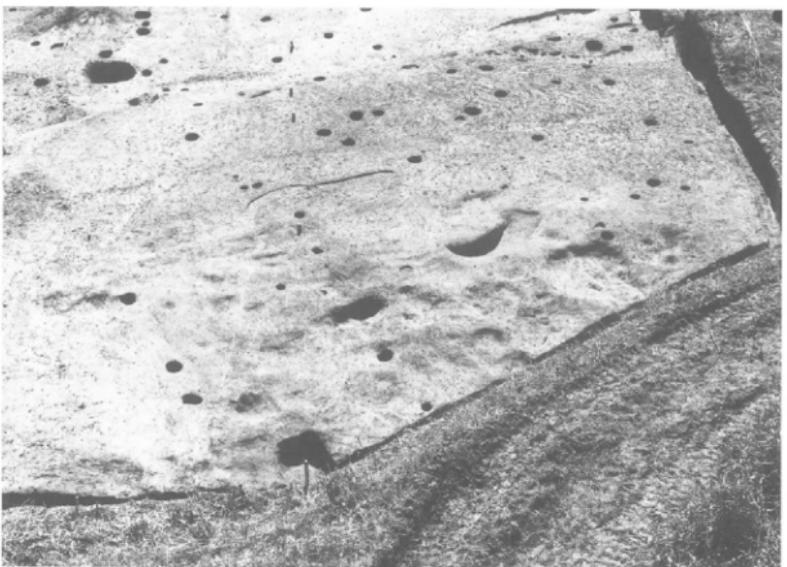
V区全景（北から）

写真図版32

V区



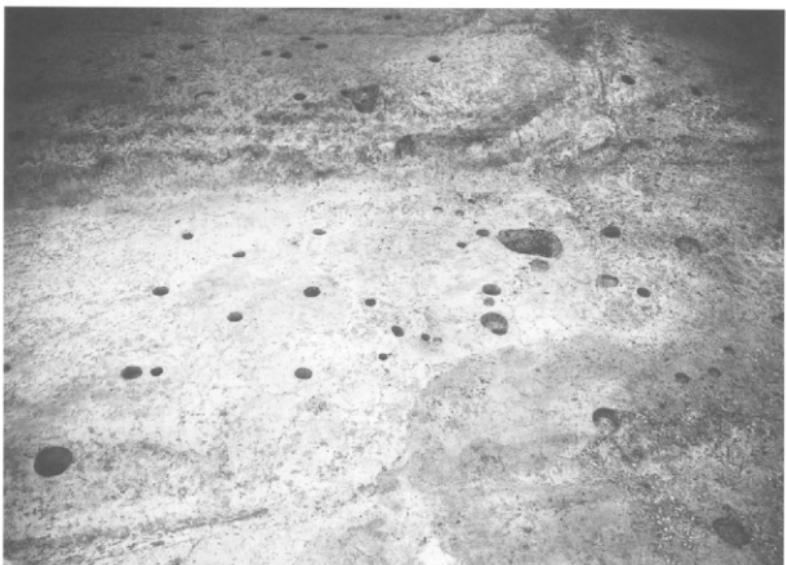
V区西半部（北から）



SB V-1・V-5（北から）



SBV-3・V-4 (北から)



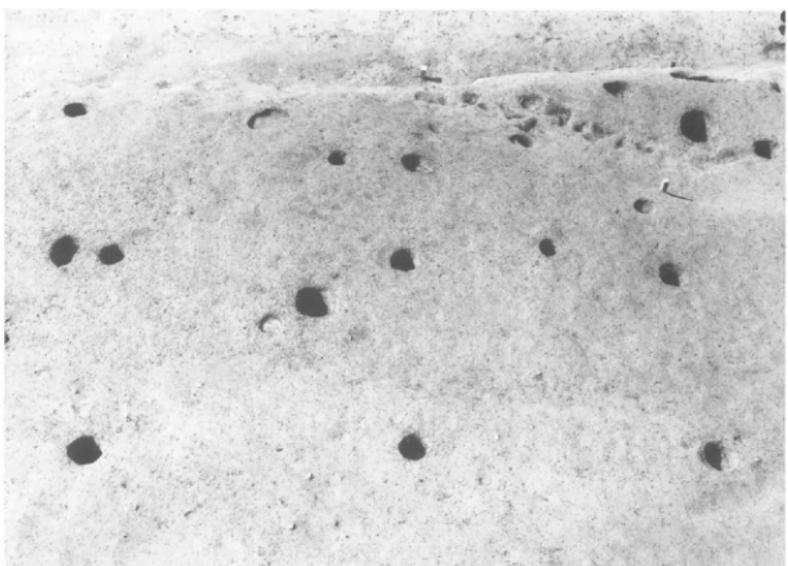
SBV-2 (南から)

写真図版34

V区



SBV-5 (西から)



SBV-1 (北から)



SKV-1 土層断面 (北西から)



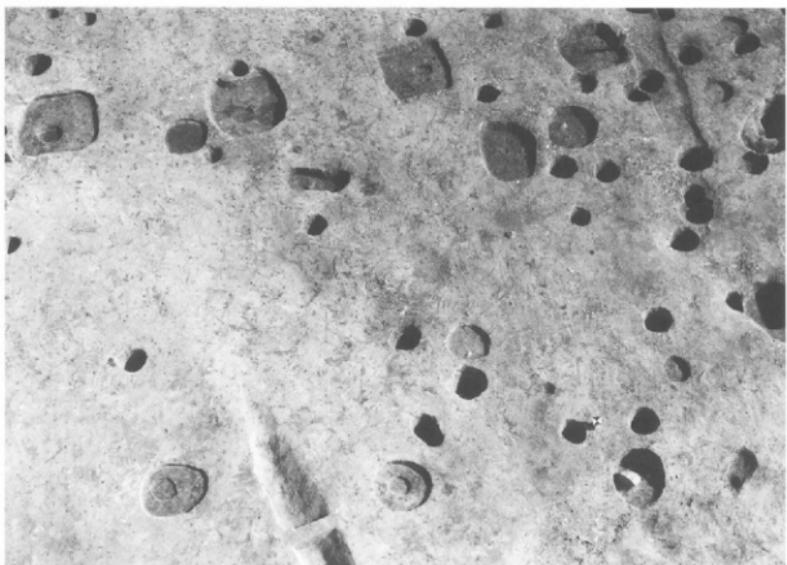
SKV-1 石検出状況 (北西から)



SKV-1 完掘状況 (北西から)

写真図版36

V区



SBV-22 (北西から)



SBV-21 (北西から)



SBV-21 P691土層断面（北東から）



SBV-21 P807土層断面（北東から）



SBV-21 P808土層断面（北東から）



SBV-21 P809土層断面（北東から）



V区谷部土層断面（南西から）



V区谷部掘削状況（西から）

写真図版38

VI区



VI区全景(北東から)



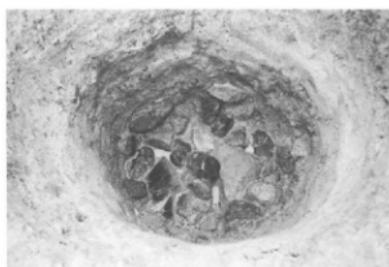
VI区全景(南西から)



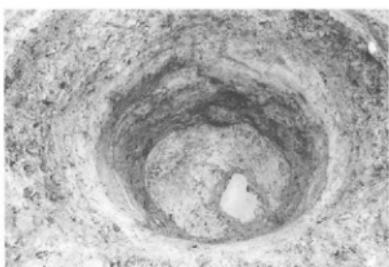
VI区北東部柱穴群(北西から)



井戸SE VI-1遺物検出状況(北西から)



井戸SE VI-1底部発掘状況(北西から)



井戸SE VI-1完掘状況(北西から)

写真図版39  
I 区出土土器 1



1



2



3



4



5



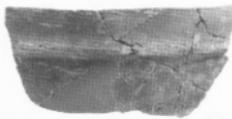
6



9



8



14



7

写真図版40

I 区出土土器2



16



17



10



13



18



12



19



21



20



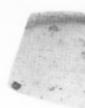
22



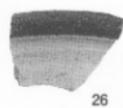
23



24



25



26



28



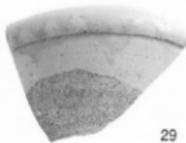
27



27



30



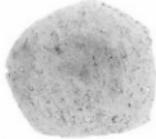
29



31



300



34



33



35

写真図版42

I 区出土土器他 4



36



37



38



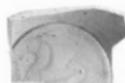
39



40



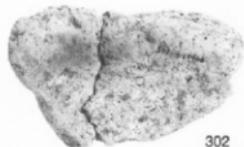
41



42



301



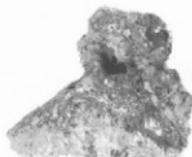
302



303



304



305



306

写真図版43  
II 区出土土器 1



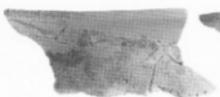
43

51

49



52



53



50



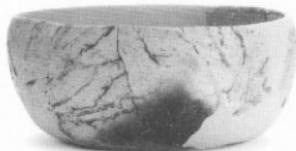
46



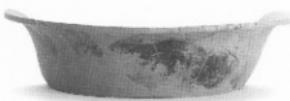
45



47



48



54



55

写真図版44

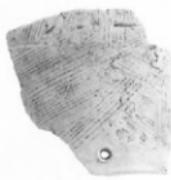
II区出土土器 2



56



44



57



58



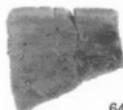
59



60



61



64



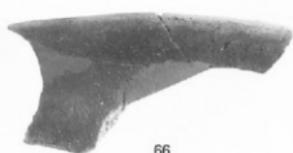
71



65



67



66



72

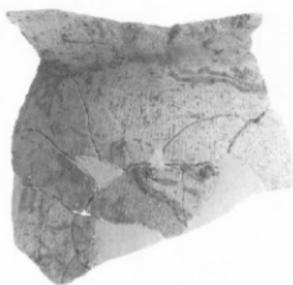
写真図版45  
II区出土土器他3



68



69



70



73



74



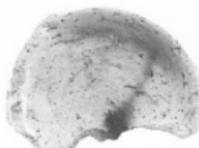
75



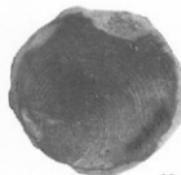
76



77



78



63



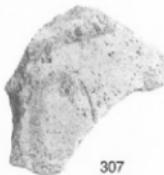
85



88



86



307

写真図版46

II区出土土器 4



87



89



90



95



91



92



97



94



96



96



99



104



105



106

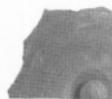
写真図版47  
II区出土土器5



109



100



101



107



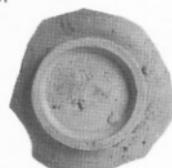
112



113



115

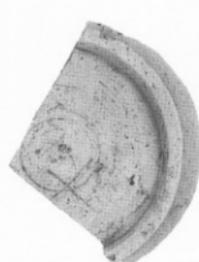


108

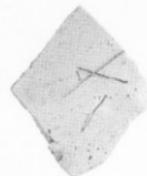
116



110



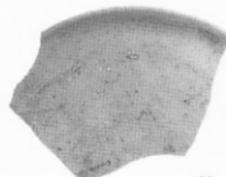
111



103



93



102



119



117



114



118

写真図版48

Ⅲ区出土土器 1



122



120



123



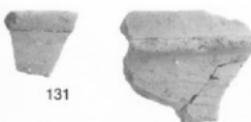
136



133

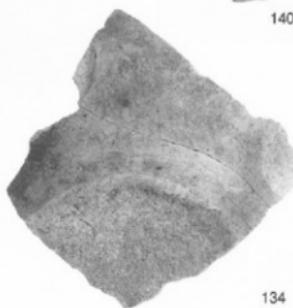


121



131

140



134



135

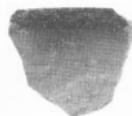
写真図版49  
Ⅲ区出土土器2



126



125



138



137



129



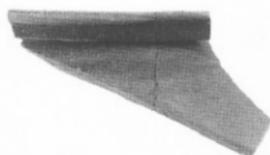
132



130



139



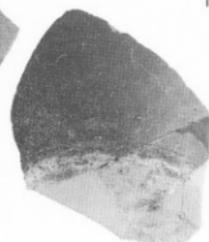
127



141



308



128

写真図版50

IV区出土土器 1



142



146



144



148



145



143



150



149



147



151



159

写真図版51  
IV区出土土器他2



161



164



154



162



165



155



166



167



170



169



173



174

写真図版52

IV区出土土器 3



175



171



168



160



157



158



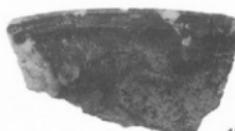
156



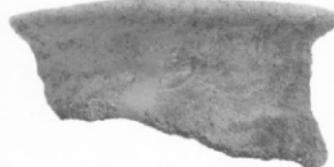
172



153



152



163



176



309

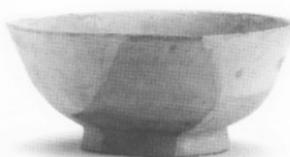
写真図版53  
V区出土土器 1



178



179



187



188



192



193



194

195



200



202



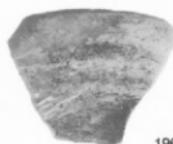
203



204

写真図版54

V区出土土器2



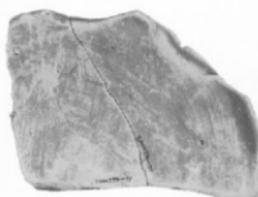
196



198



197



199



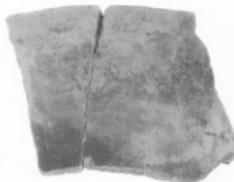
208



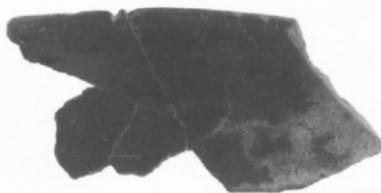
210



209



207



206

写真図版55  
V区出土土器他3



177



310



180



201



205



211



213



311



212



312

写真図版56

V区出土土器 4



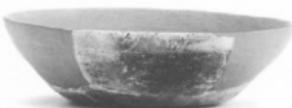
214



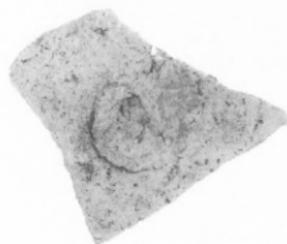
215



217



218



219



221



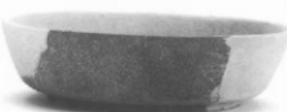
222



224

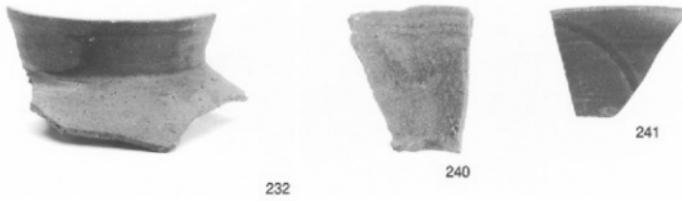
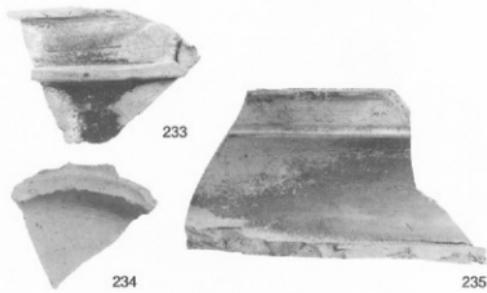
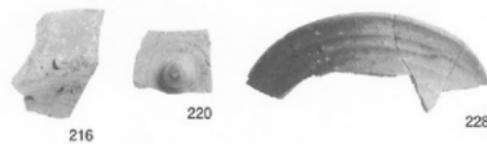


223



225

写真図版57  
V区出土土器 5

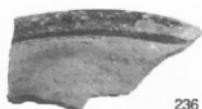


写真図版58

V・VI区出土土器他 6



237



236



238



239



314



315



316



317



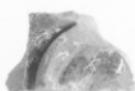
318



242

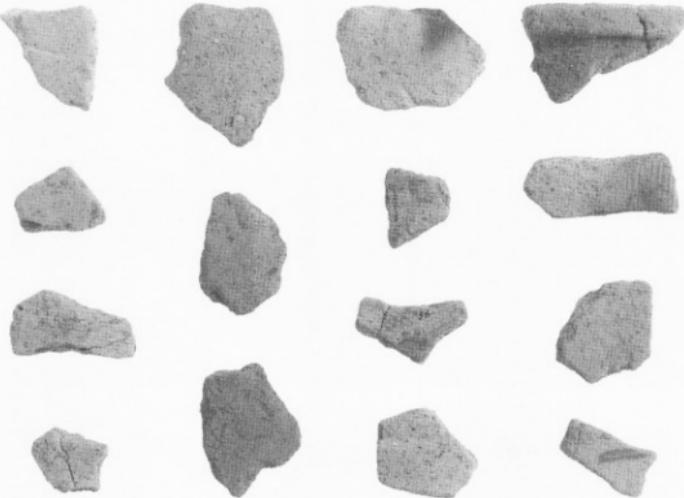
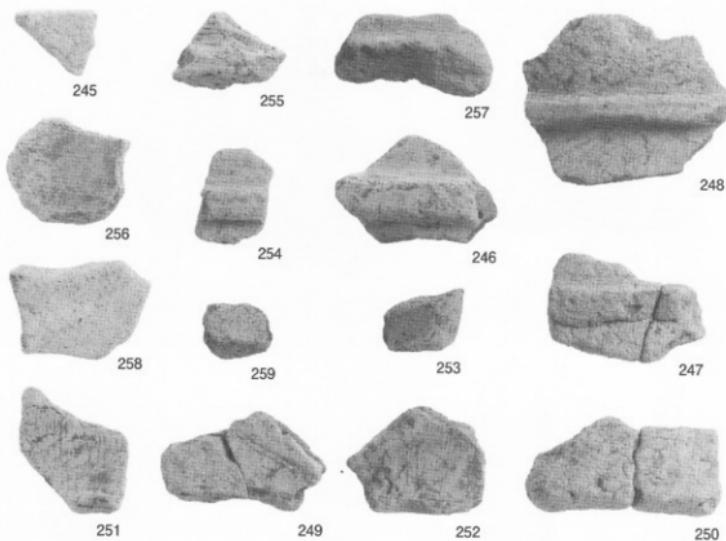


243



244

写真図版59  
出土埴輪



写真図版60

I 区出土木器 1



W1



W2



W3



W4



W8



W5



W6

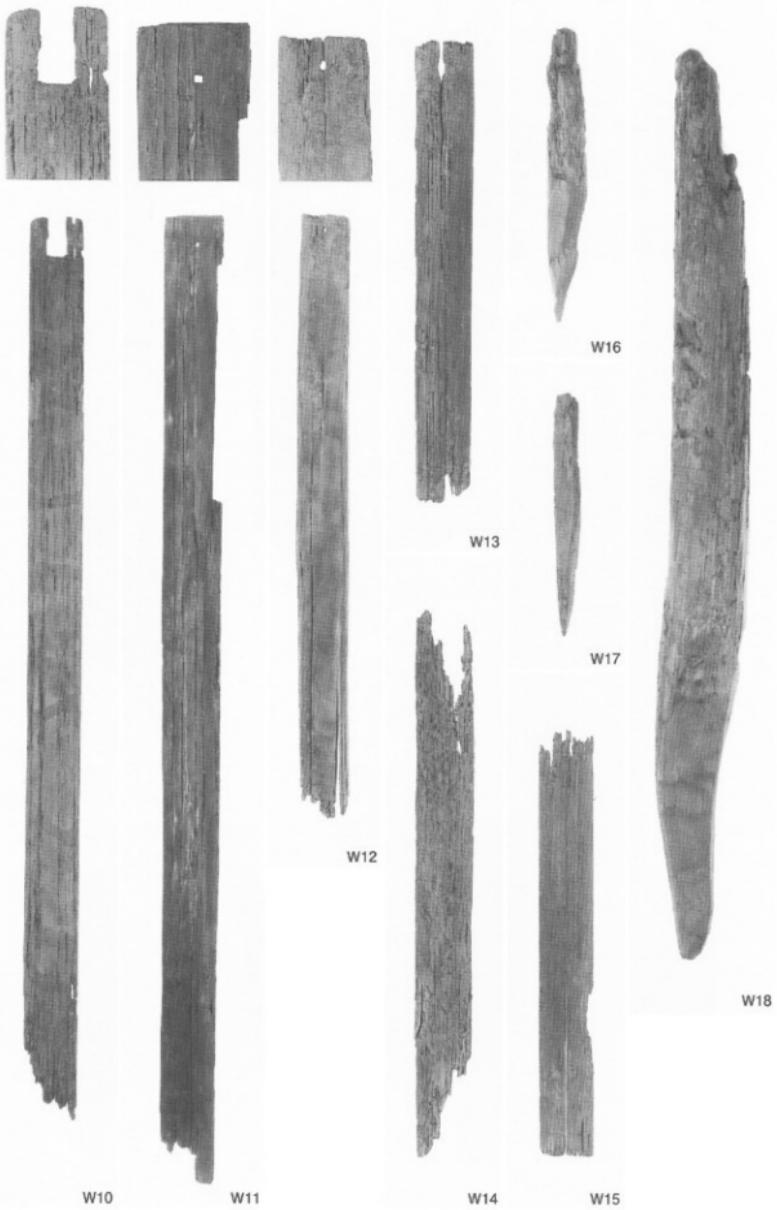


W7



W9

写真図版61  
I 区出土木器 2



写真図版62

II区出土木器 1



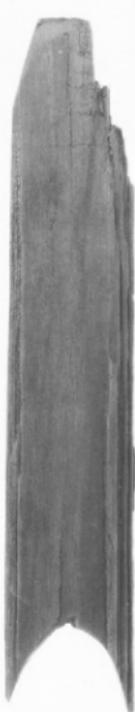
W19



W21



W24



W25



W20



W22



W23

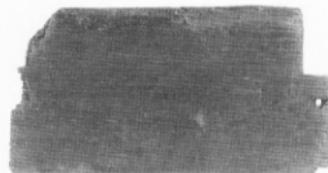


W26

写真図版63  
Ⅱ区出土木器2



W27



W28



W29



W30



W31



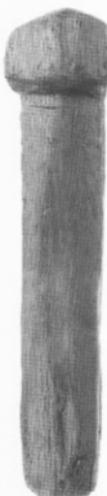
W32



W33



W34



W35

写真図版64

II 区出土木器 3



W36



W37



W38



W39



W40



W41



W42



W43

写真図版65  
II区出土木器 4



W44



W45



W46



W47



W50



W49



W48



W51

写真図版66  
Ⅲ区出土木器



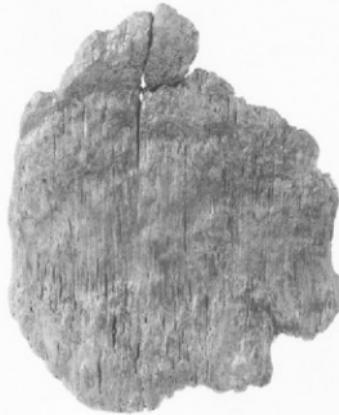
W52

W55

W56



W53



W54

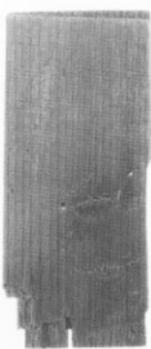


W57

写真図版67  
V区出土木器



W58



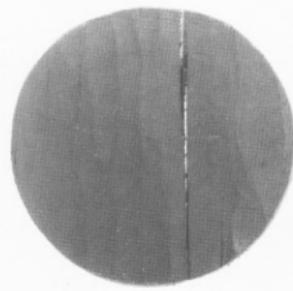
W61



W62



W63



W59



W60



W64



W65

写真図版68  
出土石器 1



S1



S3



S2



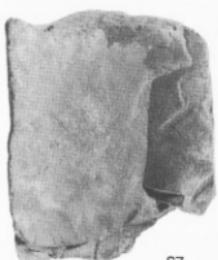
S4



S5



S6



S7



S8



S9

写真図版70

出土金属器他 1



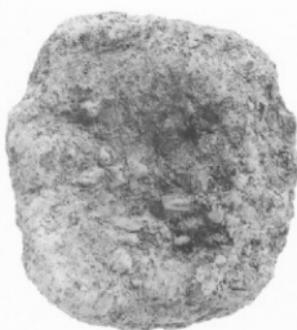
M1



M2



M3



|

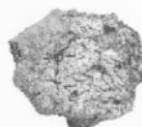


M4

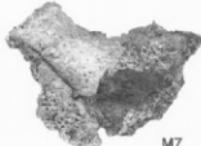


M5

写真図版71  
出土鉄滓他2



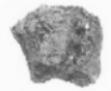
M6



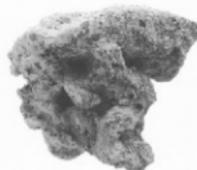
M7



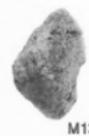
M8



M11



M12



M13

M17



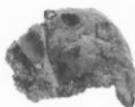
M16



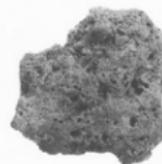
M14



M15



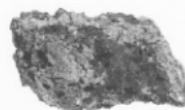
M18



M21



M19



M20

## 報告書抄録

ふりがな	つつえおおがきいがき							
書名	筒江大垣遺跡							
副書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路II）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ番号	兵庫県文化財調査報告 第335冊							
編著者名	別府洋二 池田正男 岸本一宏 株式会社古瀬堀研究所 藤田淳							
編集機関	兵庫県立考古博物館 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 TEL079-437-5589							
発行年月日	平成20(2008)年3月10日							
所取 遺跡名	所在地	市町村 番号	遺跡番号	北緯	東経	本発掘調査	調査面 積	調査原因
筒江大垣 遺跡						調査期間		
筒江大垣 遺跡	兵庫県 朝来市 和田山町 筒江 字大垣	28225	730611	35度 18分 35秒	134度 51分 37秒	1999.12~ 2000.03 2000.12~ 2001.03 2002.01~ 2002.01	3,708 m <sup>2</sup>	一般国道483号北 近畿豊岡自動車道 (春日和田山道路 II) 建設
所取 遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
筒江大垣 遺跡	集落址	飛鳥・平安・ 鎌倉・室町	掘立柱建物 溝 土坑 淀路	木簡・綠釉陶器 灰陶器・瓦器 黑色土器・墨書き 土器・常滑			茶すり山古墳・城址の跡にひろ がる集落跡。	

兵庫県文化財調査報告第335冊

### 筒江大垣遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道

(春日和田山道路II) 建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

平成20(2008)年3月10日

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 加古郡播磨町大中500

TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号